池波正太郎
信長と秀吉と家康

The story of three legendary conquerors



PHP文庫

信長と秀吉と家康

池波正太郎



PHP文庫

信長と秀吉と家康

池波正太郎



PHP文庫

○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○紋章＝上田晃郷

信長と秀吉と家康　目次

織田信長　5
豊臣秀吉　122
徳川家康　226

関ケ原の決戦　248
豊臣家ほろぶ　271
解　説　縄田一男

織田信長

りこうかばかか

応仁の乱の後、百年もの長い間、日本国中に、戦争が絶えなかった。
これが、いわゆる戦国時代といわれた時代である。
織田信長は、この国の乱れを鎮め、その強い力で天下を治めることができた、はじめての武人であり、大名であった。
信長は、少年のころから、「敦盛（あつもり）」という舞いにあわせた文句の中で、
「人間五十年。下天（げてん）のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり」
というのを好んだ。
この意味は、

「人間というものは五十年も生きれば、やがて死ぬものなのだ。そう考えてみると、世の中のすべてのことが夢か、まぼろしのようにしか思えない」

とでも、いったらよいだろう。

信長は十四歳のとき、父の織田信秀に従い、はじめて戦場に出た。そのとき、

「父上。人間というものには、ただひとつ、生まれたときから、はっきりとわかっていることがありますね」

と、いった。

「ふむ、それは何か？」

「それは、死ぬことです」

「なるほどな」

「それだけが、はっきりと判っています。あとのことは、どうなるかわかりませぬ」

いくら、戦国の世のことではあっても、十四歳の少年が、このようなことを考えていたことは、驚くべきことではないか。

父の信秀も、びっくりしたように、しばらくの間は、じっと、わが子の顔を見つめていたが、そばにいた家来の平手政秀へ、

「信長は、きっと、よい跡継ぎになってくれるであろう」

嬉しそうにささやいたという。

そのころは、長い長い戦争が続くうちに、天皇がおられる京の都も荒れ果ててしまい、天皇のかわりに国を治めるはずの足利将軍の力も、衰えてしまっていた。

つまり、本当ならば天皇を守り、将軍を助けるはずの武士たちが、それぞれに自分の国へ帰ってしまい、自分の国の町民や農民たちを従え、勝手に勢いをのばしはじめた。

だから、天皇も将軍も、身分の高い人々も、こうした武士たちの力を抑えきれなくなってしまっていた。実力さえあれば、どんなに身分が低くて、卑しめられていた者でも、上の者をおしたおして勢いを拡げるという世の中なのである。

昔は、将軍に命じられて諸国を守っていた「守護大名」という、武士の中でも身分がよく、力もあった人たちさえも、うっかりしてはいられなくなった。

信長の父、織田信秀も「守護大名」の家来だったのだが、そのうちに力を蓄え、尾張の国（愛知県）の中でも、その名と力の知られた大将になった。

信秀が二十五歳のとき、跡継ぎの子の信長が生まれた。

そのころ、織田信秀の城は那古屋（いまの名古屋）にもあって、信長は、いまの名古屋城の一角で誕生したのである。

少年のころの信長を、家来たちは、「あばれ法師」と、陰では、呼んだ。これは、信長の子供のころの名を「吉法師」といったからだ。

子供のころ、信長は、ひとりきりで、城の外へ出てゆき、平気で町や村の子供たちと友だち

になり、まるで、けだものの子のように野や山を駆け回ったり、もぎとったカキやクリなどを、むしゃむしゃ食べながら町の中を歩いたりした。

小さいころも、

「あのような若様では、殿様の立派な跡継ぎにはなれまい」

と、噂をされたほど、そのわんぱくぶりは、激しかったようだ。

それも、普通の暴れぶりではなかったらしい。

それは、父の信秀が死んだとき、信長がしたことをみてもわかる。

このとき、信長は十八歳になっていたし、美濃（岐阜県）の斎藤道三という大名の娘を妻にしていたほど、おとならしくなっていた。

その信長が、父、信秀の葬式がおこなわれていた万松寺という寺へ現われたのを見た人たちは、「あっ……」と驚いた。

頭の毛も自分で結んだまげで、むさくるしく、長い刀と短い刀を縄で巻いて腰へ差し、袴もつけずに現われた信長は、ずかずかと、仏前に、近づいた。

そして、いきなり、焼香につかう抹香をつかみ、父の位牌へ投げつけたのである。

これは、葬式のときにあげる線香を、父の死んだ体へ投げつけたのと同じことで、

「あばれ法師ではすまぬことになった」

「ばかもばか、大ばかものじゃ」

「いや、気がくるっている。気ちがいじゃ」
「あのような跡継ぎでは、織田の家も潰れてしまうことだろう」
たちまちに、この評判が広まってしまった。
しかし、信秀の葬式を見ていた旅の坊さまだけは、
「あの信長どのは、いまにきっと、偉い殿になるだろう」
と、いったそうだ。
誉めてくれたのは、この坊さまぐらいなもので、折角、亡き父の跡を継ぎ、織田家の主（あるじ）となった信長だが、
「これから、いったいどうなるのだろう」
家来たちも心配でたまらない。
相変わらず、信長は、裸馬にのって町や村を駆け回り、村の若者たちとすもうをとったり、酒を呑んだりしているのであった。
そのくせ、信長は、弓、槍、兵術などにも熱心で、何をやらせても、たちまちにのみこんでしまい、教える者を驚かしたという。
りこうなのか、ばかなのか……。
とにかく、信長のことを、
「大ばかで、気ちがいである」

という評判は、諸国の大名の耳へも聞えてしまい、

「まことに、困ったものじゃ」

と、父の代から織田家の家老をつとめている平手政秀は、ご飯ものどに通らぬほどだ。

無理もない。日本国中は、たくさんの力の強い大名たちが、それぞれの土地におり、自分たちの国の勢いをのばすことばかり考えている。

こちらに少しのすきがあれば、相手はすぐに攻めかかってくるし、そのいくさに負ければ、こちらの国はたちどころに相手のものとなってしまう。

油断も隙もない時代であった。

織田信長が父から譲りうけた尾張の国の隣にある三河の国（愛知県の一部）にも、駿河、遠江（静岡県）から今川義元が攻め込んできた。

そればかりではない。

信長が大ばか者だというので、信長の弟の信行が一部の家来たちと一緒になり、兄に背こうとした。

このたくらみには、信長の母も加わっていたというのだから、よほどに信長は、愛想をつかされていたものらしい。

家来たちの中には、

「今のうちに、今川義元のほうへ近づいておいたほうがよい」

と、思うものもでてきた。

だから、平手政秀は、

「殿様は殿様らしく、しなければなりませぬ」

何度も、若い主人の信長を諫めたが、少しもいうことをきいてくれない。

そこで政秀は、

「こうなれば、自分が死んで殿様を諫めるより、仕方がない」

決心をした。

そして、平手政秀は、信長を諫める長い手紙を書き、腹を切って死んだ。ときに、一五五三年（天文二十二年）というから、今から、およそ四百年以上も前のことである。

信長は、二十歳になっていた。平手政秀が死をもって、自分を諫めてくれたことを、信長は心の中で、おろそかにしなかった。

政秀の死をとむらうために、政秀寺という寺を新しく建てたことによっても、信長の心がわかる。

けれども、おもてむきは、信長のすることにあまりかわったこともなく、大ばか者とか、気ちがい大将とかの評判は、消えそうになかった。

「いったい、どれほどの大ばか者なのか、わしが、たしかめてやろう」

といったのは、信長の妻の父である斎藤道三であった。道三は、油売りの商人から身をおこ

し、美濃の国を治める大名に成り上がった豪傑だ。
娘をやったむこだからといって、それが頼りにも力にもならぬ男ならば、仕方もない。
「わしが、信長にかわって、尾張の国を治めてやろう」
と、道三は思っていたにちがいない。
「むこどのに、一度、会いたいものじゃ」
道三が、つかいの者を信長の城へさしむけると、
「承知いたしました」
すぐに、信長はこたえた。
信長が妻の父に会ったのは、富田というところにある正徳寺という寺であった。
斎藤道三は、早くから会見の場所へやってきて、
「信長め、どのような姿をしてくるか、そっと見てやろう」
といい、寺には千名ほどの家来を残し、自分は、町はずれの百姓の家へ入り、戸のすき間から、信長がやってくるのを見ようとした。
やがて、信長の行列がきた。
「ふうむ……」
それを見て、道三は思わず、唸り声をあげた。
行列は八百人ほどで、長い長い槍を五百本も立て、弓や鉄砲も五百ほど持たせた堂々たるも

のなのだ。

そのまん中に、馬にまたがった織田信長がいる。これを見て、また道三は、低い唸り声を出した。

いつものように、無造作な髪形で、着ているものは浴衣のようなものだし、袴もつけず、にゅっと、たくましい足をつき出し、腰には火打ち袋だの、ひょうたんだのをぶらさげ、刀には、縄を巻いている。

まるで、こじきの大将である。その、こじきの大将が、立派な軍隊を引き連れてやってくるのだ。

斎藤道三は、あわてて裏道を回り、一足先に寺へ戻った。やがて、信長が現われた。

道三は、ぎょっとした。

いつ、着替えたのであろうか。

信長は、きちんとした着物と袴をつけ、髪もきれいに結いなおし、立派な刀を差し、礼儀正しく義父の前へきて、あいさつをした。

道三は、また唸った。

ふたりの会見がおわり、信長が帰ってゆくのを見送っている道三に、

「やはり信長どのは、ばか者でございますな」

と家来のものがいった。

すると、道三は、苦々しい顔つきになって、いった。

「残念なことではあるが、いまに、わしの子供たちは、あの大ばか者の家来になることであろう」

清洲城攻め

織田信長は、二十歳のころから、急に、することなすことが変わってきた。

少年のころは、少女の美しい顔だちで、何かの祝いの席で、女の着物をつけて踊ったりすると、

「あの、あばれ法師が、こんなに美しい女に化けるとは……」

人々を驚かせたこともある。

その信長の美しい顔だちが男らしく引き締まってきて、細く見えた体つきも、なんとなく、がっしりと感じられるようになった。

そして、信長は、いままで胸のそこで、じっとひとりで考えていたことを、びしびしと実行に移し始めた。何よりも先に、自分の国の中を整えねばならぬ。

名古屋の城から二里（八キロ）ほど離れたところに、清洲の城がある。

この清洲には、織田信友がいた。信長とおなじ姓を名のる信友だが、ここの織田家は、信長

にとって、主人筋にあたる。
信長の父や祖父も、昔は、この清洲の織田家につかえていたのだ。
さて……。
この清洲の織田信友が、もとは家来筋にあたる信長を打ち倒そうとした。
今は、家来筋の信長のほうが、勢力も大きくなっているので、信友はくやしかったにちがいない。
ところが、信長は、このたくらみを早くも知ってしまった。
「よし！」
少しのためらいもなく、信長はおじの信光といっしょに清洲の城へ攻め寄せ、はかりごとをもって信友を倒し、ついに信長は清洲の城を自分のものにした。
このとき、織田信長は、二十二歳になっている。
信長は、本城を名古屋から清洲に移し、今度は、自分の家の始末にとりかかった。
弟の信行が信長に背こうとしていることは、すでに述べたが、いよいよ、この問題を片づけることにした。
信行は今川義元とも手を握り、兄を殺そうとしていたらしい。
信長も心を決め、
「自分はいま病気をしている」

と、いつわり、信行をだまして清洲城へよびよせ、城の中で切腹をさせた。

このように述べると、信長が卑怯のように見えるが、そうではない。

もしも、正々堂々といくさをしかければ、弟のほかに、弟についている家来たちとも戦わねばならない。

そうなれば、信長の兵たちにも、戦死するものがでる。

自分の兵も弟の兵も、すべて同じ織田の家来なのだから、このようないくさをしては、大変なむだになるし、損にもなる。

もとはといえば、弟の信行が兄に背くという不義をはたらいたのだから、弟ひとりを討てばよいと考え、おびきよせたまでであった。

そして、信行が死ぬと、信行の家来たちは、みな信長のもとへ帰ってきた。

つぎに、信長は、自分とは母がちがう兄の信広が背いたのを抑えつけてしまい、てきぱきと自分の一族の争いを解決し、尾張の国を、本当の自分の国にしてしまったのである。

それにしても、なぜ信長は、あのように「大ばか者」とか「気ちがい大将」とか、呼ばれるようなまねをしつづけていたのか……？

信長は、自分が「ばかもの」になることによって、弟たちや親類たちや、また家来たちや妻の父や、それから諸国の大名たちが、

「俺のことを、どのような目で見ることだろうか？」

それを試していたのかもしれない。

また、はじめのうちは、「ばか」といわれても、いざというときまで、自分の実力を蓄えておき、自分を倒そうとしているものたちを油断させていたのかもしれない。

けれども、いちばん、信長という人物を知るためには、

「俺は、いままでの古い習慣や、面倒くさいしきたりなどにとらわれず、俺は俺の思うままに生きてみせるぞ！」

という決心を実行に移したことが、他の人たちから見ると、

「あれは大ばかものだ」

に、なったと考えるべきであろう。

とにかく、日本の戦国時代も、ようやく新しいうつりかわりのときにさしかかっていた。

現代から、およそ四百年も前のそのころは、日本だけが戦国時代であったわけではない。

イギリスもフランスもイスパニア（スペイン）も、世界中が、戦国時代であったといってよい。

しかし、日本は、まだ外国の力がおよばぬ海に浮かぶ一つの島であったから、同じ日本民族の戦争が繰り返され、この戦争とはかかわりあいがない天皇がおられて、

「早く、力の強い、頭のすぐれた大名があらわれ、天下のさわぎを鎮めるように――」

と、考えておられた。

日本にはむかしから、天皇という国の中心があり、この中心だけは、なくなったことがない。

それだけに、

「天皇がおられる京の都へはいり、この都を治め、天皇の信頼を受け、天皇を守り、天皇に仕える」

ことが、天下を治めたことになるのである。

もちろん、そのためには、自分の国から京都へ続く国々を、すべて自分のものにしてしまわなくてはならない。だから、京都から遠くにいる戦国大名たちは、大変に不利なことになる。

越後（新潟県）の上杉謙信や、甲斐（山梨県）の武田信玄のように、戦争にも強く人柄も立派な大名たちが、ついに天下を治めることができなかった理由の一つは、このことにある。

そこへゆくと、織田信長は、いまの名古屋市に城を構えていたのだから京都へは近い。

天下をとるためには、都合がよいわけであるが、そのころの信長には、まだ天下を治める自信があったわけでもあるまい。

信長が、

「よし。このおれが日本じゅうの大名たちに頭を下げさせ、天下を治めてくれよう」

と、思いはじめたのは、あの桶狭間の戦いの後ではなかろうか。

強敵、今川義元

そのころ――。

今川義元は、駿河、遠江、三河の三つの国を、ほとんど自分のものにしてしまっていた。

「いよいよ、わしが京の都へのぼり、天皇と将軍のゆるしを得て、天下を治めるときがきたようじゃ」

と、義元は自信にあふれていた。

三河の国の松平元康（のちの徳川家康）も、今川義元に降参していたし、あとは、隣の国の織田信長をほろぼし、一気に京都を目指すつもりである。

まえまえから、織田と今川は何度も戦争をしつづけてきた。

信長の父、信秀に、今川義元が負けそうになったときもある。

「いまとなっては、信長ごときを踏み潰すのは、わけもないことじゃ」

と義元はいった。

それは、だれが見てもうなずけることであった。

もともと今川家は、足利将軍とも関係が深い、立派な家柄である。しかも、足利将軍の力は衰えてしまい、世の中は乱れている。

「わしが天下を治めなくてどうするものか」

という義元のほこりも、当り前であった。

そして、力の強い戦国大名の中では、今川義元が、もっとも京の都に近いところにいたので

ある。

しかも、義元は、関東の北条家の姫を、自分の子の氏真（うじざね）の嫁にむかえ、甲斐の武田信玄の子の義信へは、自分の娘を嫁にやった。

こうして、自分の国の後ろにある北条と武田の両家と親類になり、京都へのぼる自分の後ろを、脅やかされぬようにしたわけである。

さて――。

いよいよ、今川義元は四万（二万五千ともいわれる）の大軍を率いて、駿河（いまの静岡市）の城を出発した。ときに、一五六〇年（永禄三年）五月十日である。

十八日には、早くも信長の国である、尾張の沓掛（くつかけ）というところへはいってきて陣を構えた。

織田家では、大さわぎになった。

「いよいよ、今川が全力をあげて攻めかかってきたぞ」

「今川は、四万の大軍というではないか」

「それにくらべて、こちらは三千か四千。とても勝ちめはない」

むりもなかった。

このときの今川と織田の国の力をくらべると、今川の方が五倍か六倍ほども大きい。

軍隊の力も、およそ十倍というところだ。

「こうなれば、お城に立て籠って闘うより、仕方はありますまい」

と、家来の林佐渡守が織田信長にすすめた。すると信長がいった。
「城の中にいても、どうせ勝ちめはない」
「なれど……」
「だまれ。わしが大将じゃ。わしは、わしの思う通りにする」
思う通りにする、というのは、一体なにをするつもりなのか……。
「丸根の城も、あぶないそうでございます」
「鷲津の城も、まもなく敵の手に落ちましょう」
と、しきりに知らせがはいってくる。
この二つの城が落ちれば、今川の大軍は一気に、信長がいる清洲の城へ押し寄せてくることであろう。
それなのに……。
「まあ、みなのものは酒でものみ、今夜は、ゆっくりと眠れ」
などと、信長は平気で家来たちに酒をふるまったりしているのだ。
この五月十八日の夜は、風も絶えて、蒸し暑かった。
そして、丸根と鷲津の城は、ついに今川軍に攻めとられてしまった。

桶狭間の戦い

信長は、酒を呑んで、短い時間だが、ぐっすりと眠った。家来たちもいない部屋の中で、急に信長は、目を覚まし、

「だれか、おるか」

と、声をかけた。

「はい」

そばにひとりつきそっていた、小間使いの女でさいというものが返事をすると、信長が身を起こし、

「いま、何時ごろだ?」

「はい。夜中を過ぎました」

そこへ、数名の家来が心配そうな顔つきで入ってきた。

「出陣の仕度をせよ」

と、信長は命じ、いきなり立ちあがって、好きな敦盛の曲をうたいながら舞いはじめた。

「……人間五十年。下天のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり。ひとたび生をうけ、滅せぬもののあるべきや」

うたいおわり、着ものを脱ぎすてて、鎧をつけ、湯をかけた飯を立ったままで食べると、兜をかぶり、太刀をつけた。

「ほらを鳴らせ！」

と、信長は叫んだ。

清洲の城内に、

ぼおう……ぶおう……。

と、ほら貝の音が、わきおこった。

出陣の合い図である。

「馬をひけい！」

信長は馬にまたがると、自分の軍隊があわてて、出陣の仕度にかかりはじめたのに、これを待とうともせず、

「続け」

すさまじい勢いで、城の門から飛び出していった。

あとに従った家来は、岩室長門守など、たった五名であった。

このとき、織田信長は二十七歳。

どちらにしても勝ちめはないいくさなのだから、すべてを天運にまかせ、大将である自分がまっさきに立って、今川の本陣へ切りこむ覚悟なのである。

そう心にきめたときから、信長は、いっさいののぞみをすててしまった。

家来たちがついてこなくともよい。

織田の大将である自分が、敵の大将の本陣へ切りこむこと。これだけが、戦国の世に生きる自分のすることだと、覚悟をしてしまったのである。

だから酒も呑み、眠りもした。ぐずぐずともがいてみてもしかたがないと、思いきわめたからである。

このように、すさまじい覚悟をした主人の信長が飛び出していくのを見ては、家来たちも黙ってはいられない。

「それ、殿様におくれるな！」

「急げ、急げ！」

つぎつぎに仕度を整え、百騎、二百騎と、信長の後を追った。

名古屋をすぎ、熱田神宮までくると、

「われに勝たせたまえ」

信長は、いのりをささげた。

そのうちに夜も明けた。

家来たちも、兵隊をふくめて、千人あまりが集まってきていた。

「それ、進め！」

信長は、自分の軍隊には、少しも弱々しい顔を見せずに号令をかけた。
進むうちに、
「今川の本陣は中島にあります」
との知らせが入り、しばらくして、別の偵察の者が、
「今川の本陣は、大高の城へ入るために中島を出発し、今、桶狭間のあたりで休んでおります」
と、知らせてきた。
「よし！」
どこに敵の本陣があろうとも、つまるところは今川義元の首を討つことのみである。
信長は、ようやく二千あまりにふえた軍をひきい、桶狭間へむかった。
すでに昼ごろとなっていた。
風が出てきて、黒い雨雲が空をおおいはじめた。

一方、今川義元は連戦連勝の知らせをうけ、
「信長などは、ひともみに、揉み潰してくれよう」
すっかり上機嫌となり、田楽狭間まできて軍隊をとめ、ここに陣をはり、勝利の酒宴を開いた。
義元は、このとき四十二歳であった。

学問もあり、力もあった今川義元ではあるが、このときはすっかり織田信長をあなどっていたようだ。

田楽狭間も桶狭間も、だいたいおなじところで、現在の愛知県知多郡有松町の近くの、狭間（谷間）である。

午後一時ごろになると、雷がなりひびき、大雨になった。

織田軍は、今川の本陣を見おろす丘の上まで、静かに息を殺して進み寄っていた。雷や雨の音で、今川軍は、敵の大将が、みずから、こんなに近くまでやってきたとはおもってもみなかった。

なにからなにまで、信長にとっては幸運であったといえよう。

けれども、あのすさまじい決心を実行に移したからこそ、信長は、この幸運をつかむことができたのだ。

「かかれ！」

信長は鉄砲隊に一斉射撃を命じ、自分も槍をふるって先頭に立ち、勢いはげしく丘を駆け下った。

「うわあ……」

二千の織田軍は、なだれのように丘から敵軍めがけて突きすすんだ。

この思いがけぬ襲撃をうけた今川軍は、大いにあわてた。

何しろ、大将の信長が馬から飛びおり、槍をふるって突撃したほどの、恐ろしい意気ごみであったから、酒によって雨やどりをしていたような今川軍はめちゃめちゃに乱れたち、

「おのれ！」

大将の今川義元も大左文字の太刀を抜いてたたかったが、信長の家来、服部小平太の槍にわき腹を突きとおされた。

「うぬ、下郎め！」

と、義元が小平太の足をきりはらったとき、毛利新助という者が義元へくみつき、おし倒し、ついに今川義元の首を切ってしまった。

このとき義元は、新助の人さし指にかみつき、食い切ってしまったそうだ。

大将の義元が首をとられてしまっては、どうにもならぬ。それに、今川軍は、まさか織田軍が二千人ほどのものとはおもってもみなかったろう。

戦死者二千五百人余りを残し、今川軍は、ちりぢりに逃げてしまった。

戦いは二時間ほどでおわった。

勝利を得た織田信長の名は、天下にひろまった。

今川方についていた松平元康も、翌々年の一五六二年（永禄五年）に清洲の城へやってきて、信長と会見し、

「これからは、あなたの下にあって、働きましょう」

と申し出た。

そしてまもなく、松平元康は徳川家康と名のることになったが、このときの若い家康は、まさか後になって、自分が天下を治める徳川将軍になろうとは、思ってもみなかったであろう。

岐阜の城

信長は、隣の国の三河にいる徳川家康と手を結んでから、甲斐の武田信玄にも、

「これからは、いろいろと仲よくしていただきたい」

丁寧な挨拶を送り、たくさんの贈り物を届けたりして、少しずつ、親しみを得るようにこころがけた。

いよいよ、信長は、

「京都へのぼって、天下を治めよう」

と、思いはじめたようだ。

このころ、信長の妻の父である斎藤道三は、息子の義竜と争い、ついに父と子の戦いとなり、義竜の手によって殺されてしまっていた。

道三は、長男の義竜をきらい、次男の孫四郎や三男の喜平次をかわいがっていたから、

「父は、長男のおれに家を継がせるつもりはないのだ」

と、義竜はうらみに思い、父とふたりの弟を殺してしまったのである。

だから、桶狭間の戦いがあったとき、岐阜の城主は斎藤義竜になっていたわけだ。

義竜は信長にとって、妻の兄にあたるわけだが、

「こうなれば、義父の斎藤道三の仇を討つという、立派な理由ができたのだから、遠慮なく岐阜の城を手に入れることができるな」

と信長は思った。

尾張から京都へのぼるためには、まず美濃の斎藤家を降参させ、つぎに近江（滋賀県）を手に入れ、そこではじめて、京都へ近づくことになるわけであった。

ところが……。

桶狭間の戦いがあった翌年に、斎藤義竜は病気で死んでしまった……。

らい病にかかっていたのである。

義竜が死ぬと、その子の竜興が家をついだ。

竜興は、まだ少年だったし、しかも大名の家をつぐためには、あまりにも見込がない平凡な性質であったようだ。

「しめたぞ！」

と、信長は、自分の本城を清洲から小牧山へ移し、岐阜に攻めかかる準備を整えた。

斎藤家の城は、いまの岐阜市にある稲葉山（金華山ともいう）の上に築かれており、

「あの高い山の上の城を攻め落とすことは、なかなかたいへんだろう」
信長も、かねがね覚悟をしていたものだ。
はたして――。
美濃の三人衆と呼ばれる、力の強い家来たちが先頭にたち、少年の斎藤竜興をまもり、信長の軍が、たびたび攻め寄せていっても、うまくゆかなかった。
「これでは、いつまでたってもうまくゆくまい。なんとか、斎藤家の内側を乱れさせ、そのすきに乗じて城をとらねばなるまい」
信長は、こう考え、日頃から目をかけている家来の木下藤吉郎をつかって、まず斎藤竜興の家来たちを味方にひきつけることをはじめた。
この木下藤吉郎が、のちの豊臣秀吉である。
八年ほど前に、藤吉郎が信長の家来になったときは、身分の低いぞうりとりが、その役目であったという。それが、いまは一人前の立派な武士となっていた。
木下藤吉郎は、「太閤記」の物語でも知られているように、さるのような顔をしていて、
「さる、さる」
と、よばれていたようだが、織田信長は、この愛敬たっぷりな、そして機転のきいた木下藤吉郎を、
「はげねずみ」

とも、呼んでいた。

これは、もっとのちになってからのことだが、信長は次のような手紙を、藤吉郎（秀吉）の妻、ねねにあたえている。

「……このあいだは、わざわざ、いろいろなみやげものをもってきてくれて、ありがとう。しばらく見ないうちに、あなたが、とても美しくなり、りっぱなおなごになられたので、自分はびっくりしてしまった。

こんな美しい上品なあなたのことを、藤吉郎は、しきりに、ものたりない、なぞといっているようだが、まことにけしからん。

どこをたずねても、あなたのような妻は見つかるものではないのに、あのはげねずみは、まことにかってなことを申している。

まあ、いろいろほねもおれようが、はげねずみは、あなたの夫なのだから、よくめんどうみてやるがよい。

もしも、はげねずみが文句なぞを申したら、信長がこういっていたと、この手紙を見せてやるがよい」

およそ、このような、優しい思いやりのあふれた手紙なのである。

この手紙には、はげねずみなぞと呼びながらも、藤吉郎のことを信長がいつもかわいがっていたことが、よくわかるし、その妻に対しても、こまやかに気をつかっていて、これが血なま

ぐさい戦国時代に生きていた、大名の手紙とは思われぬようではないか。

「大ばかもの」とか「気ちがい大名」とか、噂された信長は、やはり、ふつうの「ばかもの」ではなかったのである。

一夜城のはかりごと

織田信長は、岐阜のまわりにいる斎藤方の大将たちを、つぎつぎに討ち倒し、または味方につけていった。

鵜沼の城にいた大沢基康という敵方の大将を味方にしたときなどは、

「わたくしが、人質にまいりましょう」

と、木下藤吉郎が大胆にもひとりで敵の城へのりこんでいった。

人質というのは、争いをやめて仲よくしようという約束のしるしとして、大切な人間を敵がたへ渡すことをいう。

信長の大切な家来である藤吉郎が、みずから人質になったので、大沢基康も、

「このような立派な家来をもつ信長公なら、味方をしても悔いはあるまい」

心をきめて、ついに自分の城を信長へ渡し、味方になった。

このように、木下藤吉郎の働きぶりは、命と体を惜しまず、何事にも、てきぱきとしたもの

だから、

「さるよ。はげねずみよ」

と、信長は、いよいよ藤吉郎をかわいがるようになる。

こうした場合には、ほかの家来たちが藤吉郎のことをねたむようになるものであるが、あまり、そうしたこともおこらなかったようだ。それも、木下藤吉郎の、ほがらかで、愛敬のある人がらが、だれにも好かれたからであろう。

「では、藤吉郎。いよいよ、始めようか」

と、信長が稲葉山城へ総攻撃をかけるため立ちあがったのは一五六六年（永禄九年）の秋であった。

信長は、木下藤吉郎がもち出した計略をきいて、

「よし、それでゆこう」

と、きめた。

その計略とは……。

まず、信長は、

「わしは、これより、伊勢の国へ向かうぞ」

しきりに、伊勢（三重県）の大名、北畠具教（きたばたけともつり）を攻めるといいふらした。

岐阜の斎藤方では、

「なるほど、こちらの城の守りが堅いので、信長はあきらめたと見える。だから伊勢のほうへ手を伸ばしたにちがいない」

ゆだんをしていた。

ところが、信長は、大軍を率いて伊勢へむかうとみせ、夜になると、たくさんの材木をいかだにくみ、これを木曾川の上流から流させ、

「それ、急げ」

夜の闇にまぎれ、一気に、小牧山の城から墨俣（すのまた）というところへついた。

この墨俣というところは、岐阜の稲葉山城の南、およそ十キロメートルあまりの近くにあり、長良川の岸でもある。

いっぽう、木下藤吉郎は、木曾川の上流から流れてきたいかだをひきあげて墨俣へはこび、織田全軍が力をあわせ、たちまちに砦を築いてしまったのである。

砦というのは、小さい城のようなものだ。

目と鼻の先に敵の陣地もあるのに、こうして一夜のうちに墨俣の砦が現われた。この砦が墨俣の一夜城（いちやじょう）と、のちに呼ばれることになった。

信長と藤吉郎でなくては、思いつかぬ芸当であった。

稲葉山城では……。

夜があけてみると、

「やあ、たいへんだ」
「墨俣のあたりに、砦が見える」
「織田軍の旗印が、あのようにたくさん立ち並んでいるぞ」
みな、びっくりし、気をのまれてしまった。
「それ、攻めよせろ！」
というので、斎藤軍が、すぐに墨俣へ攻めよせてきた。
砦は、まだ全部できあがっていたわけではないが、敵の攻撃を支えるだけの形にはなっている。
「さあ、こい」
木下藤吉郎は、たくみに敵を防ぎながら、残りの工事をすすめ、三日ほどのうちに砦を完成してしまった。
このように、打てば響くような藤吉郎の活躍には信長も大満足であった。
「美濃の国を平らげたなら、おまえにも、うんとほうびをやろう」
と、いった。
藤吉郎は、なおも働いた。
稲葉山の山伝いに、七人ほどの家来を連れたきりでしのびこみ、敵の城へ近づき、うまく敵方の兵士に変装してしまった。そうして、敵軍にまじり、城の中へ紛れ込んだのである。

そして、酒をいれるのにつかうひょうたんを、竹の先にむすびつけ、これを城内からつき出した。

「どうぞ、攻めてきてください」

という合い図であった。

信長は、外から城へ攻めよせてきた。

藤吉郎は、水門口から味方の軍隊を引き入れ、城内へ火をつけてまわった。

城の中に、このような、恐ろしいものが潜んでいたとは斎藤軍は、すこしも知らない。たちまちに、大騒ぎとなった。

炎とけむりがあがる中に、織田軍がときの声をあげて攻め入ってきた。

これでは、たまったものではない。ついに、稲葉山城は攻めおとされてしまった。

斎藤竜興は、信長に降参した。

これで、ようやく、織田信長は、念願だった美濃の国も手に入れることができたのである。

信長は、小牧山から岐阜へ、自分の本城を移した。

そして自分の思うような大きい、立派な城を築きなおした。

そのころ、ポルトガルの国から海を渡って日本へやってきた宣教師のルイス・フロイスは、自分が著わした本の中で、

「わたしは、ポルトガルを出て、インドから、この日本へはるばるとやってきて、いくつもの

国々を見てきたが、このように素晴らしい宮殿を見たことがない」
と書き、信長の岐阜の城の立派さをほめている。
岐阜へ来てから、信長は、
天下布武
の四字を彫った印をつかうようになった。この字の意味は、
「自分は、自分の武力をもって天下を治めてみせる」
という、信長の決心をあらわしたものである。
とにかく、戦国に勝ち残ったものが日本中を治める人となるのだ。そののち、世の中は平和になるであろう。しかし、それまでは、なんとしても戦いぬかなくてはならぬ。
京都の天皇からも、
「しっかりたのむ。そして一日も早く、世の中に平和がくるように望む」
という手紙が、信長へとどけられた。
いまや、織田信長の威勢は、日本中に轟きわたった。

足利将軍

尾張から美濃へすすんだ織田信長は、正親町（おおぎまち）天皇から、

「あなたは、古今無双の名将である」

と、ほめたたえられるほどの勢いになったわけだが、まだ京都までの道は、険しかった。

上洛の望みを果たすためには、近江の国を手に入れなくてはならぬ。

「わしは、きっとやってみせる。このように天皇の御信頼をうけたことは、百万の味方を得るにもまさったことだ」

信長は勇気にみちみちていた。

やすむ間もなく、信長は、その準備にとりかかった。

これまでに、織田家は徳川家康や武田信玄などと、親しい交わりを結ぶようになっていたが、さらに信長は自分の養女を、武田信玄の子、勝頼と結婚させた。これで、甲斐の英雄といわれた武田信玄とは親類づきあいの間柄となったわけである。

むろん、親子兄弟の間でさえ、いざとなれば敵味方にわかれてたたかいあう世の中であるから、織田にしても武田にしても、このような縁を結んだからといって、油断はできない。

けれども信長は、どこまでも頭を低くして、武田信玄との交際に、ひびが入らぬように気をつけた。

また、信長は自分の妹のお市を、近江、小谷の城主、浅井長政と結婚させた。

こうして浅井家とも縁を結んでおき、岐阜城へ攻めかかったのであるから、まことに用意周到な信長のこころくばりであった。

岐阜の城主となってからは、たびたび、京都の天皇にたいしても、こまやかなこころづかいを示した。そのため、信長への信頼は、

「早く織田どのが京へ来てくれればよい」

と、朝廷の間に深まるばかりとなった。

こうなれば、あとは自分の力で天下を取るだけのことだし、天皇に好まれている信長ならば、だれも文句をつけるはずがない。

もともと、織田家と皇室との関係は、悪いものではなかった。信長の父、織田信秀が、まだ元気でいたころのことだが、

「わしにできることならば、京都へはいって、天下を治めたいものじゃ」

信秀は、そう考えていたらしい。

だから、皇居の修理をするための費用など、しばしば朝廷へ金や贈り物をしたりしている。

そのころは、日本国中どこでも、大きな戦争や小さな争いがおこなわれており、天皇や朝廷のことに気をつける大名が少なかった。

天皇や、天皇の家来である公家たちは、まことに、ひどい暮らしかたをしており、それだけに、後奈良天皇は、

「織田信秀は、よくも心を配ってくれてうれしい」

と、いわれ、連歌師の宗牧というものに、手紙と古今集をことづけ、信秀に贈ってこられた

りした。

こうしたことがあっただけに、信長にも亡き父の考え方が、強く伝わっていたのであろう。

これは、あの桶狭間の決戦があった少し前のこと、織田信長は、わずか三十人ほどの家来を連れただけで、

「ちょっと、京見物へいってまいる」

そっと、京都へ出かけたことがある。

当時は、まだ岐阜城に斎藤義竜がいて、

「信長は、わしの家と縁をむすんでいるが、まことに油断のならぬ男だ」

と、思っており、たえず間者を出して信長の様子をさぐらせていた。

その間者たちが、

「上総介どの（信長のこと）が、わずかな家来をつれただけで、そっと京へのぼりました」

と、知らせてきたとき、斎藤義竜は、

（よし、そっと信長を殺してしまおう）

腕のきいた刺客を十数名、京都へ送った。刺客というのは、不意に相手を襲って殺すための者たちである。

ところが……。

京の町中で、織田信長と、斎藤方の刺客たちが、ばったり出会ってしまった。このとき、信

長がずかずかとすすみ出て、

「わしを殺せるものなら殺してみよ！」

いきなり、どなりつけると、もう刺客たちは、その勢いにのまれてしまい、手も足も出ずに、こそこそと逃げてしまったという。

このとき、信長は京都で、足利十三代の将軍、義輝の機嫌伺いをしている。

なんといっても、そのころの日本の国には天皇と将軍という二つの柱があって、国を治めているという考えかたを誰もがもっていた。

諸国の大名や武将たちは、それぞれに争い、戦いを繰り返しながらも、この大きな柱を利用して天下を取らなくては、国民に対しての名目もたたぬし、信頼を受けることもできない。

織田信長が斎藤氏を滅ぼして岐阜の城主となったとき、将軍の義輝は、すでに殺されてしまっていた。

義輝を殺したのは三好、松永などという大名たちで、彼らは義輝のいとこにあたる義栄（よしひで）を、勝手に足利十四代の将軍にしてしまった。

殺された足利義輝には義昭という弟がいて、奈良の一乗院の坊さんになっていたのだが、兄が殺されたのを知ると、

「ここにいては、危のうございます」

家来の細川藤孝のすすめもあり、奈良を逃げだして近江の六角義賢（ろっかくよしかた）という大名を頼ったり、

その他ほうぼうの大名のもとへ身をよせて、助けをもとめた。

足利義昭は、そのうちに越前（福井県）の大名、朝倉義景の世話をうけることになり、

「あなたの力で、兄を殺し、京都でいばっている三好や松永を追い散らし、あのものたちが、勝手につくりあげた足利将軍をやめさせ、自分を亡き兄の跡継ぎにしてもらいたい」

しきりに、頼んだ。

大名たちは、将軍を利用して、天下を取ろうとしている。義昭は、その大名たちを利用して、自分が将軍の位につきたいと考えている。

（兄のかたきを討ち、自分が将軍になったなら、諸国の大名どもをうまく操り、そのうちに機会をみて、足利将軍の力を、昔のように大きく拡げてゆき、しまいには大名どもの頭をおさえつけてやろう）

と、義昭はひそかに、心を決めていたのだ。ところが、朝倉義景は、

「いましばらくは、わたくしのところにおられて、静かに時をお待ちなさい」

なかなか、京都へ出ていってはくれない。

朝倉としても、そうすぐには腰をあげられないのだ。何しろ、加賀や越前の国には一向宗という仏教徒がたくさんいて、大名たちのいうことをきかず、油断をしていれば武器をもって戦う勢いをしめしているので、その始末もつけずに京都などへ出かけるわけにはゆかないのである。

こうしたときに……。

「ようやく斎藤氏をほろぼして美濃の国を手に収めましたから、あなたのお世話もできるようになりました。ぜひ、わたくしのところへおいでください」

と、織田信長が使いをよこした。

（これは、うまい）

足利義昭は大よろこびであった。

信長、京へ

義昭は、まえから信長の力のすぐれているところへ目をつけ、家来の細川藤孝をつかいにやって、

「わたしの力になってくれ」

と、頼んでいたのである。

だから、義昭は、いままで親切に世話をしてくれた朝倉義景のもとを、さっさと飛び出して信長のところへいってしまった。

面白くないのは朝倉義景であった。足利義昭に対しては、

「いままで、わしがつくしてあげたこともわすれ、あまりに勝手な……」

と思ったし、織田信長に対しても、

「礼儀を知らぬやつだ」

と、怒った。

そして、信長から、

「足利義昭殿の頼みによって、京都へのぼらねばならぬから、力をかしてもらいたい」

と、いってきたときも、

「そのような、身勝手な頼みがきけるものか」

少しも、力を貸そうとはしなかった。

こうして、朝倉家と織田家とは仲が悪くなるばかりとなり、ついに、これが原因となって、信長の妹のお市までが、両家の争いに巻き込まれることになるのである。

お市が、近江、小谷の城主、浅井長政の妻となっていることは、すでに述べておいたが、信長は浅井のたすけをえて岐阜から近江へ入り、六角、蒲生などの大名たちを攻めおとし、十日もたたぬうちに、近江の南の地を手に入れてしまった。

これより先に、早くも信長は伊勢の国のほとんどを自分のものにしてしまっている。

この勢いに、京都にいた三好三人衆とよばれる阿波の国（徳島県）の大名たちは、

「とても、かなわぬ」

たちまちに京都からひきあげてしまったので、信長はらくらくと京の都へ入ることができ

た。

京都では、力の強い織田の軍隊がやってくるというので、

「どんなことがおこるかしれたものではない」

人々は、恐れおののいていたらしいが、いざ織田軍がやってくると、兵隊たちは、少しも乱暴をせず、かえって三好の党がいたときよりも都の様子が、穏やかになったほどだ。これは、大将の信長が、

「けっして乱暴をしたり、無茶なまねをしてはならぬ」

と、自分の軍隊へ命じていたからである。

こういうときに、家来がいうことをきかぬと、信長は少しも許さなかった。

のちに、信長が足利義昭のために屋敷を建ててやったときのことだが、一人の兵士が、工事を見物している女にいたずらをしかけたところ、ちょうど工事の監督をしていた信長がこれを見つけ、

「何をするか！」

かけよって、たちまちに、その兵士の首を切ってしまった。

現代からみれば、少しむごたらしいことと思うかもしれぬが、そのころは親子兄弟でも血を流し合って戦うこともある恐ろしい時代なのだから、することは思いきってしなくては示しがつかなかったのであろう。

信長は、こうしたときに、いささかも手加減をすることがなかった。

こういうわけで、織田信長の人気は、京都でも上がるばかりとなったのである。

京都から逃げた三好や松永は、十四代将軍の足利義栄とともに、しばらくは信長に手向かいをしたが、とても勝てるわけがない。

それぞれに逃げたり、または降参したりして、京都を中心にした国々が、ことごとく信長の指揮のもとへ入ることになったのである。

こうして、足利義昭は十五代目の足利将軍になることができた。

「これもみな、あなたのおかげじゃ」

義昭は信長の手をとって、おしいただき、

「あなたに副将軍になってもらいたい」

と、いったが、

「いや、それはご辞退いたします」

堅く断った。

「では、あなたの好きな国をあげよう」

「ご心配には及びませぬ」

「それでは、わたしの心がすまぬ」

「では、堺の町と、大津、草津の二か所をわたくしにいただきたい」

「国ではなく、町がほしいといわれるか？」
「はい」
「よろしいとも」
こうして、信長は、この三つの町を自分のものとし、代官をおいた。
町は町だが、この三か所は大変に重要なところであった。
堺の町は外国との貿易が盛んなところで、商人の力が強い。大津と草津は、信長の城がある岐阜から京都への道中にある交通の要地である。
これからの天下を治めるためには、ただ力が強いというだけではいけない。金も大切だし、商人や百姓たちの力も借りなくてはならぬ。
（武士だけの世の中ではないのだから……）
と、いつも信長は考えていた。
やがて、織田信長は京都を出発し、岐阜の城へ帰った。
将軍、義昭は、
「あなたの武勇は天下第一である。これからも日本の国を治めるために骨をおっていただきたい」
と、礼を述べた。
だが、信長は、この将軍の家来になるつもりはない。

（自分は自分のやり方で天下を治めてやろう）

と、思っていたからだ。

岐阜へ帰ってまもなく、信長は一五六九年（永禄十二年）の正月を迎えた。今の年の数え方でいうと三十六歳になったのである。

天下人への野望

織田信長にとっては、まだ大敵が前にも後ろにもいた。

武田信玄や上杉謙信の軍隊は、非常に強く、まともに戦ったなら、信長の軍隊でもかなわないだろう、といわれたほどである。

ただ、武田は甲斐の国、上杉は越後の国にいて、冬のころになれば、降り積る雪に邪魔をされ、はるばると中央へでて、京都へのぼることが難しくなる。回りにいる敵も少なくはない。それだけに、気候もよく京都とは目と鼻の先まで進んでいる織田信長とくらべて、はるかに不利であった。

（だが、武田と上杉は、もっとも恐ろしい相手じゃ）

信長は、いささかも油断しなかった。

信長は養女を、武田信玄の息子の勝頼の嫁にやっていたが、今度は、信玄の娘を、

「自分のせがれ、信忠の嫁にいただきたい」
と、信長は申し込んだ。
武田信玄は、承知をした。
（信長は、わしと仲よくしておき、その間に、すっかり天下をとる準備をしてしまうつもりなのじゃな）
と信玄にはよくわかっている。
わかっていながらも、
（いずれは、織田信長とわしとが、天下を争う大決戦をすることになろう）
と覚悟を決めていた。
それはさておいて、ともかく天下とりの先頭を走りはじめたのが信長であることは、誰もが、認めないわけにはゆかなかった。
自分が住む城から京都までの道筋を、信長は貫き通したのである。
だから、いざとなれば、すぐに京都へ駆けつけることができた。敵が京都へ入ってくれば、たちまちに岐阜から出陣してこれを追い払うことができたし、新しい将軍のために二条城を造り、長い戦争が続いた京都の町の復興に力を注ぎ、皇居を新しく建て直したりした。
こういう仕事をするたびに、
「織田信長という大名の実力はたいしたものだ」

と、世の中が認めることになる。

それを、信長はちゃんと計算に入れていたのである。

また交通を便利にするために諸方の道を拓き、商人たちが自由に商売できるような市場を開いたりした。

戦争をするばかりでなく、新しい国造りをするというやりかたは、これまでの大名たちが、したこともないことであった。

ことに、信長は堺の町や港を、重く見ていた。

そのころの堺は、大阪と京都をひかえた貿易港で、素晴らしい発展を見せていたのである。

外国の文化は、皆、この港から日本の中央へ流れこんできた。

火薬も鉄砲も入ってきたし、ギヤマンの皿も杯も、宝石やぶどう酒も、持ち込まれた。

外国から仕入れた、このようにめずらしく高価な品物を扱う堺の商人たちのふところはゆたかで、その金の力で、武士たちを雇い入れ、

「堺の町は、われわれの手で治めるのだ」

と、商人たちは、その権力を誇っていた。

町でありながら、ここは一つの国であったといえよう。

だが、織田信長の前には堺の商人たちも頭を下げた。それほどに、信長の威勢は強大なものとなっていたのである。

信長の軍隊の力はともかく、なによりも信長にとって力強い味方は、自分の国（尾張、美濃、その他）の村々が豊かな作物を実らせ、村々を取り締っている侍や豪族を、信長がしっかりとつかまえていたので、その国力が、ほかの大名たちにくらべて特別にすぐれていたことであった。

ということは……。

「この殿様についていれば、決して、間違いはない」

と、家来も豪族も、商人も百姓も、信長を信頼していたからであろう。

「さあ、これでよい」

信長は、自信にみちあふれていた。

家来たちも、

「殿様が天下人となるのは、もうすぐだ」

と、思いはじめた。

但馬の国（兵庫県）を攻め、生野の銀山を手に入れたし、伊勢の南にいて、まだ信長のいうことをきかなかった北畠具教のいる大河内城も攻めおとした。

ところが……。

このころから将軍の足利義昭と織田信長との仲が悪くなってゆくのである。

「あなたは、わたしの父のようなお人である」

と、将軍が感謝していたほどの信長なのだが、

「あの将軍ではとても、天下を治めることはできぬ」

信長のほうでは、そう思っていて、心から将軍義昭に仕えようとしてはいない。

ポルトガルから海を渡って日本にきていた耶蘇教の宣教師フロイスが、岐阜の城へやってきて、

「キリストの教えを日本にひろめようとしているのですが、思うようにゆきません」

と信長に訴えた。

それはそうであろう。

日本には仏教という宗教がくまなくゆきわたっていて、お寺や坊さんの力が大きく強い。

洋服を着た青い目の外国人が、妙な教えをひろめるのを、黙って見ているわけにはゆかない。

坊さんたちは将軍や天皇にたのみ、キリスト教を日本から追いだすようにした。

しかし、信長はキリストの教えが日本にあってもよいと考え、フロイスを、いろいろと親切にもてなしてやっている。

信長は、フロイスにこういった。

「皇室や将軍よりも、天下のことはすべて自分がはからっているのだから、自分のいうことを信じなさい」

これでは、将軍義昭も面白くなかったろう。
（信長は、将軍のわしを認めておらぬようなまねばかりする。まことにけしからぬ）
だから将軍は、密かに甲斐の武田信玄へつかいをやり、
「早く京へきて、わたしをたすけ、織田を追い払ってもらいたい」
と、申しこんだりした。
信玄も、いずれは天下をとるつもりだから、
「よろしゅうござる」
うけあって、駿河の国の一部を義昭へ贈ってよこした。
こうなると織田信長も、黙ってはいない。
「あの将軍は、わしが思っていた通りの、頼りない男だ。あれだけ、わしがたすけてやったこともわすれて、武田と手を結ぶなどとは、まことに油断がならぬ」
たちまちに、京都の将軍へ、
「あなたが、諸国へ命令をするときは、前もって、かならずわたしに知らせなくてはいけませぬ。また、今までにわたしが知らなかった将軍の命令は、すべて取り消しにすること。また天下のことを信長におまかせになった以上は、何ごともわたしの意見に従ってもらわねばなりませぬ」
ときびしく、いってやった。

これで、将軍義昭は、

（だまっていては、信長のために、手も足も出なくなる）

あわてて、こんどは前に身をよせていた越前の朝倉義景へ、密かに使いを出し、

「どうも信長がいばっていてこまる。なんとかたすけてもらいたい」

と、いい送った。

背後の敵

将軍と朝倉義景との結びつきを考えると、信長もうかうかとしてはいられない。

すでに、朝倉へは、

「いちど、将軍のきげんをうかがいに京都へ出てまいられい」

と、信長から申し渡してあったのだが、

「そんなことをしたら、あの腹黒い信長に首をとられてしまう」

朝倉義景は、いうことをきかなかった。

これはもう、織田信長を敵とみなしているからだといってよい。

「よし、早いうちに朝倉を滅ぼしてしまおう！」

ついに、信長は決心をした。

一五七〇年（元亀元年）の四月――。

北国の雪がとけるのを待っていた信長は、徳川家康にたすけをもとめ、三万余りの軍隊を率いて越前へ攻め入り、まず、日本海にのぞむ敦賀の城二つを落とした。

この城は、朝倉家にとっては、前にそなえる大切な城である。朝倉の本城は、いまの福井市の南方十五キロメートルほどのところにある、一乗ケ谷に構えられていた。

「それ、一気に攻めおとせ」

信長は、休む間もなく一乗ケ谷へ進もうとした。

ところが、このとき、信長がまったく考えてもみなかったことがおこった。

信長の妹のお市を妻にしている浅井長政が、朝倉方に味方して信長の軍隊の後ろから攻めかかろうとしたのである。

浅井長政の小谷城は、滋賀県、長浜市の北方八キロメートルのところにあって、信長は、琵琶湖をのぞむ浅井の領国を通りぬけて越前の国へ攻めこんだわけだから、浅井長政が自分を裏切り、敵の味方についたとなれば、岐阜へかえることが難しくなる。

「おのれ、長政め！」

むろん、信長は、激しくおこった。こういうことにならぬため、妹を嫁にやってあるのだし、

「あの浅井長政だけは、わしを裏切るようなことはあるまい」

かねがねいっていただけに、よほど、悔しかったものとみえる。

「今に見ておれ」

ぎりぎりと歯をかみしめ、信長は、こうなれば朝倉よりも先に浅井を徹底的に滅ぼしてしまわねばならぬときめたのである。

だが、今のところはまず、逃げなくてはならぬ。朝倉と浅井に、挟み討ちをされたのでは、たまったものではない。

織田と徳川の両軍は、あわただしく若狭方面の山道を抜け、危ないところで、やっと京都へ逃げかえった。

負けず嫌いな織田信長にとって、これは、たまらなく、悔しいことであった。

「わしは、朝倉を攻めることについて、わざと浅井には知らせなかった。それも、むかしから朝倉と浅井の交際がふかく、仲もよかったことを考え、浅井長政に心配をかけたくなかったからだ。その、わしの心を踏みにじり、浅井長政は、よくも、義理の兄であるわしを裏切ったな！」

岐阜へもどった信長は、たちまちに仕度を整え、今度も徳川家康のたすけをもとめたが、その家康の軍がやってくるのも待たず、三万あまりの軍隊を率いて出発した。

ここで、浅井長政が信長の妹を妻に迎えたときの約束を述べておこう。

それは、

「妹ごを妻にむかえるのはよろしいが、わたしの家と朝倉家とは、昔から親しい間柄であるから、もし、これから織田と朝倉が争いごとをおこすようになると、わたしの立場が困る。朝倉と争わぬと約束してくださるなら、承知いたす」

というものであった。

信長は、この約束を守ると誓い、そこで両家の縁組が成ったわけだ。

ところが、今度の朝倉攻めになったので、長政よりも、父の久政が怒ってしまった。

「それ見よ。信長というやつは、このように平気で約束をやぶる男だ。われらに何ごとも知らせず朝倉を攻めたのは、きっと、このあとに浅井も滅ぼそうと決めているからにちがいない」

しかし、長政は、この父の意見に反対であった。

（信長も、昔の信長とはちがう。いまの信長は目の前の天下をつかみかけているほどの大名である。この浅井長政を滅ぼそうなぞと思ってはいまい。朝倉にしても、ただ信長がにくいからといって、力を合わせようとしないのがいけなかったのだ。ここのところは信長に背いてはならぬ）

と長政は思ってもいたし、父にもいった。

けれども、いつまでも古い考えにとらわれている父の久政は、がんこな老人で、息子のいうことなどきこうともせず、家来たちの多くは父の言葉に従ったので、長政としても、どうすることもできなかったのである。

長政と、お市の間には三人の娘が生まれていたし、夫婦の仲もよかった。

織田信長が少年時代に大変に美しい顔だちをしていたことは、この本のはじめに述べておいたが、その妹のお市だけに、

「奥方さまの美しさは、この世のものとは思われぬ」

と、浅井家でも噂がたかい。

「このようなりゆきになってしまい、わしは、おまえの兄上と闘わねばならぬことになった。この上は、娘たちとともに城を出て、いくさがすむまで、どこかにかくれていてはどうか」

長政が妻にいうと、お市は、

「わたくしはもう、織田の女ではございませぬ。浅井長政の妻なのですから、この小谷城にいて、あなたさまと生死をともにいたします」

といって、きかなかった。

お市は、兄信長が天下をとるための一つの道具として、浅井長政の妻となったのである。

こうした結婚のことを、政略結婚といい、お市ばかりでなく、このころの大名や武士たちは、互いに、このような結婚をおこなっては、自分の家がなんとか戦国の世をのりきって生きのびたいとねがったのだ。

だから、そのころの女たちは男の道具にされてしまい、気の毒だったという人もある。それ

はそうなのだが、このような結婚をしても夫婦の仲のよかった例は、いくつもあるのだ。

そしてまた、そのころの女たちは、決して男の道具になっているなどとは考えていなかったともいえる。

「わたしたちも、男とおなじに家と国のために働こう」

と、心を決めており、男もおよばぬ働きをした女たちも多い。

なにしろ、食うか食われるか、戦争がなくなる日まではたたかいつづけ生きのびなければならない時代であったのだから、男の心も女の心も火のように燃えさかっていた。

女が気の毒なら、こうした女を妻にした男も苦しまなければならぬ。世の中とはそうしたもので、男と女のどちらもが幸せでなければ、幸せな世の中とはいえないのである。

織田信長にしても、妹のことを考えてみれば胸も痛んだことであろう。木下藤吉郎の妻にさえ、あのようにやさしい手紙を書いた信長である。

姉川の決戦

小谷城は、険しい二つの峰からなる山の城であった。

琵琶湖の北側にひろがる平野を見おろしたこの山城は、海抜五百メートルから三百メートルほどもあり、兵力は約一万にすぎないが浅井軍の強さは世に知られている。

織田信長の三万あまりの軍は、六月二十日に小谷城の下へ集まり、城を取り囲んだ。

これをきいた朝倉義景も、黙ってはいない。

「すぐに浅井をたすけよ」

と、一族の朝倉孫三郎に一万あまりの軍を率いさせ、急ぎ小谷へむけて出発させた。

信長は、はじめ小谷城のすぐそばにある虎姫山に陣をかまえたが、

「ここにいても、あの険しい小谷城を攻めとるのはむずかしい。それよりも、いったんは後ろへさがり、平地へ敵をおびき出したほうがよい」

と、思いなおし、虎姫山を下って兵をまとめ、姉川をこえて、小谷城よりも二里ほどはなれたところへさがった。

そして二十三日には、本陣を竜ケ鼻とよばれる小高い山の上へ移し、平野をへだてて小谷城をのぞみ、決戦の日を待ったのである。

このとき、徳川家康が五千ほどの軍を率いて戦場へやってきた。

家康は、このとき二十九歳の青年大名で、三河、遠江の二か国の領主であり、まさかのちになって天下をとるようになろうとは、家康も考えていなかったろうし、世の中も認めてはいなかった。まだまだ小さな殿様にすぎなかったのだが、

「三河どの、三河どの」

と信長は家康をたいせつにしていたし、自分の娘の徳姫を、家康の長男、信康の嫁にするこ

とも、とりきめてあった。

　このように、織田、徳川両家の関係は水も漏らさぬほどにむすびついていたようであるが、それでもつぎのような話がある。

　それは――。

　こんどのいくさに味方するため、徳川家康が浜松の城を出発しようというとき、家来の本多平八郎忠勝がすすみ出て、

「信長公は、たいへんに殿をたのみになされ、どこから見てもお味方のように感じられますが、ご油断はなりませぬ」

「それはどういうことか？」と家康。

「信長公は、殿のお力がのびてゆくことをおそれておいでになります。今度のいくさでも、信長公は殿がうまく戦死してくれればよいと思っているやもしれませぬ。じゅうぶんにお気をつけてくだされ」

「なるほどな……」

　家康は本多忠勝の言葉をとりあげ、自分の兵力の三分の二を、わざと浜松へ残して近江へ出陣したというのである。

　とにかく、このように油断も隙もならぬ時代だったのだ。

　ところが、いざ決戦になると、徳川軍の奮戦によって、織田信長は、危ないところをすくわ

れる結果になった。

決戦は、六月二十八日の明け方から、始まった。そのころの六月二十八日は現代の八月九日にあたり、夏の盛りである。

小谷城から押し出してきた浅井軍約八千は、姉川の北側の野和というところへ陣をかまえ、これをたすける朝倉軍約一万は、少し西へ離れた三田あたりへ陣をかまえた。

川をへだてた南側では、織田軍二万三千、徳川軍約六千（そのうちの一千は信長の家来、稲葉通朝の部隊）が、早くも川べりに近づいており、

「それ攻めかかれ！」

たちまちに弓、鉄砲の攻撃をしかけてきた。

戦いの火ぶたは、まず朝倉と徳川の両軍によってきられた。

水深一メートルほどの姉川を中心にして、両軍はすさまじく戦い、押したり返したり、川水を血にそめて、息をつく間もない急戦を繰り返した。

これを見た浅井軍は、

「この隙に織田の本陣を突きやぶれ。信長めの首を取ってしまえ！」

猛然として突撃にうつった。

……わぁ、……うおう……。

けだもののような声をあげて攻めかかってくる浅井軍の決死の突撃は、つぎつぎに織田軍の

陣地を突き破り、
「信長を討て！」
「信長はどこじゃ！」
おそろしい勢いで、信長の本陣へ迫ってくる。
夏の日が中天にのぼり、その日ざしにぎらぎらと照りかがやくかわらで、川の中で、畑で、雑木林で、あきることもなく血みどろの戦いが続けられた。
とにかく、浅井軍は強い。
三倍もの兵力をもつ織田軍の中へ、キリを揉みこむように突き入って、一、二、三陣を破り、信長が指揮をとっている本陣の近くまで攻めこんできたのである。
「信長、今川義元と桶狭間に戦いしよりこのかた、かくのごとき激しき戦いなし」
と、むかしの本にしるされている。
「槍、槍をもてい」
信長もうかうかとしてはおられず、ひさしぶりに、みずから槍をつかみ、床几から立ちあがった。
そこへ、
「御大将は、どこにおられる。殿、殿っ……」
血みどろの鎧をつけ、髪をふりみだしたひとりの武士が、信長のすぐそばまで近づいてき

た。信長は、家康の家来にちがいないと見て、
「信長はこれにある」
声をかけたとき、そばにひかえていた家来の竹中久作がいきなり飛び出し、その武士に、
「浅井の家来、遠藤喜右衛門であろう」
と、叫び、槍をかまえ、信長をまもった。
その武士は、浅井長政の家来で、竹中久作とは顔見知りの間柄であったという。
遠藤は織田軍の味方にばけて本陣へはいりこみ、信長の首をとろうとしたのだ。
まさに、信長はあぶないところであった。
竹中久作は、この敵にくみつき首をとってしまったが、一時は、このように織田軍はさんざんな負けいくさだったのである。
もし、徳川家康が二倍の敵、朝倉軍をひきつけていてくれなかったら、織田信長は戦死してしまったかもしれない。
朝倉軍は徳川軍と戦うのが精いっぱいであった。

ちょうどこのとき……。
朝から、激しい戦いをくりかえしていた徳川と朝倉両軍は、家康のみごとな指揮によって、ついに徳川軍が勝った。

「朝倉方が逃げはじめたぞ」

これをきいて浅井軍はがっかりしてしまい、さらに徳川軍がこちらへも攻めかけてくるようになったので、浅井長政は、

「もはやこれまでじゃ。城へひきあげよ」

と、命令をくだし、小谷城をさして退却しはじめた。

こうして、姉川の決戦は織田信長の勝ちとなったわけだが、それもこれも徳川家康の軍隊の底力がじゅうぶんに発揮されたからで、

「徳川は強い」

との評判が、天下にひろまっていったのである。

戦死者は、織田、徳川軍が八百人あまり、浅井、朝倉軍が千七百人ほどであったといわれる。

しかし、信長は小谷城へ逃げかえった浅井長政を、すぐに攻めようとはしなかった。

小谷城から二里ほどを隔てて向かい合っている横山城を落とし、この城を羽柴秀吉に守らせておき、いったんは岐阜へかえった。

羽柴秀吉が、まえの木下藤吉郎であることはいうまでもない。

それからもなお、浅井、朝倉と織田信長との争いは続いたが、姉川の決戦によって力の衰えた浅井長政は、だんだんと信長に追い詰められ、三年後の天正元年八月になると、ふたたび小

谷城へ攻めよせてきた信長に、

「降参するか……」

または、

「いさぎよく、城に火をつけて腹を切るか」

二つのうちの一つを、えらばなくてはならぬことになった。

これよりまえ、朝倉義景も信長に敗れ、越前、大野の賢正寺という寺で自害をしてしまっている。

信長は、虎姫山に陣を構え、

「城を明け渡せ。そうすれば、悪いようにはせぬ」

と、長政のもとへ使いをやった。

もともと信長は浅井長政はきらいではない。長政の苦しい立場もわかっている。それに長政は、わが妹の夫なのであるから、なんとかして命だけはたすけようとしたらしいが、長政は、

「こうなったからには、生きながらえるつもりはない」

とこたえた。

もしも、いうことをきいて降参したら、信長は「悪いようにはせぬ」どころか、自分を生けどりにして首をはねるかもしれぬと、長政は疑いをもっていたのであろう。

「そのような恥をうけるのはいやだ。いさぎよく死のう」

長政は、妻のお市と三人の娘を信長のもとへ送りとどけることにした。
お市は、
「わたくしひとり、生き残って世の人たちから後ろ指をさされるのはくやしゅうございます。一緒に死なせてくださいませ」
何度も頼んだが、ついに説きふせられ、娘たちとともに城をおり、兄の信長の陣地へ送られていった。
「これでよい。もう心に残るものは何もない」
浅井長政は、八月二十六日になると最後の戦いを信長にしかけ、力つきた後、小谷城の中で切腹し、二十九歳の若い一生をおえた。
お市は、のちに兄信長の重臣、柴田勝家の妻となった。
けれども信長が死んだ後、柴田勝家と羽柴秀吉の仲が悪くなった。そして、勝家は、秀吉との戦いに負け、越前、北ノ庄の城で腹を切ることになる。
このとき、お市はもう、城から出ようとはしなかった。
「もはや、世のなぐさみものにはなりませぬ。一緒に死なせてくださいませ」
いくら勝家がすすめてもいうことをきかず、第二の夫、柴田勝家とともに、お市は自害をした。
ふたりの夫を、おなじような運命のもとに死なせなくてはならなかったお市の一生は、まこ

とに戦国時代の女の悲しさを、そのままにあらわしている。

信長のような、偉くて強い大名の妹に生まれながら、このように気の毒な一生を送らねばならなかったお市であるが、はじめの夫も、第二の夫も、お市を優しくいたわってくれたようだ。

比叡山焼きうち

浅井と朝倉の両家が滅びたのち、織田信長は、浅井家の領国だった北近江を、

「秀吉にあたえよう」

といい、朝倉家の領国を、柴田勝家に与えることにした。

「さる」とか「はげねずみ」とかよばれた木下藤吉郎も、いまは羽柴筑前守秀吉という十二万石の殿さまに出世をしたわけである。このとき秀吉は三十八歳になっていて、おしもおされもせぬ織田家の重臣であった。

秀吉は、それまで入っていた横山城を出て、琵琶湖を望む今浜の町へ新しく城を造り、ここを自分の本城とさだめた。

そして、町の名も長浜と改めた。

名も知れぬ百姓の子に生まれ、いろいろな苦労をなめた秀吉が、はじめ、信長のぞうりとり

といったような小者として織田家に仕えていたころには、誰も、秀吉が、このような出世をするとは思ってもみなかったろう。

信長は、身分の低い高いにかかわらず、自分が思ったように働いてくれる家来を、どんどん出世させてやった。

秀吉にとっては、まことに「働きがいのある主人」に仕えたことになる。織田信長は、長い間続きに続いた戦国の世を、一つにまとめるという大きな仕事をなしとげた人物だけに、気性も強く、激しかった。

よく働かぬもの、自分が気に入らぬもの、自分に背いたものは、少しもゆるさない。

浅井長政が、とうとう降参せず、小谷城で自害をしたのちも、

「長政は、わしの心に背いた、にくい男である」

と、ひじょうに怒っていた。

そして、長政と妹お市の間に生まれた男の子の万福丸をとらえ、美濃の関ケ原で、まだ小さい子供の万福丸をむごたらしいやりかたで殺してしまった。

そればかりではない。

長政の母の小野どのという老女もつかまえ、十本のゆびを切り落したのちに、これも殺してしまった。

これは、そのころの大名が戦争に負けた相手を、このように扱うことによって、

「自分に逆らうものは、このような目に遭うのだ。よく見ておくがよい」

と、天下に知らせることになる。

また万福丸は、浅井家の跡継ぎになる男の子だから、

「もしも生かしておいて、この子が大きくなり、自分の敵となるようなことがあってはこまる」

と、殺してしまったのだ。

これは信長ばかりではなく、どこの大名でもやったことだ。

だが、信長がやってみせると、

「織田どのは、まことにおそろしい人じゃ」

世の人たちは青ざめた顔になり、信長のすることを、息をのんで見守ったのである。

また、こんなこともあった。

そのころ、日本の仏教の世界でも、本願寺や延暦寺の勢力は、もっとも大きかった。

本願寺は、一向宗（浄土真宗）の本山で、いまの大阪城があるところに大きな寺院があった。

寺といっても、まるで城のようなもので、ここに顕如という偉い坊さまがいて、日本全国にひろがっている寺々や坊さまや、信者を指揮し、兵隊もかかえている。

また延暦寺は、京の都を見おろす比叡山にあり、これは天台宗という仏教の本山である。

これも僧兵とよぶ坊さんの兵隊をかかえ、すばらしい勢いをもっていた。
昔々から、日本の仏教は、政治や文化にしっかりと結びついているから、
「信長のような乱暴な男に、天下をまかせておいては、とんだことになる」
本願寺も延暦寺も、日本全国の寺や信者を動かし、信長のすることにじゃまをした。
なにしろ、外国からやってきたキリスト教の坊さまをかわいがっているような織田信長だったから、日本の坊さまに、にくまれるのもむりはない。
信長は信長で、
「日本の寺や坊さまが、仏の教えをひろめるのはよいことだが、兵隊を使っていくさをしたり、いばっているのはけしからぬ」
と、すこしも負けてはいない。
だから、将軍の足利義昭は、
「なんとか信長をやっつけてもらいたい」
こんどは、本願寺や延暦寺にまで密かにはたらきかけるしまつだ。
浅井と朝倉が信長に負けたとき、両家の兵が比叡山へ逃げこんだことがある。
信長は、何度も、この戦争に坊さまがはいってきてはいけないと注意をしたが、延暦寺は、いうことをきかない。
そこで、信長は、

「こうなったからには、是非におよばぬ。比叡山の寺という寺を焼き払え」

と、命じたものである。

そして、上坂本から火をつけて攻めよせ、比叡山にある寺という寺を、一つも残さず焼き払ってしまった。

そして、山にいた坊さんたちも含め、男女あわせて千六百人もの人を殺し、仏像やお経の本も焼き払った。

これは、日本全国の人びとにおそろしいショックを与えた。

長い間、天皇と天皇のおられる都をまもる寺として尊ばれていた比叡山延暦寺を、信長は一夜のうちに灰としてしまったのである。

これほどに、思いきったことをした戦国大名は、信長ひとりであった。

「天下を一つにし、戦争をなくすためには、わしはどのようなことでもしてみせる」

信長の決心は、すさまじいものというほかはない。

けれども……。

「比叡山としても、らんぼうな僧兵などをかかえて、みずから戦争の中へわってはいったりしたことは、よくないことであった」

と延暦寺のほうでも、後になって反省しているところからみると、信長がしたことを、一概に残酷なものだと片付けてしまうことはできない。

とにかく、信長は、こうした仏教界の反抗には、つくづくと手をやいたものである。

こうした主人に仕えて出世するというのは、容易なことではない。羽柴秀吉も、ずいぶん苦労したことであろう。

しかし、信長は秀吉がりっぱな殿様になってからでも、

「さるよ、さるよ」

と、からかったりする。

秀吉は秀吉で、少しも気にせず、いつも、にこにことして、信長の顔色を見ただけで、主人が何を考えているかを知ってしまうという具合なのだ。

信長も秀吉も、頭の働きが鋭くて、早い。

それでいて、小さな、細かな、つまらぬことに気をつかわず、よいと考えたことはすぐに実行する。

顔かたちも違い、物の考え方にも違うところがあるふたりだが、ある一つの点では、よく似ていた。

羽柴秀吉は、長浜の城主となってからも、休むことなく主人のために諸国へ出てゆき、たたかいつづけた。

秀吉は主として西国地方（中国、四国、九州）を平定することに力を注いだ。

あまりによく働いてくれるので、織田信長は、ある年の正月に、家来たちがたくさんいる中

で、秀吉をそばへまねき、そのひたいを何度もなでてやりながら、
「侍である以上は、この筑前守（秀吉）にあやかるがよい」
と、誉めたたえたそうだ。

秀吉と家康

信長のふところにいて大働きをしたのが秀吉なら、信長を外からたすけた功労者は徳川家康だといえよう。
だからといって、家康は特別に信長が好きだったわけではない。
だが、織田信長という大名の力の強さを、よく知っていた。
しかも、家康の領国は、まえまえから信長の国のとなりあわせになっていたし、
「どんなつらいことがあっても、信長どのの味方をしておけば、間違いはない」
と、心を決めていた。
姉川の戦争でも、信長のために、あれだけの働きをした家康であったが、その翌々年になると、
「いよいよ、武田信玄が腰をあげて、京都をめざし、進軍してまいります」
との知らせがはいった。

そのとおりであった。

その年の十月三日に、五十二歳の武田信玄は三万あまりの大軍を率いて、甲府の城を出発した。

武田軍は、つぎつぎに手むかいする城を落としいれ、徳川家康の本城、浜松へ迫ってきた。家康は、みずから四千の兵を率いて天竜川のほとりまで押し出してきた。三万と四千では、いくら家康が戦ってみても、勝ち目はない。

それでも家康は、見付の町に武田軍を迎えて、猛烈に戦い、

「徳川を見くびるな！」

という意気ごみを示し、さっと浜松の城へひきあげた。

「若いくせに、なかなかやるのう」

武田信玄は笑いながらも、家康が最後まで信長のために、自分の行く手をさえぎろうとしている決心の堅さを知った。

武田信玄にとっては、いまがチャンスであった。

そのときの織田信長は、浅井、朝倉や本願寺などを相手にして、目がまわるほど戦いに忙しかった。

「そちらをたすけたいが、とても手がまわらぬ。なんとかして武田軍をくいとめていただきたい」

と、信長が家康に頼んできているほどだ。

この隙に、せめて徳川家康を滅ぼし、武田家の勢力を、信長のすぐ後ろまでひろげておきたい、というのが武田信玄の狙いである。

信玄は、すぐに浜松へ攻めてゆかず、徳川家の城のうちでも大切なところといわれる、二俣城をとりかこんだ。

この城は、家康の家来の中根平左衛門が守っていて、けんめいに戦ったが、ついに敗れた。

この城を武田軍にとられてしまっては、家康も浜松の城へ立て籠って戦うよりほかに、道はないとみえた。

「うふふふ、ふ……」

武田信玄は、得意の笑いを浮かべ、

「さて、家康はどうするかな……？」

わざと、浜松城へは近よらず、十二月二十二日の朝になって、武田軍は三方原へむかって、進みはじめた。

三方原は、浜松の北側の丘の上にあり、南北が、約十二キロメートル、東西が八キロメートルほどの平原であった。

「さあ、家康よ。わしがおそろしくないなら、ここまで来てみよ」

と、信玄は笑っているかのようだ。

そのこころは、家康の胸にも、ぴいんと、響いてきた。
（おのれ！）
三十一歳の家康の熱い血が沸きたってきた。
織田信長は、使いをよこして、
「じっと、このたびは我慢なされ。浜松の城にこもり、出てはなりません。おそらく、信玄は甲斐へかえってゆくと思うし、もしも、本気で浜松を攻めるようなら、自分も黙ってはいない。きっと、あなたをたすけにゆく」
と、いってきている。
しかし……。
（ここで、ぬけぬけと武田軍を見送っては、わしの名がすたる。我慢できない）
ついに、家康は、
「よし！　三方原へ打って出よう」
とさけんだ。
城をまもる兵は、わずかに五百。
ほとんどの軍をひきいて、徳川家康は浜松城を出た。
（おれの国は、おれがまもらねばならぬ！）
自分の国の中を、わがもの顔に踏みにじって歩いている武田信玄を、このままにしてはおけ

ない。勝てぬまでも、手ひどいめにあわせてやらぬと、来年も、また次の年も、武田軍は攻めてくるであろう。

「なに、家康が押し出してきたか」

と、武田信玄は驚いた。

驚いたが、しめたと思った。のぞむところである。

広い平原の中で、敵の大将が、みずから戦おうというのだ。この機会に家康を討ちとってしまえば、もうけものであった。

武田軍は陣形を三つにわけ、近づいてくる徳川軍を待ちうけた。この場所は、三方原の祝田の坂とよばれるあたりだ。

徳川軍が、現れた。

そして、黒雲の間から落ちてくる夕日をあびた両軍は、長い間、じっと睨み合っていた。

そのうちに、徳川家康はしびれをきらし、

「かかれ！」

攻撃の火ぶたをきった。

ひとしきり、両軍の鉄砲隊が出て撃ち合うと、

「わぁっ……」

つぎは、槍をかまえた先鋒部隊がわめき声をあげて押しかかっていった。

そのころの鉄砲は大変貴重な武器で、両軍とも持っている数は少ないうえに、一発撃つと、あとが続かない。

新しく火薬と弾をいれ、火縄の火を移さなくては発射できないのである。

だから、はじめに鉄砲を撃ってしまうと、次には人と人とが、槍と刀をふりかざして突撃することになる。

馬が、鎧武者が、槍と刀が、土ぼこりを巻きあげ、つむじ風のようにぶつかり合い、もみ合った。

徳川家康も、馬上から槍をふるい、まっさきに乱軍の中へとびこんで戦った。

しかし、もとより勝ち目はない。

こちらの三倍もある武田軍だし、姉川で相手にした朝倉軍などはおよびもつかぬ強さであった。むかしから、武田軍の強いことを認めぬものはない。

ついに……。

徳川軍は突き崩された。

「ひけい。ひきあげよ！」

家康は、返り血を浴び、みずから最後まで残って武田軍の追撃をふせいだ。

ばらばらになりながら、徳川軍は浜松城へひきあげた。

徳川家康も、一時はただ一人で、松林の中を敵に囲まれ、馬を走らせるという有様であっ

た。

こうして、徳川軍は、負けるのを覚悟で出ていき、負けた。

けれども、大軍をおそれずに出ていった家康の勇気を認めぬものはなく、

「姉川のときも武勇めざましい大将と見たが、今度はまた、武士の意気地を貫き通した、あっぱれな戦いぶりじゃ」

諸国の大名の間で、徳川家康は、

「まことに、頼みがいのある大将だ」

という信用が広まっていったのである。

この信用は大きい。この戦いに負けた徳川家康だが、負けて得たものは大きかったのだ。

織田信長もびっくりしたが、

「よくやってくだされた」

よろこんだのは、いうまでもない。

ところで……。

勝った武田信玄は、浜松まで追いかけてきたか、というと、そうではない。

武田軍は三方原をくだって、三河の野田城（これも徳川の城の一つ）を落としいれた。

こうして、むりに家康の首をとろうとはせず、まわりの城をみんなとってしまえば、いまに徳川家康は手足をもぎとられたのと同じになって、降参しなくてはならないことになる。

それが、武田信玄の狙いであった。
だが、ものごとはうまくゆかないものだ。
信玄が病気になってしまったのである。
信玄の病気は、肺結核だったといわれている。
陣中で病気を治そうとしていた信玄は、翌年まで、三河の鳳来寺にとどまり、静養につとめた。
（どうも、わしの病気はよくならぬ。ひとまず、甲府へ帰ろう）
ようやく、信玄は心を決め、夏のころになってから軍をまとめ、伊那街道を北へ進んだ。
そして……。
もう少しで、自分の城へ帰りつこうというところで、死んだのである。
武田信玄が病死したところは、信州の駒場（こまんば）という村だ。
ときは、一五七三年（天正元年）の四月十一日である。信玄は、五十三歳であった。
武田信玄は、天下を治めるだけの実力と人格を備えたりっぱな大名で、自分の国が甲斐（山梨）のような不便なところではなく、もっと、京都に近いところにあったとしたら、きっと、信長よりも先に天下を取っていたろうと思われる人だ。
それだけに、この大敵が死んだことによって、織田信長が、どれだけ有利になったことか、いうまでもないだろう。

信玄が死んだ後の武田家は、子供の勝頼が継いだ。武田家は残っているが、勝頼と信玄とでは人物がちがう。信玄のいない武田軍は、次第に、おそろしい軍隊ではなくなった。

だから、徳川家康も力を盛り返し、つぎつぎに、自分が信玄にとられた城や国を、取り返してゆくようになる。

そのころ——。

織田信長は、将軍、義昭に向かって、

「あなたは、もう将軍ではない。あなたがいると、かえって世の中が乱れて困る」

と、決めつけ、義昭を京都から追いだしてしまった。

これで、およそ二百四十年もの間、とにかくひきつがれてきた足利将軍は、消えてしまったことになる。

長篠の戦い

織田信長が新しい城を築こうと思いたったのは、一五七五年（天正三年）も暮れようとするころであった。

この年の春——。

信長は、またも徳川家康とともに、武田軍と戦った。

信玄が死んだ後は、その子の武田勝頼が、
「ぜひとも、信長と家康を滅ぼして、京都へのぼらねばならぬ。これは亡き父の心を継ぐことである」
と、隙さえあれば家康の領国へ攻めこんでくる。
「もう、放っておけぬ」
信長も決心をした。
そして、信長と家康の連合軍四万あまりは、三河（愛知県）の設楽原（したらがはら）へ押し出していった。
武田勝頼も、徳川軍の味方をしている奥平信昌の長篠城を攻めとろうとしていたが、一万五千の軍をひきいて設楽原へ進んだ。
武田方の重臣たちは、
「殿、敵は四万をこえる軍勢でございます。そこへ一万五千のわれらが、いくさをしかけても、とうてい勝ち目はありますまい」
こういって、若い主人の勝頼を諫めた。
「だまれ！」
勝頼は、きかなかった。
武田勝頼は、武勇すぐれた大将ではあるが、とても亡き父の信玄のまねはできない。
できないのに、

「わしだって、父上に負けるものか、わしが武田のあるじとなってから、武田家の勢いが衰えてしまっては、わしの不名誉になる」

と、何事にも無理をする。

それが、こんどのいくさにもあらわれた。

設楽原の戦いは、四月二十一日の明け方から始まった。

「しゃにむに敵を突き崩せ！」

武田勝頼は、軍を十三隊に分け、織田、徳川軍が待ち構えている陣地めがけて突撃させた。

織田信長は、陣地の前に木の柵を立ち並べ、ここへ鉄砲隊をおいて、武田軍が攻めてくるのをひきよせ、

「それ、撃て！」

いっせいに射撃をした。

これは、武田軍も覚悟している。はじめは、鉄砲の弾が飛んできても、次には槍と刀だと思っていたからだ。

ところが、続いて、

……だ、だあん……だだあん……。

と鉄砲の弾が飛んでくる。

「もうよいだろう」

と、思って、

「それ。柵を突き破れ！」

武田の騎兵が、馬をかって突進すると、また、一斉射撃であった。

ばたばたと、武田軍の将兵がたおれた。

「いったい、織田信長は鉄砲をいくつ持っているのか……」

と、武田軍はあきれてしまった。

信長は、このいくさに三千丁もの鉄砲を用意してきていたのである。

これに対して、武田軍の鉄砲は、五百丁にも足りないほどであった。

信長の鉄砲隊は、三列横隊に並んでいて、一列が敵を撃つと、すぐに後ろへさがって弾をこめる。

その間に、二列めが撃つ。そしてさがる。三列めが撃ってさがると、はじめに発砲した鉄砲隊は、すでに弾をこめ、火薬に火をつけているから、すぐに発射できるのである。

こうして、次々に、休む間もなく鉄砲が使えたのも、その数が大変に多かったからだ。

これでは、いくら強い武田軍でも、たまったものではない。一万五千のうち、一万人もの将兵が戦死をしてしまったのだ。

武田勝頼は、涙をのんで甲府へ逃げかえった。

この戦いでは、武田軍の中でも世に知られた勇士がたくさん死んでしまい、武田軍の力の半

分以上は、この戦いで消えたといってよい。武田勝頼は、取り返しのつかぬ大きな失敗をしてしまったわけだ。

それにしても……。

織田信長はどのようにして、これだけの鉄砲を集めたのだろう。

一つは、貿易港でもある堺の町を手に入れていたから、この町で造る鉄砲のほとんどを、自分のものにすることができた。

もう一つは、これも鉄砲を造るところとして有名な、北近江の国友村を、自分の手に、しっかりと摑んでいたからだ。

国友村は、浅井長政がいた小谷城のすぐ近くにある。そして、すでに浅井は信長に滅ぼされてしまった。

堺といい、国友村といい、もっとも新しい科学的な武器である鉄砲を造るところに狙いをつけ、早くも、この重要な場所を、わがものにしてしまった織田信長であった。

いまでこそ、鉄砲などはどこにもあるように思えるが、そのころの鉄砲は、いまのジェット機のように貴重で高価な物だったのである。

「もう、武田も出てくるだけの力はあるまい」

と、信長は考えた。そして、

「ひとつ、わしが住む新しい城を築いてみよう。今まで、誰も造ったことのないような、立派

な城を造るのだ」
と、思いたった。

安土の城

新しい城をつくる場所に、織田信長は、近江の安土を選んだ。
琵琶湖の南側の岸に、三つの峰からなる安土山という山がある。山というよりは丘といってもよい。この山のもっとも高いところで二百メートルほどだが、ここへ、信長は七層づくりの天守閣を築くことにした。
つまり、七階建ての城を造ろうというわけで、そのような天守閣をもつ城は、それまで日本のどこを探してもなかったのである。
この安土の城を造るのに、信長は、三年の歳月をかけた。
できあがった安土城を見た、キリスト教の宣教師、ガスパル＝クエリヨという西洋人が、つぎのように書いている。
「この城は、ヨーロッパのどんな大きな城とくらべても、見劣りはしないだろう。城のまわりの石垣は高く、城の中の広さ、大きさ、美しさは、たとえようもないほどの立派さだ。黄金の飾りをつけた御殿や、屋敷がたちならび、その造りは、人の手のおよぶかぎりの見事な細工が

してある。

城の中央には、七階の塔（天守閣）があって、その造りの巧さには、つくづく驚かされる。中にある彫刻は、すべてが金によって塗られ、白や黒や、赤や青の色とりどりに塗られた壁や窓。そして青い瓦によって屋根が造られ、その瓦の前のところは、金をかぶせた丸い形になっている……」

このガスパル＝クエリヨが見た安土城の屋根の瓦が、昭和四十年に、安土山の土の中から発見された。

安土城は、昔の戦火に焼け落ち、今は累々たる石垣だけが残っているが、この金色の屋根瓦と石垣を見ただけでも、そのころの城の素晴らしさが、よくわかる。

安土山にそびえる七層の城。

その城の屋根は、金色に照り輝き、青い琵琶湖の水に映っていたという。そのころとしては、夢のように美しい、おとぎ話にでも出てくるような城であった。

御殿や天守閣の飾りに描かれた絵も、信長の好みによった、素晴らしいものであったらしい。

戦争をするときの、魔神のようにすさまじい織田信長と、このように美しい城を造る信長とは、まことに別の人間のようだ。

すべてに「力」をもった人間という生きものは「理屈」では、はかりきれない不思議なもの

をひそめている。

人間を「理屈」ではかろうとすると、大変な間違いを犯すことがあると、昔の偉い人がいった言葉があるけれども、織田信長がしてきたいろいろな事柄を知るにつけても、そのことが「なるほど」と、うなずけるのである。

この城ができあがった一五七八年（天正六年）正月で、信長は四十五歳になった。

あの桶狭間の決戦に、死を覚悟して、今川軍へ切り込んだときは二十七歳だったのだから、およそ二十年に近い年月がすぎ去っている。

そして信長は、天皇から、右大臣の位を受けた。これは、天皇をたすけて政治を行う重い役目なのである。

羽柴秀吉をはじめ、家来たちもぞくぞく安土へ集まり、屋敷を構えた。

偉い家来たちは、安土山へ屋敷をつくることを許されたので、この山全体が、まるで、きらびやかな城や屋敷のかたまりのように見えた。

信長は、この城下町が栄えるために、こまやかな心づかいを見せた。

「商人たちは、この町で自由に商売をしてもよい。だからといって、わしは、そのかわりに何も、求めるつもりはない」

また、

「この町に住みつくものには、税金をとることや、労働をさせることもしない」

また、

「他の国からきたものでも差別なく待遇をする。また、もとは誰の家来であっても、構わない」

などと、いうものである。

これで信長の町が、繁盛しないはずはない。信長が蓄えてきた力と自信は、よほどに大きく膨れあがっていたのであろう。

信長は、自分の町に日本の寺をいくつもおいたが、それと同時に、キリスト教の教会堂も建ててやった。

青い目をした外国の坊さんたちがやってきて、町を歩いたり、キリスト教を広めたりした。

日本の寺では、お経が聞こえる。

キリスト教会堂では、賛美歌が聞こえる。

いまから四百年も前に、このような町を造った殿様は、日本にも外国にもいなかった。

キリスト教の宣教師たちは、信長に願って、セミナリオを建ててもらった。

セミナリオとは、キリスト教の学校のことである。

この学校では、ラテン語やポルトガル語のほかに、日本語での勉強もさせ、大名や武士たちの子たちが生徒になり、青い目の先生に教えられた。

織田信長は、西洋の帽子やマントを身につけ、この学校へ来て、

「皆のもの、よく勉強をしているか?」

などと、聞くのであった。

信長はこう思っていた。

「キリスト教のものたちは、何年も何か月もかかって、ひどい苦労をしながら、海を渡って日本へやってきた。わしが見たところ、みんな心のよいものたちばかりだし、このものたちが日本へ広めようとしている神の教えも、別段害のあるものではない。

それに、このものたちは、遠い遠い外国の様子や文化のありかたを、日本に伝えてくれたし、それはまことに驚くべきことが多い。外国の様子を伝えてくれるのは、今のところキリスト教の宣教師だけなのだから、このものたちを大切にしたい」

けれども、信長はキリスト教の信者になろうと思ったことは、一度もない。

「人間は死んでしまったら、もう何も残らぬ。ひとにぎりの灰になってしまうだけだ」

これが、織田信長の信念であった。

信長は安土の城ができあがってから四年後に死んでしまう。

もっと生きていたら、日本の国はどのような国になっていたろうか。

信長には、もっともっとやりたいことが、たくさんあったにちがいない。それは、どのようなものだったろうか……。

いま、安土セミナリオがあったという場所に立って、安土山をながめるとき、つくづくと、

そのことを思わずにはいられない。

武田家ほろぶ

安土城を築きながらも、信長は諸国に兵を出して、いうことをきかぬ大名や大将たちを降参させていった。

伊勢の国も……。

丹波の国も……。

また、中国地方をおさえている大大名の毛利家の水軍と、木津川で戦い、負けたこともある。毛利軍は、あの石山（大阪）本願寺をたすけにやってきたのだ。本願寺は、比叡山の延暦寺を焼き払ったようにゆかなくて、信長も、ずいぶんてこずったが、やがて、石山も自分の手にすることができた。

越後では勇将、上杉謙信が病気で死んだ。

謙信は、武田信玄とならび、織田信長にとって、最もおそろしい敵であった。もし、この二人が、信長と家康のように力を合わせ、信長を攻めてきたら、城や町を造りながら戦争をするなどというゆとりはなく、信長も、どうなっていたか知れたものではない。

なんといっても、信玄と謙信との仲が悪く、いつも互いに戦争をしていたことと、この二人

が急に死んでしまったことは、信長にとって、ほっとする思いであったろう。

北陸や中国地方の一部にも、信長は手をのばし、これを自分のものとしたが、まだ毛利家は、びくともしていない。

毛利家が、このように勢い盛んになったのは、毛利元就（もとなり）の力が大きかったからだ。元就は、すでに死んでいたけれども、その孫の輝元が、周防、長門（山口県）、備後（広島県）、備中（岡山県）、石見（島根県）など、十か国のあるじとして、

「われらは、強（し）いて信長を攻めようとは思わぬが、もしも信長が、こちらへ手をのばすならば、許しはせぬ」

堅い決心をしている。

「とにかく、おまえが中国へゆけ」

と、織田信長は羽柴秀吉に命じた。

秀吉は、長浜の城から播磨（兵庫県）の姫路城へ移り、ここに腰を据えて、毛利方の敵と戦うことになった。

「よし、中国は、ひとまず秀吉にまかせておき、この際、一挙に武田家を滅ぼしてしまおう」

と、信長は思い立った。

それというのも……。

長篠、設楽原の戦いで、あれほどにひどい目にあった武田勝頼が、

「来年こそは、尾張、三河へ押し出して、家康や信長に、ひとあわふかせてやる」

と、いいはじめたからである。

長篠の戦いから、早くも七年の月日が流れている。その間に、武田軍も力を蓄えていたことは、たしかであった。

「このままにしておくと、またうるさい相手になる」

と、信長は考えたのであろう。

しかも、武田軍は、遠くの毛利軍へも働きかけ、

「織田を挟み討ちにしてしまいましょう」

などと、いっている。

一五八二年（天正十年）の春——。

織田信長は、大軍を率いて安土の城を出発した。

こんども、徳川家康が駿河から、まず甲斐の国へ攻め入った。信長は、わが子の信忠とともに、信州の伊那から、武田の領国へはいった。

四方八方から攻めこまれた武田勝頼は、

「おのれ、おのれ。どこのやつばらも、信長のいうなりに尾をふってゆくのか！」

と、悔しがった。

滝沢、飯田、松尾など、武田家に属する城が、次々に撃ち破られていった。

そして、信州の高遠城も敗れた。
この城は、勝頼の弟の仁科盛信が守っていたのだが、盛信は兵を率いてよく戦い、織田信忠の軍をなやました。しかし、ついに敗れ、
「もはや、武田の命運もつきた」
と叫び、腹を切って死んだ。
いっぽう、徳川家康は、駿河の江尻城を守っていた穴山伊豆守へ、
「無駄な戦いをして負けたところで、つまらぬことではありませんか」
密かに、いってやった。
穴山伊豆守は、武田勝頼の姉婿であったが、
(それもそうじゃな)
あっさりと、兜をぬぎ、城を明け渡してしまった。
親類の中から、こういう人が出たのでは、武田家も、おしまいである。
武田勝頼は、甲斐の新府の城へ兵をまとめ、家来たちに、
「信州、戸石の真田昌幸が、一足先に国へ帰り、岩櫃の城へ入って、わしをむかえる準備をしている」
と、いうと、小山田信茂というものが、
「いや、それは危ないことです。あちらでは、すでに徳川や北条の手が回っておりましょう

し、それよりも、わたくしの城へおいでください。あの城に籠って戦いましょう」

しきりにすすめた。

小山田のことばに動かされた勝頼は、やっと心を決め、兵をひきつれて新府の城を出た。

ところが、この小山田は、早くも織田信長に味方すると、密かに約束をかわしていたのだ。

親類に裏切られ、家来にそむかれた武田勝頼は、小山田の岩殿城へはいることもできず、ついに天目山のふもとへ追い詰められた。

このとき、勝頼に従う家来は、五十名ほどに減っていた。

「もはや、これまでじゃ」

さすがの勝頼もかくごをきめ、いさぎよく自殺をしてしまった。

こうして、戦国の世に、

「甲斐に、武田あり」

と、うたわれた武田家も、ついに滅びたのである。

織田信長は、

「こんどこそは、根こそぎ、武田の力を滅ぼしてやるのだ」

と、徹底的に逃げちった武田の将兵をさがしては、首を切ってしまった。

このとき徳川家康が、信長には内緒で、武田の家来たちをかくまい、自分の家来にしてしまったのは、有名な話である。

「亡き武田信玄のように偉い大名の下で働いた家来たちであるから、助けておけばきっと、わしの力になってくれよう」

と、家康は先を見こしていた。

たしかに、いのちを助けられた武田の家来たちは、のちに、家康のためによく働いたし、家康は、その人たちの口から、武田信玄のいくさのやりかたや、政治の仕方をきき、それを自分のものとしてしまった。

とにかく、この戦争は、思いのほか、早く片付いた。

そして、武田家のものだった甲斐や信濃、駿河などの国々が、すっかり信長のいうことをきくようになったのである。

織田信長は、意気揚々と甲斐を出発し、安土へ凱旋(がいせん)をした。

安土へ帰ったのは、四月二十一日であった。

そして……。

その日から、およそ四十日ほどしか、信長は生きていなかったのである。

家康父子

こんどの武田攻めについて、徳川家康の働きは、並々ならぬものであった。

織田信長は、そのほうびとして、駿河の国（静岡県）を家康に与えた。

「家康どのは、まことによくやってくれた」

さすがの信長も、こんどばかりは、つくづくと家康の忠誠に、感心をしたようである。

それというのも、わずか三年まえの夏に、信長は、家康の長男、三郎信康に腹を切らせていたのだ。

三郎信康は、若い大将として武勇にもすぐれ、徳川の家来たちも、

「三郎さまのような、立派な跡継ぎがあるからは、徳川のお家も万々歳だ」

と、よろこび、父の家康も、

「何とか、りっぱな大将になってもらいたいものだ」

大きなのぞみをかけていたものだ。三郎の妻は、織田信長の娘、徳姫である。

けっして夫婦仲はわるくなかったのだが、三郎の母（家康の妻）の築山どのと、嫁の徳姫との間が、どうも、しっくりいかなかったようだ。

そのうちに……。

「築山どのが、武田勝頼とひそかに手をむすび、信長や家康に背こうとしている。しかも三郎信康までひき入れて、謀叛のたくらみをしている」

という知らせが、織田信長のもとへ届いた。誰が知らせたかというと、徳姫が知らせたのである。

この事件については、いろいろの説もあるし、手みじかにのべることはできぬが、徳姫としては、

「わたくしと三郎さまの夫婦仲を邪魔する築山どのを、始末していただきたい」

と、父の信長に願うつもりだったのであろう。

築山どのは、今川家の一族で、関口親永というものの娘にうまれ、のちに徳川家康の妻となったひとだ。

しかし、この人は気位もたかく、心が乱れがちの人で、三郎信康を産んだのち、夫の家康とも仲が悪くなり、別れて暮らしていたほどである。

つまり、築山どのは、わが子の三郎や徳姫と一緒に岡崎の城に暮らし、家康は浜松城にいたわけだ。

さて……。

娘の徳姫の訴えをきいた織田信長は、ちょうど家康の家来、酒井忠次が、岐阜の城へやってきたので、

「これは、まことか？」

問いただすと、酒井は、

「まことでございます」

と、こたえた。

築山どのが武田家と、密かに連絡をとっていたことは、たしかなことらしいが、三郎信康までは、どうだったろうか。

とにかく、徳川の家来が、

「徳姫さまの訴えごとは、たしかである」

とこたえたのだから、どうしようもない。

「これでは、どうにもなるまい。三郎どのに腹を切らせなさい」

きびしく、信長が家康にいってよこした。

こういうときの織田信長は、たとえ、娘の婿だろうと、許しはしない。徳姫も、まさか、こんな大事になろうとは思わなかったろう。

「徳川の母さまが、夫を悪いたくらみにひきこもうとしていますから、なんとかしてくださいませ」

と、父に甘えて、訴え出たとみてよい。それなのに父は、愛する夫に「死ね！」と命じてきた。

それにしても酒井忠次は、自分の若主人である三郎が不利になるようなことを、なぜ信長にいったのであろうか。

三郎と酒井とは、前から仲が悪かったともいわれている。とにかく、徳川家康の立場は、苦しくなった。

いったん、いいだしたらきかぬ織田信長の激しい気性を、家康はよくわきまえていた。

三郎に腹を切らせなければ、そのかわりに信長を敵にまわして戦うだけの覚悟がいる。そうなれば、せっかくいままで、血と汗を流し、苦しい戦いを続けて守り抜いてきた徳川の家と国は、おそるべき信長の力の前に、踏み潰されてしまうかもしれない。

ついに……。

徳川家康は、決心をした。

三郎信康に腹を切らせることにしたのである。

「わたくしには、少しのやましいことはありませぬ」

と、三郎は涙をながして、父、家康にいった。

しかし、そのいいわけを信長がきいてくれるなら、なんのことはない。信長の前には、このようないいわけが通るはずがなかった。

一五七九年（天正七年）八月二十九日。

まず、家康は、築山どのを浜松に近い富塚の向い谷というところへ連れて行き、殺してしまった。

さすがの家康も心を悩ませつづけ、病気になってしまったが、

「三郎の介錯（かいしゃく）をたのむ」

と、家来の服部半蔵にいった。

そして、二十一歳の三郎信康は、二股の城で腹を切って死んだのである。

三郎は死に臨み、

「おれは、天地の神に誓って、いささかのやましいこともない。これは、父上も、よくご承知だ。いま、おれは、いさぎよく死んだと父上に伝えよ」

いいざま、いきなり刀を腹につきたて、服部半蔵に、

「は、早く首を討て！」

呼びかけたが、半蔵は、あまりの悲しさに、刀を投げ捨てて泣き伏したという。

この事件の何がうそで、何がほんとうなのか、いまだに、はっきりしたことはわからぬ。ただ、家康が信長の怒りにふれることをおそれ、かわいいわが子を死なせたことだけは、事実であった。

このようにしなくては、自分の国が守れなかった時代なのである。

そして、なおも家康は、信長のために働きつづけた。そうすることが、つまりは自分の国を守ることになるのだ。信長も、自分のしたことは、よくわきまえていた。

自分のことば一つによって、わが子を死なせた家康が、三年後の武田攻めにも、一生懸命に働いてくれたことは、信長の心を、強く揺りうごかした。

安土へかえった織田信長のもとへ、駿河の国をいただいたお礼に、徳川家康がやってくるという知らせがはいった。信長は、

「徳川どのが通る道すじにある大名たちは、それぞれに気をつけて、家康どのをもてなすように」

と、命じた。

五月八日に、家康は浜松を出て、安土へ向かった。

道中の泊まり泊まりには、それぞれの大名が、信長の命令によって、丁寧なもてなしをした。

十五日、家康は安土へつき、宿にあてられた大宝坊にはいった。

信長は、明智光秀をよび、

「そちに徳川どののもてなしを命ずる。くれぐれも心をつけて、おもてなしをするように」

と、いった。

明智光秀は、京都から堺にまで使いをやり、さまざまなご馳走を整え、家康をもてなした。

光秀は、羽柴秀吉とならんで、織田の家来のうちでも、世に知られた人である。

昔の本によれば、せっかくに光秀が取り寄せた魚が、くさい匂いをしているのを知った信長が、

「このような魚を、徳川どのの口へ入れるつもりか」

ひどく、光秀を叱りつけ、

「おまえではだめだ」

と、家康のもてなし役を、別の家来にかえてしまった。光秀は、これをひどく恨みに思ったというのだ。

それはともかく、光秀がもてなし役をやめ、坂本にある自分の城へ帰ったのは、本当であった。

信長が、

「光秀は城へもどり、出陣の仕度をせよ」

と、命じたからだ。

それは、なぜか……。

ちょうど、このとき、備中の高松城を攻めている、羽柴秀吉から、

「毛利の大軍が押し出してまいりました。わたくしひとりでは手におえなくなりましたので、なにとぞ、援軍をよこしてください」

と、信長へたすけをもとめてきたのである。

「よし。武田をほろぼした勢いで、毛利軍をいっきょに討ちたいらげてくれよう」

信長は、心をきめ、明智光秀、細川忠興、高山右近などの大将を先鋒軍として出発させた。

そして信長は、家康に、

「このような、あわただしいことになったが、あなたはゆっくりと遊んでいってもらいたい」

こういって、ゆうゆうと家康をもてなした。家康ばかりでなく、その家来たちにも気をつか

って、信長は、さまざまな品物をおくったりしている。

ご馳走のときなどは、信長みずから、

「このさかなは、このように料理して、こういう皿に入れて、徳川どのに差し上げよ」

と、さしずするありさまだ。

あの織田信長が、このように心を砕いて家康をもてなすことは、そのまま、徳川家康の力が大きく広がったことを示すものである。

美しい安土城の中で、信長のもてなしをうけながら、家康は、しみじみと、三年前に死なせた三郎信康の思い出にふけるのであった。

本能寺の変

織田信長は、手あつく徳川家康をもてなしながら、

「ちょうどよい折りであるから、京都や大阪、堺、奈良などへも、ゆるりと足をのばし、見物してゆかれたらどうか」

と、いった。

そして、案内のために長谷川藤五郎というものを、家康につけてくれた。

家康は、京都見物などをしてのちに、いったん浜松へ帰り、軍を率いて、信長の中国攻めに

くわわることになったのである。

「すでに、明智、細川などが、兵を率いて出発する仕度にかかっておることだし、自分も二十九日ごろに安土を出て、ひとまず京都の本能寺にとどまり、ゆるりと、諸将の兵が集まるのを待って出陣するつもりでござる」

「さようですか。では、それまでに堺見物をすまし、わたくしも本能寺へご挨拶にまいりましょう」

「さようか。では。来月の二日ごろがよろしかろう」

「承知いたしました」

と、家康は五月二十一日に安土を出発した。

家康が去ったのち、二十九日になると、織田信長は安土の城を出て、京都へ向かった。このときの信長は、わずかに三十人ほどの供の家来を連れただけであった。

つまり、安土から京都までの間は、

「おれの庭のようなものだ」

と、思いこんでいたからであろう。

すでに、長男の信忠も手勢五百をひきいて、京都へはいっている。

京都へついた織田信長は、六角通り油小路にある本能寺へはいった。現在の本能寺のあるところより、少し離れている。

京都での信長の人気は、非常に大きなものとなっていた。いまや、信長は、日本全国のうちの半分以上の国々と大名たちを、自分の下に従えている。

日本の中心から離れている東北や九州などは別にしても、これで中国地方の毛利家さえ降参させてしまえば、天下を取ったも同じことであった。

京都では、信長が天下を治めているという感じそのままであった。天皇の信頼もあって、信長の力で、このところ京都は、まことに平和な明け暮れが続いているのだ。

六月一日の朝から、天皇のおつかいが挨拶にきたり、つぎつぎに公家たちが本能寺を訪れる。

信長は、大勢の客をむかえ、本能寺の書院で大茶会をもよおした。

このころの美術品としても有名な茶の道具などを、信長は、わざわざ安土から運んできていた。

これから、いくさにいこうとしている総大将が、このように、ゆうゆうと遊んでいたのだから、信長の勢いは大したものであった。

「明智光秀も、今日か明日には、亀山の城を出て、中国へ向かうことだろうし、筒井、池田、中川などの諸大名も、おいおいに兵を率いて集まってこよう。それまでは、ゆるりとすることじゃ」

信長は、気に入りの家来、森蘭丸に笑いかけた。

四十人あまりの公家たちや、茶人、大商人、えらいお坊さまなどが本能寺へ集まり、信長が武田家を滅ぼしたことへのお祝いを述べた。

客たちが帰り、しばらくしてから、織田信長は寝所へはいった。夜中を過ぎていたろう。ずいぶんと酒をのんでいたし、信長は、すぐにねむりこんだ。どれくらい、ねむったろうか。

(おや……?)

信長は、ふとめざめた。

本能寺の、どこか遠い場所で、ただならぬ物音がきこえるではないか。

(酒によった者どもが、けんかでもしているのか?)

と思ったが、厳しい主人の信長が泊まっている寺の中で、家来たちがそのようなまねをするはずがない。

夜明けは近かったが、あたりには、まだ暁の闇がたれこめている。

そのうちに門の扉をたたきやぶる音がきこえ、人の叫び声や悲鳴がきこえはじめた。

「殿、なにごとでございましょうか」

森蘭丸をはじめ、信長の身の回りに仕えている家来たちも、起き出してきた。

「見てまいれ」

と、信長がいった。

森蘭丸たちが、大廊下へかけていった。
突然、鉄砲の音がおこり、同時に、
「わあっ……」
ときの声が、門のあたりから寺の中へ流れこんできた。
「殿っ！」
森蘭丸が顔色をかえ、駆けもどってきて、
「明智光秀殿が謀叛にござります」
「なに……？」
信長は、信じかねる顔つきであった。
自分が信じきっていて、こんどの戦いの先発を命じた明智光秀が、中国へゆくのをやめ、主人の信長を討ちに本能寺へ攻めこんできたというのである。
（まさか……？）
思いはしたが、これは、本当のことであった。
そうと知ったとき、織田信長は、
「刀をもて。弓をもて」
てきぱきと戦いの仕度を命じながら、蘭丸にいった。
「女たちを早く逃がしてやれ」

「はいっ」
「光秀が謀叛か……。こうしたこともあるものか」
にやりと笑いつつ、信長は弓と矢をつかみ、廊下へ出ていった。

明智光秀

織田信長が、
「まさか、光秀が……？」
と、思ったように、明智光秀は自分でも、つい一か月ほど前までは、主人、信長の首をとろうなどとは、考えてもみなかったろう。
明智光秀とは、どのような侍であったのか。
明智家は、美濃の国、明智庄におこったもので、いまの岐阜市の東、およそ四十キロメートルほどのところにある。
光秀の父、明智光隆は、稲葉山城主の斎藤道三に味方をし、自分の明智の城を守っていた。
道三が死んで、斎藤家は、やがて織田信長にほろぼされたわけだが、そのまえに、明智家は、斎藤父子の争いに巻きこまれ、美濃の国を去っていた。
こののち、明智光秀は越前の朝倉義景の世話を受けるようになった。

足利将軍、義昭が、朝倉家の世話を受けているのに、織田信長へつかいをやり、
「どうか、わたしをたすけて、天下を治めてもらいたい」
と、いってきた話は、前に述べたが、このとき、明智光秀は、
「いまに、きっと天下は信長のものになるであろう」
見極めをつけていた。
だから光秀は、足利将軍と信長の間にはいって、二人を結びつけるために、いろいろと働いたようである。
信長のほうでも、
「明智光秀という男は、見どころがある。いまにわしの役にたってくれるだろう」
と考え、光秀を大切にした。
光秀は、侍でありながら、そのころの一流の学者でもあったし、歌を詠むこともじょうずで、茶道にも通じている。
それでいて、いくさをさせてもうまい。
こういうわけで、光秀は将軍、義昭の代理というかたちで、京都の朝廷へもよく出入りをしており、
「うまく光秀をつかえば、すべてがうまくはこぶにちがいない」
織田信長は、光秀を家来にした。光秀も、懸命にはたらいた。信長は、光秀をどしどし出世

させた。

近江、坂本の城主にさせ、光秀が丹波の国を攻め、これを苦心の末に征伐をしておさめたときには、近江十万石の土地に加えて、丹波の国もあたえた。

そして、光秀は、亀山の城の主ともなったのである。

まず、信長の家来の中での出世頭といえば、羽柴秀吉と明智光秀だと、世に謳われたものであった。

このように、信長からかわいがられていた光秀なのに、なぜ、主人を殺そうとしたのか……。

そのわけについては、いろいろの物語がうまれている。まず、

「信長の荒々しい気性と、学者のような光秀の穏やかな人がらとはどうしても、合わなくて、信長のほうではなんとも思わぬことでも、光秀にとっては、たまらない恥をうけたと感じることが多かった。光秀は、密かに信長をうらんでいた」

という人もあるし、

「羽柴秀吉が、あまりに出世してゆくので、光秀はこれをねたみ、信長を殺して天下をとり、秀吉も押えつけてしまおうとした」

また、

「長い間、光秀の胸の中にひそんでいた天下をとる夢が、とつぜん、かたちになってあらわれた」

と、いう人もある。信長から、

「おまえは、中国へ向けて先発せよ」

との命令をうけ、明智光秀は坂本城へ戻り、さらに亀山の城へ移って出陣の準備にとりかかった。

この間に、主人の信長が、わずかな家来を連れただけで京都へはいり、本能寺で大茶会をもよおすことなども、もちろん光秀の耳へはいっていた。

光秀の家来たちも、六月一日になるまでは、まさか自分たちの主人が、織田信長という主人を殺そうとしていることを知らなかった。

六月一日の夕方になって、

「信長公が、わが軍の出発の有様をごらんになるそうじゃ」

急に、光秀はいいだした。

そして、全軍を亀山の東にあつめ、あっというまに京都へ向かって、進みはじめたのである。

このときはじめて、光秀はおもだった家来たちへ、

「右府さま（信長）の首を討つつもりだ」

と、うちあけた。

光秀のむこである明智左馬之助は、この決意をきくや、

「ひとたび、口に出されたからには、後へひかれませぬ」

と、こたえた。

とにかく、信長と光秀との間には、歴史の書物などにしるされてはいない、なんらかのことがあったのであろう。

（信長を討つなら、いまこのときだ。信長はわずか、三十人ほどの家来に囲まれて、寺の中に眠っているのだ。かならず首をとれる！）

明智光秀が、そう決心したことだけは紛れもないことである。

なにしろ、亀山城から京都までは二十四キロメートルそこそこの道のりだから、こうした明智軍の動きが、信長の耳へはいるすきもなかった。

夜道をかけて、進みに進み、いざ、京の町へ入ろうとするときに、

「信長公のみしるしを討つ！」

はじめて全軍に伝えたのだから、兵士たちにしても「いや」だとか「いい」とか考える間もない。

さすがの織田信長も、あの、いつも穏やかな光秀が、このようにすばやく自分に迫ってこようとは、夢にも思わなかったのだ。

人のこころやおこないには、表から見ただけでは、考えおよばぬものをひそめていることがある。

「あのような人が、まさか、あのようなことをするとは思ってもみなかった」

と、いうことが多い。それは、新聞にのる社会面の記事ひとつ見てもわかることだ。

また、事をおこす当人でさえ、

「まさか、自分がそんなことをすることはない」

と、ふだんは思っていることも、もののはずみでやってのける。

これがよい事ならばいうことはないのだが、悪い事にあらわれたときには、意外な大事をひきおこすものだ。

明智光秀のしたことが、よいとか悪いとかいっているのではない。人間というすばらしい生きものは、理屈では知ることのできぬ一種の力によって生きている。それは自分でも他人でも、どうすることもできぬ力なのだ。

さて……。

亀山を発した明智軍は、一万三千といわれる。

暁の闇がたちこめた京の町へ、明智軍はひたひたと入りこみ、たちまちに本能寺のまわりを、蟻一匹もはい出せぬように取り囲んでしまった。

寺といっても、本能寺はただの寺ではない。信長のような大将が泊まる寺であるから、堀を造り、土居を築き、これで仏殿や殿舎をかこみ、小さな城のような構えになっている。

しかし、一万三千の兵に囲まれては、どうしようもない。

「それ！」
明智光秀が、采配をうちふり、
「かならず信長の首をあげよ」
と、叫んだ。
こうして、本能寺の変の幕は、切っておとされたのだ。

信長死す

本能寺での戦いは、短い間に終わりを告げた。この夜は百人あまりの家来が信長とともにいたけれども、一万余りの敵を相手にしては、かなうはずもない。
織田信長は、弓の弦が切れると、十文字のかまやりをふるって明智勢をつきくずし、最後まで闘いぬいた。
だが、むざむざ自分の首を敵に渡すような信長ではない。
「わしの首を渡すな！」
ときを見て、森蘭丸に命じ、自分は殿舎の奥の一室へはいると、すばやくまわりに火をかけ、中から戸をとざし、そこで、みごとに腹を切って死んだ。
信長は、ときに四十九歳。

あと十年、この人が生きていたなら、日本の歴史は大きく変わっていたろう。そして、その影響は、なんらかのかたちで、現代に生きているわれわれにも、伝わっていたにちがいない。

こうしてみると、人間の生き死には、何かのかたちで、後の世の人に関わりあいがあるものだ。一つの家、一つの家族の歴史にはそれがある。

やがて、本能寺は、内と外からの放火によって燃え上がり、すさまじい火柱をふきあげて焼けおちてしまった。

あの物事に注意深かった信長にしては、信じられぬ油断のもとに、あっけなく世を去ったのである。

本能寺の変をきいた信長の子、織田信忠は、自分が泊まっていた妙覚寺という寺を出て、五百ほどの兵をひきい、

「父上をたすけよ！」

本能寺へかけつけ、父とともに闘おうと思ったが、すでに敵軍がひしひしと本能寺を取り囲み、外から突入することができない。

「もはや、これまでじゃ」

と、信忠はあきらめ、すぐに二条の御所へはいった。

ここは、二条の城とも呼ばれ、十四年ほどまえに、織田信長が将軍、義昭のために建ててやった屋形である。

義昭が信長によって、京都から追い払われたのちは、天皇の皇太子が住まわれていたのだが、

「かようなわけでございまして、わたくしは父、信長のかわりに明智勢とたたかわねばなりませぬ。それには、どうしても、この御所にたてこもらぬと、大勢の敵を迎え討つことができませぬゆえ、なにとぞ、上の御所までお移りくださいますよう」

信忠は、こういって皇太子を上の御所へうつした。

すでに朝の光は、くまなく京の町にゆきわたっている。

そのうちに、信忠をたすけるため、二条の城へ集まってくるものもあり、城にたてこもる織田軍は千人ほどになった。城といっても、堀や、石垣や、櫓（やぐら）があるだけで、もともとは将軍の屋敷であったのだから、一万余りの大軍を迎えては、とても勝ち目はない。

本能寺が焼けおちると、明智光秀は、全軍を率いて、二条の御所へ攻めよせてきた。

織田信忠は、父ゆずりの鉄砲隊を巧みにつかい、何度も何度も、押しよせる敵を追い返した。

このときの信忠のたたかいぶりは、

「さすが、右大臣の子だけのことはある」

評判になったほど、めざましかったという。

明智軍は、なかなかに二条の御所をうちやぶれないので、御所の近くの近衛家の屋根へあが

り、ここから御所を見おろし、鉄砲や弓で攻めたてた。
このため、織田方の戦死者がふえてきて、ついに御所へ火がつけられてしまった。
「このぶんでは、父上も亡くなられたと見えるな」
と、信忠はあきらめの笑いをもらし、
「親子ともども、死ぬとは……、よくよく運がつきたのであろう」
と、家来の鎌田新介に介錯を命じ、腹を切って死んだ。二十六歳であった。
この信忠だけでも生き残っていたら、また天下の様子もちがってきていたろう、と思われた。
ともあれ一五八二年（天正十年）六月一日夜から二日朝にかけて、織田父子を魔の時が包み、見のがしてはくれなかった。
信忠は、死にのぞみ、家来の前田玄以に、
「なんとしても、逃げて岐阜の城へもどり、わしの妻や子を清洲の城へ移し、おまえが守ってくれ」
とたのんだ。
玄以はうまくのがれ出て、信忠の妻や、子の三法師をつれ出し、清洲へ移すことに成功をした。
明智光秀は……。

信長父子を殺したのち、

「逃げ散った織田方のものをさがし出し、残らず引っとらえよ。またはきれ」

と命じ、一方では、

「いま、自分が信長父子を攻め滅ぼした。これも信長の悪逆が天下のさまたげになるからである。五十日、百日の間には、京都のまわりの国々を治めるつもりであるから、なにとぞ、この光秀に力を合わせていただきたい」

という意味の手紙を、中国の毛利や、四国の長宗我部、越後の上杉など、これまで織田信長のいうことをきかなかった大名たちへ送った。

そして、光秀は、兵をまとめ、近江の坂本城へいったん帰ったのである。

安土の城へ、本能寺の変の噂が伝わってきたのは、その日のうちのことであった。夜になると、噂がまことのことだとわかった。

京都から安土までは四十キロにみたぬ近さだし、安土城の留守をしていた織田家のものたちは、いろいろ相談をしたあげく、

「安土に、敵、明智軍をむかえても勝ち目はない」

るすいの大将、蒲生賢秀がいった。

「この上は、わしの城へのがれよう」

賢秀は、信長の妻そのほかをつれ、翌日の夕方までに近江、日野にあたる自分の城へひきあ

げた。

みすみす、安土の城に敵を入れるのは、くやしいことだから焼いてしまおうというものもいた。

しかし、賢秀は、

「この城は、信長さまが心を尽くして築かれた、天下に二つとない名城である。これを焼き払うには、しのびない」

といい、城の中の金銀や宝物にも手をつけずに、引きあげた。

明智光秀は、六月五日に安土城へやってきた。

つい先ごろまでは、この城の中で、信長に頭を下げ、その命令に従っていた光秀が、この金色に輝く城を自分のものとして帰ってきたのである。

信長の財産も、光秀の手につかまれた。光秀は、これを家来たちに分け与えた。

「この城は、おまえが守れ」

と、光秀は、婿の明智左馬之助にいった。

豊臣秀吉

高松城の水攻め

本能寺の変が、出陣中の羽柴秀吉の耳へ届いたのは、六月三日の夜のことだといわれている。

これは、堺の商人で長谷川宗仁というものが、いち早く秀吉へ向けて、急使を走らせたからだ。

そのころ……。

羽柴秀吉は、備中（岡山県の西部）の高松城を攻めていた。この城は、毛利方の清水宗治という武将が守っており、いくら秀吉が降参をすすめても、いうことをきかない。

高松城には五千ほどの兵が、立て籠っている。これを囲む秀吉の軍は三万ほどであった。

はじめのうちは、秀吉も城へ攻めかけてみたのだが、清水宗治の兵はなかなか強く、こちらの戦死者が多くなるばかりなので、

「これは、気長に攻めるより、仕方があるまい。わしは、無駄な血を流していくさをするのは、大嫌いだからな」

いろいろと考えた末に、城のまわりへ土手を築き、川の流れをせきとめ、高松城を水びたしにしてしまったのである。

城は、まるで湖に浮かんだようになった。しかも、おりからの梅雨どきで、水は満々とふえ、城の中へも流れこんでいった。

こうして、すっかり城を囲んでしまったので、清水方では手も足もでず、城の中の食べ物を食べ尽くしてしまえば、飢え死にを待つばかりとなった。

水攻めは、兵糧攻めをかねていたわけだ。

これを知った毛利輝元は、おじの小早川隆景と吉川元春とともに、四万余りの大軍を率い、高松城をすくうためにすすんできた。

「毛利軍の主力が出てきたな。いまこそ上様（信長）にも出陣していただき、このさい、一挙に毛利を撃ち破ってしまったほうがよい」

羽柴秀吉は、こう考え、急いで使いを安土の織田信長のもとへ走らせたのである。

信長は、これにこたえ、京都まで出てきたところを、明智光秀に背かれて、急死をした。

本能寺の変を知ったとき、秀吉は、
（このことを毛利方でも知っているだろうか……？）
と、考えた。
明智光秀からは、むろんのこと、
「信長を討ったから、これからは、互いに力を合わせよう」
と、毛利方へ、使者が駆けつけたはずである。
そうなれば、毛利軍も高松城の清水宗治も、急に気が強くなり、秀吉のいうことなどは、決してきくまい。
ちょうど、高松城からは、
「もしも自分が切腹をして果てたなら、城中のものの命はたすけてくださるか？」
と、大将の清水宗治が、秀吉へ申し込んできたところであった。
水攻めにあって、一か月もたち、しかも毛利軍が、なかなか秀吉を追いはらってくれないので、宗治は最後の決心をしたものらしい。
（こうなれば、なんとしても、上様の死んだことを、清水宗治に知らせてはまずい）
と、羽柴秀吉は、ただちに、
「承知をした」
返事をあたえた。

一説によると、明智光秀が毛利方へやった使いの者が、まちがえて秀吉の陣中へ紛れ込んできたので、すぐにつかまえ、光秀の手紙は秀吉の手にわたってしまったともいわれている。

六月四日の朝になっても、毛利方では信長の死を知らなかった。

この朝……。

清水宗治は、秀吉からおくられた船一そうに乗り、城から水面へ漕ぎだしてきた。

そして、見事に腹を切って死んだ。

秀吉は約束どおり、城中のものたちを毛利方へ送りかえしてやった。

「急げ、急げ」

と、秀吉はたくみに毛利軍へ働きかけ、備中、美作（岡山県）、伯耆（鳥取県）などの国を、織田方へ譲り渡すという約束をとりつけ、毛利方との休戦講和に成功したのである。

毛利方では、

「織田信長の率いる大軍が、すぐそこまでやってきているらしい。このうえ、いくさをしかけても、無駄なことである」

と、思いこんでおり、まえまえから休戦のとりきめを急いでいたところだったし、秀吉のいうなりになってしまった。

それにしても、どこまでも信長の死をかくし、わずか一日のうちにすべてを始末してしまった羽柴秀吉のはたらきは、たいしたものだといわねばなるまい。

毛利との休戦がきまると、秀吉は、わざとゆるゆる仕度にかかりながら、それでも六日の昼すぎになって、

「それ、ひきあげよ」

高松の陣をはらって、出発をした。

毛利輝元が京都においていた家来がかけつけて、本能寺の変を知らせたのは、このあとのことである。

「それと知っていたら、秀吉のいうままになるのではなかった！」

と、毛利軍はくやしがったが、もうおそい。秀吉は、

「明智光秀の力が整わぬうちに、一刻も早く駆けもどり、光秀を討って上様の仇をとらねばならぬ」

そのことで、頭がいっぱいであった。

信長父子が死んでしまったなら、ふたたび天下は乱れかかる。そうなれば、力が大きく強い大名が、まっさきに天下をとる機会をつかむことになる。

「よし、おれがやる！」

秀吉は、はじめて、いままでの自分が思ってもみなかった力が湧いてくるのを知った。

信長の死を、悲しんでいるひまもないほどである。

「急げ、急げ！」

おりからの大雨の中を、しゃにむに軍をすすめ、七日の夜ふけに、自分の城がある姫路へついたのである。

およそ、まる一日で、秀吉は二十里（八十キロメートル）の道のりを馬で走った。この数日のつかれがでて、秀吉は馬の上で何度もいねむりをし、馬から落ちたりした。

八日いっぱいは、明智軍とのいくさの準備をおこない、九日の朝になると、

「上様のかたきを討ちにゆくのじゃ。みなのもの、生きてかえるな」

と、兵をはげまし、羽柴秀吉は勇気りんりんとして姫路を出発した。

このとき、秀吉は、城の蔵をあけ、中の金銀や米を全部出し、

「身分に応じて、家来たちへ、みんな分けてやれ」

と、いった。

家来たちは、みな、

「殿様は、ご自分の財産をみんな投げだして、われわれに与えられた。それは、きっと、この城へ戻るつもりはないほどの強い覚悟をなさって、明智光秀を討とうというのだ。われわれも殿様のために、命をかけて働こう」

と、いい合った。

秀吉が、家来たちを使うありさまは、いつも、このように巧みであった。

六月十日の夜ふけ……。

秀吉の軍は、兵庫（神戸市）へついた。十一日の朝になると、さらに尼崎まで進んだ。

いっぽう、徳川家康はどうしていたろうか……。

家康は、五十名ほどの供の家来をつれ、堺見物をすませたのち、六月二日の朝に、本能寺の信長へ挨拶をするため、京都へ向かうつもりだった。そこへ、

「明智殿謀叛」

の知らせがはいった。

家康としても、家来は少ないし、いくさの仕度もないから、このまま京都へゆくことはできない。明智軍に見つかれば、家康は殺されてしまうであろう。

家康は、とりあえず河内（大阪府）へ出て、知り合いの商人から詳しい模様をききとり、伊賀（三重県）の山中を抜け、伊勢へ出て、白子の浜から舟に乗り、三河の大浜へ着いた。大浜から、家康の城がある岡崎は目の前である。

徳川家康が岡崎城へはいったのは、四日の夜とも、五日の朝ともいわれている。

「よし、わしも光秀を討って、天下を……」

と、家康は思ったかもしれない。

けれども、家康は秀吉のように、自分の城の財産をみんな家来にわけ、あとのこともかまわず戦争にでてゆく、というようなまねはできなかった。

自分の国の政治のこと、戦争のこと、家来たちのことなど、若いときから口には尽くせぬ苦

労をなめてきた家康だけに、あとのことをきちんとしておかぬと、思いきっていくさをする気持ちにはなれない。

家康は、少年のころから、一国の主であった。

身分の軽い小者として織田信長に仕え、いつも信長の大きな翼の下で、思いきり働いてきた羽柴秀吉とは、そこが違っていたのである。

六月十四日になって、徳川家康は、ようやく兵を率いて尾張の鳴海まで押し出した。

ここは、二十数年まえに、いまはなき織田信長が、今川義元の首をあげた桶狭間の近くであった。

山崎の決戦

明智光秀は、

「わたくしが信長を滅ぼしました」

と、天下に発表するとともに、

「ぜひぜひ、味方になってくれるように」

細川忠興へ、使いをやった。忠興の妻は、光秀の娘である。

おまけに忠興の父、藤孝は、昔、足利義昭の家来で、光秀といっしょに、将軍をたすけて働

いたこともある友だちであった。

だから、

「婿の忠興殿は、きっと、わしの味方についてくれるであろう」

光秀が、そう思ったのも無理はない。

細川父子も、信長の命令で、中国へ出陣する仕度にかかっていたところ、本能寺の変を知らされた。

細川家の城は、丹後（京都府）の宮津にあった。

「これは、大変なことになったぞ」

と、細川藤孝は、

「わしは、このさい隠居してしまおう。そのほうがよい。おまえが家を継ぎ、すべての指揮をとれ」

子の忠興にいった。

「父上。きっと明智どのから味方をせよ、と申してまいりましょうな」

「うむ。なれど明智方に味方をしては危ない。光秀どのは天下を治めるだけの力をそなえてはおらぬ。このさい、きっぱりと心を決め、どこまでも亡き信長公の冥福を祈るという態度を、くずしてはならぬ」

「はい」

「おまえの妻のことを思えば、心も痛むであろうが……。なにごとも戦国のならいと思え」
「わかっております」
細川父子は、まげを切って、信長の冥福を祈った。
だから、明智光秀が、
「味方をしてくれれば、摂津の国をあたえよう」
と、いってきても、これを、ことわったのである。
光秀は、焦りはじめた。そして、大和（奈良県）郡山の城主、筒井順慶にも、
「味方を頼む」
と、いってやった。
順慶も、昔から光秀にかわいがられていた侍だし、一城の主となれたのも、光秀から信長へうまくとりなしてくれたからである。
はじめのうちは、
「よろしゅうござる」
と、筒井順慶は光秀の味方になって、兵をくりだしたりした。
ところが……。
「羽柴秀吉の軍が、早くも高松をひきあげ、姫路の城へはいって、いくさのしたくにかかっております」

との知らせがはいった。

「もう、ひきあげてきたのか……？」

順慶は、秀吉のすばやい動きにびっくりした。

（こりゃ、秀吉にはかなわぬかもしれぬぞ。うっかり光秀の味方をしたら、あとで、とんだことになるわい）

そこへ、明智光秀から、

「秀吉の軍が、もうすぐに出てくるから、おぬしは急いで河内まで押し出し、陣をかまえてもらいたい」

使者が飛んできた。筒井順慶は、

（どちらへ味方をしたらよかろうかな？）

頭をひねったあげく、

（しばらくは、どちらの味方もせず、様子を見ることにしよう）

光秀のいうことなどきかずに、自分の城へこもり、食物などを運びこんで、動こうとしなかった。

「早く出陣してくれ」

しきりに、光秀の使いがやってくる。しかし、順慶はのらりくらりといいのがれていた。

羽柴秀吉からも、やがて、

「わしの味方をせよ。わるいようにはしないから……」
と、使いがきた。
（やっぱり、秀吉に味方しよう）
そうきめて、誓いの証文を書いて送ったが、むろん光秀には黙っていたのである。
羽柴秀吉は、全軍をひきいて富田のあたりへ押し出してきた。
明智光秀も、
（秀吉が戻ってくるまえに、もっと、こちらの力を大きくしておきたかったのだが……）
と、秀吉の進軍の早さに驚き、いくらかあわてぎみに軍を率い、洞ケ峠に陣を構え、
「筒井順慶は、まだこぬか？」
じりじりしながら待ったけれども、筒井軍はあらわれない。
しかたなく、峠をくだって下鳥羽（京都府）へ出て淀の城へも兵を入れた。
この淀城の近くが、山崎と呼ばれるところである。
ここは、いくさをするについての、重要な地形をなしていた。
つまり、京都盆地の平野が、山崎のあたりへきて、東と西の山に挟まれ、この山と山の間を淀川が流れている。西の天王山、東の男山にはさまれたところが、くびれたように狭い。
この狭いところを通って、むこうの大阪方面から、羽柴秀吉が攻めてくるのであった。せまいところなのだから、秀吉の大軍は一度に通れない。

そこを狙って、こちらからたたきつぶす。作戦としては、それがよい。

だが、どうしたわけか……。

明智光秀は、いったん山崎へくりだした兵をひっこめ、盆地が広々としたあたりまでくだって、勝竜寺、淀や下鳥羽のあたりへ陣地を構えた。

光秀は、秀吉のすさまじい進軍の早さに驚き、

（おれの使いのものは、毛利方へ着いたのだろうか？　いや、たしかに着いているはずだ。着いていれば、信長の死んだことを知った毛利輝元は、こうも簡単に秀吉を引きあげさせることはないはずだが……？）

迷い、悩み、自分では気づかぬうちに、いくさをするための闘志をうしなっていたのかもしれない。

六月十二日の夜……。

秀吉は、天王山を占領した。

秀吉軍は、山と山に挟まれたところを通り抜け、明智軍の前に現われたのである。

決戦は、十三日の昼ごろからはじまった。

秀吉軍は、すべてを合わせて四万。

光秀軍は、一万六千。

兵力において、光秀は、すでに負けていた。戦場は、前夜からの雨に煙っていた。

織田信長の三男、信孝が、丹羽長秀とともに駆けつけ、秀吉の軍に加わったころ、両軍の鉄砲が鳴り響いた。

「主人にそむいた逆賊、明智光秀を討て！」

と、羽柴秀吉はさけんだ。

秀吉軍にはいっている黒田孝高、高山重友、中川清秀、池田恒興、加藤光泰などの部隊が、

「うわあ……！」

ときの声をあげて、突進した。

それでも、明智方の斎藤利三が率いる一隊は、この秀吉軍の先鋒に襲いかかり、激しく戦った。

「天王山を奪いかえせ」

と、光秀は命じた。

そのくらいなら、なにも山崎からひきあげず、秀吉軍が山へのぼるまえに、天王山へ入っていればよかったのである。

ときは、すでにおそかった。

押しかえし、また押しもどされ、必死に戦ううちに、

（これは、もういかぬ）

と明智方の武将、御牧三左衛門は、

「このままでは、わが軍は全滅してしまいます。そうならぬうちに、ひとまず軍をひき、近江へもどって敵を迎えてください」

使いのものを、総大将、明智光秀のもとへ走らせた。

光秀は青ざめ、くちびるをかみしめていたが、そばにいた比田則家というものが、

「御牧殿の申すこと、もっともでござる」

すすめたので、光秀は心を決め、全軍に退却を命じた。

「それ逃げろ」

「とても、かなわぬ」

こうなると、光秀軍の兵たちは、先を争い、雨と泥にまみれ、めったやたらに逃げはじめる。

「勝ったぞ！」

「ひとりものがすな！」

反対に、秀吉軍は勢いづき、馬をならべ、槍の穂先をひらめかせて、追撃をした。

この有様を見て、

「もうだいじょうぶ。わが軍の勝利じゃ」

羽柴秀吉は、にっこり笑ったが、

「なれど、敵が逃げる道々を厳しくかためよ。光秀は勝竜寺の城へ逃げこんだらしいが、けっ

た。

光秀は、明智茂朝、進士作左衛門など、わずかな家来たちに守られ、ひそかに勝竜寺をで

まだ、雨はやまない。

この勝竜寺城から、明智光秀がのがれたのは、夜が更けてからであった。

厳しい命令をくだした。

して逃がすな」

（坂本の城へかえり、そこで秀吉と戦おう）

そのつもりであった。

敵のかこみはきびしい。

雨のやみの中に、敵の松明のあかりがはしり、槍が光っていた。

その中を、光秀の一行はどうにかきりぬけ、淀川の岸べから伏見桃山の中腹をこえ、山の東側へくだりさらに北へ道をとってすすんだ。

光秀たちが、小栗栖の村のあたりへさしかかったときである。

「あっ……！」

先頭をゆく村越三十郎というものが、叫び声をあげた。

「どうした？」

「三十郎、返事をせよ」

暗い竹やぶの道である。

明智光秀が馬から身を乗りだしたとき、竹やぶの中から突き出された槍が、光秀の腹を突きさした。

「む、むう……」

とっさのできごとだ。

光秀は、うなり声をあげた。

竹やぶの中から、

「おまえたちは落ち武者だろう」

「刀も、鎧もおいてゆけ」

大勢の声がした。

これは、このあたりの土民である。いくさに負けて逃げる侍を殺し、刀や槍、鎧、兜などを奪って金にする者たちらしい。

光秀は、痛みがはげしく、馬に乗っていられなくなり、明智茂朝へ、

「わしの首をうて。とても坂本へは帰れぬ」

といい、ついに、ここで死んだ。

茂朝は、光秀の首を竹やぶの中へかくして、逃げたが、やがて首は見つけだされ、羽柴秀吉の前へとどけられた。

織田信長を討ち滅ぼしてから、わずかに十日あまりで、明智光秀の天下取りの夢はきえた。

そして、光秀を滅ぼした羽柴秀吉は、主人のかたきをまっ先に討ったばかりでなく、このことによって、思いもかけなかった天下取りの足がかりをえたことになる。

まるで、光秀は、秀吉に天下を取らせるために生まれてきたようなものではないか。

秀吉は光秀の首を京都の粟田口というところへ、さらしものにして、

「このとおり、明智光秀を討って、主人の恨みをはらしました」

と、世の中に知らせたのである。

さらに、羽柴秀吉は近江へ入り、光秀に味方していた人びとを降参させ、あるいは攻め滅ぼした。

近江から美濃へ、秀吉は、本能寺の変があってから、一か月もたたぬうち、まえの主人の信長の本国だった国々を手に収めてしまった。

この、すばやい働きには、信長の重臣である、柴田勝家も、駆けつけるひまがなかった。

柴田勝家は、北国も北国、遠い越後のほうへ出陣していて、上杉景勝と戦っていたのだ。

本能寺の変を知ったのは六月八日ごろだし、とても十三日の山崎の決戦に駆けつけるわけにはいかない。

徳川家康は、

「光秀は、わたしが滅ぼしましたから、ひとまずお帰りください」

との秀吉の使いがきたので、浜松へ戻らぬわけにはいかなかった。

こうして、羽柴秀吉は、だれよりも早く、主人のかたきを討った。その目覚ましい働きを認めぬものはない。

秀吉の偉さは、急に大きなものとなった。そういってよい。

ここで、あの美しい夢の城——安土城のことを述べておきたい。

安土城は、焼けてしまったのである。

この城は、一時明智軍のものとなり、光秀の婿の明智左馬之助が守っていたが、山崎の敗戦をきくと、

「父上は、きっと坂本へ引きあげたにちがいない。こうなれば坂本へはいって、父上とともに戦おう」

全軍を率いて安土を出発し、坂本へむかった。

このとき、左馬之助が安土城を焼き払ったと、しるしている書物もある。

また、左馬之助が出ていったあと、信長の次男の織田信雄がはいってきて、この信雄が、亡き父が丹精込めて築いた宝物のような名城を焼き払ってしまったともいわれている。

こうなると、わけがわからなくなる。

敵は逃げてしまったのだから、父の城を灰にすることはないはずだが、もしそうなら、歴史の表面にあらわれてはいない何かの理由があったのだろう。

まことに惜しいことだが、死んだ織田信長は、あの世から、
「なに、生きているものは、必ず死ぬ。つくりあげたものは、必ずこわれるのだ。それでよいわ」
こともなげに、笑っていたかもしれない。

秀吉のおいたち

羽柴秀吉は、一五三七年（天文六年）の二月六日に、尾張、中村（いまの名古屋市内）に生まれた。

父の名を、木下弥右衛門という。

弥右衛門は、織田信長の父、信秀に仕えたことがある。仕えたといっても、ごく軽い身分のもので、兵隊の中でもいちばん下の小者にすぎなかった。

そのうちに、弥右衛門はいくさに出て傷をうけ、十分に働くことができなくなったので、中村へひきこもり百姓になった。

そして、この傷がもとで、秀吉が七歳のとき、病死をしてしまったのである。

秀吉の母はなかといって、働きものの婦人であったが、夫に死なれ、子どもの秀吉を育てているうち、人のすすめもあり、これも織田信秀の茶坊主をつとめていた筑阿弥のもとへ、二度

めの嫁入りをした。

秀吉を連れ子にして、再婚したなかは、筑阿弥との間に、一男一女をうんだ。

子どものころの秀吉は、日吉丸とよばれていたともいうが、それよりも、

「小ざる、小ざる」

と、あだ名をつけられていたのは、そのころから、やはり顔つきが、さるに似ていたのであろう。

やがて小ざるは、近くの寺へ小僧にだされた。

しかし、いたずらばかりして、お寺の仏像をこわしたり、和尚さんのいうことをきかなかったりで、

「もう、寺へはおけぬ」

追い出されてしまった。

そのつぎには、鍛冶屋へ小僧にいった。そこでも追い出される。その次も、またその次も、追い出される。

母のなかは、

「困ったのう。なんとか家へひきとり、わたしの手で育てたいのだけれど……」

なげくと、小ざるは、

「かあさんは、二度めの嫁入りをしたのだし、それに、今度のおとうさんとおれとは、気があ

わない。心配しないでもいいよ。ねえ、かあさん。おれはな、この中村を飛び出し、どこかのえらい大名の家来になって、きっと出世をしてみせる」

「どこへゆくつもりなのだえ？」

「わからないが、とにかく三河のほうへいってみようと思う」

死んだ父の弥右衛門が、

「わしは、こんな怪我をして、体がきかなくなってしもうたが、いまはいくさの世の中じゃ。いくさに出て、手柄をたてれば、いくらでも出世ができる」

と、いっていたことを、小ざるは忘れなかったらしい。

小ざるが、ふるさとを飛び出したのは、十五歳のときだといわれている。

小ざるは、亡き父の形見にもらった銭で、まず針を買いこみ、その針を売ったり、食べものにかえたりして、旅を続けたそうだ。

小ざるについての話は、いろいろ伝えられているが、本当のところ、若いころの秀吉が、どこでなにをしていたか、はっきりしたことはわかっていない。

十六歳ごろから三年ほど、遠江の国（静岡県）で、松下加兵衛という大将の家来になっていたこともある。

とにかく、子どものころから秀吉は、さまざまな苦労をし、その苦労に負けず、いつも、明るい気持ちで頭をはたらかせて、よく働き、世の中のいろいろなしくみを覚えたのである。

秀吉の愛敬のあるおもしろい顔つきや、気転が人なみ以上にすぐれていたことも、こうした世渡りのうちに、ますます磨きがかけられていった。

こうして、松下家を出たさるの秀吉が、織田信長に仕えたのは、十九歳か二十歳ごろであったのだろう。

信長につかえてからの秀吉は、とんとんびょうしに出世をしていった。それは、もちろん秀吉の働きがすぐれていたからだ。

はじめ、信長のぞうりとりになった秀吉が、ある寒い朝、まだ暗いうちから、主人のぞうりを、ふところにいれてあたためていて、

「おはようございます」

やがて、外へ出かける信長の前へ、ぞうりを出した。

「おや……？」

信長は、つめたいと思っていたぞうりのあたたかさを足に感じて、

「おまえがふところであたためていたのか。心のきいたやつじゃ」

いっぺんに、秀吉が気に入ってしまったという話は有名である。この話がうそかほんとうかは別にして、一事が万事、秀吉の働きぶりは、このようなものだったにちがいない。

あの気短で、鋭い神経をもち、乱暴者として有名だった若いころの織田信長に気に入られたことだけでも、秀吉はなみなみの男ではなかった。

「さるは、いつも人のいやがることをひきうけて働く。これには、まことに感心をさせられる」

と、いつも信長はいっていた。

気むずかしい信長が、かんしゃくをおこしているときなぞ、

「うっかり、殿様のおそばに近づいて口をきいたりすると、お怒りにふれて、手討ちにもなりかねないぞ」

と、家来たちはおそれていたが、しかし秀吉は平気で、のこのこと信長の前へでてゆき、

「殿様。けさはよいお天気でございますな。お日さまがにこにこしております」

などと、笑いかける。

すると信長の機嫌も不思議によくなり、秀吉の面白い世間話などにひきこまれ、しまいにはゆかいそうな笑い声をたてはじめる。

まず、こういったわけで……。

ぞうりとりの木下藤吉郎が羽柴筑前守秀吉という大名にまで出世をしたわけである。

そして、主人の信長の急死。

信長のかたきを討った山崎の戦争。

世の中の誰の目にも、

「秀吉どのは、天下を取るつもりじゃ」

と、わかるほどの大きさを、昔の針売りの小ざるは、身につけていたのであった。
このとき、羽柴秀吉は四十六歳になっていた。

清洲の会議

山崎の決戦に明智光秀が滅びてから、およそ半月ほどのちの六月二十七日――。
尾張、清洲の城で、会議がひらかれた。
この会議は、
「信長公が亡くなったあとの織田家を、だれが継ぐべきであろうか」
それを決めるためのものであった。
本能寺の変では、信長と、長男の信忠とが死んでしまった。
あとに残った信長の子は……。
次男の信雄――。
三男の信孝――。
この二人である。
ふたりのどちらかが織田家を継ぐか、または、死んだ信忠の子の三法師が、祖父の信長の跡を継ぐか、この三つの方法に絞られた。

集まったものは、亡き織田信長の重臣たちである。
まず、羽柴秀吉。
つぎに、柴田勝家――越前（福井県）北ノ庄城主。
池田恒興――摂津（兵庫県）尼崎城主。
丹羽長秀――近江（滋賀県）佐和山城主。
などのほかに、織田のおもだった家臣たちが、みな集まってきた。
「つぎの主人となられるのは、信孝さまであろうな」
「なぜだ？」
「信雄さまは、山崎の戦いに駆けつけることができなかったのに、信孝さまは丹羽長秀どのとともに、戦場へ駆けつけ、御父君のかたきをとられたわけじゃ。それだけに、のぞみはある」
「なるほど……」
家来たちの評判は、さまざまなものであったが、
「わしは、どこまでも三法師君を織田家の跡継ぎにするつもりだ」
と、羽柴秀吉は心にきめていた。
この会議は、なかなかにむずかしかったといえる。
たとえば、柴田勝家などは、
「この機会に、秀吉は三法師君をかつぎあげ、自分が天下を取ろうと考えているにちがいな

い。そうなっては、何ごとも、あの小ざかしい羽柴秀吉の思うままになってしまう。これは、おもしろくないことである」

しきりに考えているところへ、織田信孝が、

「勝家どの。わしは、なんとしても父の跡を継ぎたい。兄上（信雄）とちがって、わしは亡き父上の弔い合戦に出陣しておるのだし、勝家どのにたすけていただき、織田家の主となって、天下のためにつくしたいのだ」

密かに、申し入れてきた。

勝家もよろこび、

「筑前（秀吉）は、三法師君を跡継ぎにと、諸方へ働きかけておりますが、なんと申しても、まだ三歳の幼児にござる。これでは御家をついだとて、なんのお役にもたてますまい」

「いかにも。では、たのむ」

「こころえました」

次男の信雄は、

「兄の信忠がなくなったからには、次男のわしが家を継ぐのは、あたりまえのことだ」

と、きめこんでいる。

このように、会議がひらかれる前から、三人の候補者をめぐり、諸大名たちへ、いろいろな働きかけがおこなわれた。

何といっても賛成者が多くなくては困るからだ。
それは、ちょうど現代の選挙がおこなわれるときのようなありさまであったと見てよい。
信長の妹、お市は、夫、浅井長政が滅びてのち、清洲の城に暮らしていたが、
「ぜひとも、お市どのを妻に迎えたい」
と、かねてからねがっていた柴田勝家の気持ちを知っている織田信孝は、
「おば上。このさい、織田家のために、ぜひとも勝家どのの妻になってくだされ」
しきりに、たのんだ。
そして、お市は……。
前には、兄、信長のために、こんどは兄の子の信孝のために、二度めの結婚をすることになったのである。
このように、信孝は、柴田勝家を自分の味方にするためにほねをおった。
なんといっても勝家は、織田家第一の身分の重い家臣である。
勝家が信長の家老のような役目をしていたころ、羽柴秀吉は「さる、さる」とよばれ、こまねずみのようになって働いていたのだ。
そのさるは、いまや主人のかたきを討ったえらい家来として、たいした人気ものになっている。
勝家としても、よい気持ちではなかったろうし、なんといっても勝家には「天下を取る」つ

もりはない。どこまでも、主家の織田家のために働こうと考えていた。しかし秀吉は、

「よし。おれが天下を取ってくれるぞ」

と、心を固めていたのであった。

いよいよ、清洲の城中で会議がはじまった。

ここでも、羽柴秀吉の人気は大きい。

秀吉がいきなり、

「なんといっても、亡き上様の御長男である信忠さまの、忘れ形見である三法師さまが、織田家をお継ぎになるのが正しいことはいうまでもござるまい。なるほど、三法師さまは、わずかに三歳のお子さまではあるが……」

と、両腕に抱きあげた三法師へ笑いかけながら、

「しかし、このお子さまをお守りして、柴田どの、丹羽どのをはじめ、およばずながらこの自分も天下のために働けばよろしい。そして、三法師さまを立派にお育て申しあげようではないか」

こういうと、会議の席につらなる家来のほとんどが、

「なるほど――」

「いかにも羽柴どのの申されるとおりじゃ」

「それがよい、それが正しい」

賛成をしてしまった。

信雄も面白くない。

信孝も柴田勝家も、いやな顔をした。

けれども、秀吉のいうことは、間違っていないことなのだし、なんといっても、いち早く明智光秀をほろぼして、天下のみだれを防いだ秀吉の手柄は大きい。

ついに、秀吉の主張のとおりになった。

こうして、小さな、三法師は、近江の国のうち三十万石を与えられ、亡き祖父や父の家来たちに守られることになった。

こののち、織田信長のものだった国々を、それぞれの身分に応じて、分け合うことになった。

その結果はつぎのようになった。

尾張の国（織田信雄）
美濃の国（織田信孝）
丹波の国（羽柴秀勝）

――この羽柴秀勝は、信長の四男にうまれたのを、秀吉が養子にもらいうけていたのである。

などであった。

このとき、柴田勝家は、

「自分は、近江、長浜をいただきたい」

と、いい出した。

長浜は、いうまでもなく羽柴秀吉の城が、まだある。しかも、ここは、政治の上からも、戦略の上からも、大切なところであった。

（まさか、秀吉は承知するまい。もし、いやだといったら、その場所で、たとえけんかになってもよい。そうなれば、思いきって秀吉を殺してしまおう）

と、柴田勝家は、決心していたともいわれている。

ところが、秀吉は、

「ああ、よろしゅうござるとも。長浜は、あなたにさしあげましょう」

あっさりと、こたえたので、勝家は、拍子抜けがしてしまった。

「さしあげるかわりに、長浜の城へは、あなたの御養子の柴田勝豊どのにはいっていただきたい」

気持ちよく、長浜をくれたのだから、勝家も「いやだ」とはいえなかった。

柴田勝豊は、吉田次兵衛というものの子にうまれたのを、勝家が自分の養子にしたのである。

秀吉は、

（長浜などは、今のところ惜しくない）

と、思っている。

秀吉は、山城の国を自分のものにしてしまったのだ。山城は、いまの京都府であって、天皇がおられる日本の中心である。長浜とひきかえにして少しも惜しくはない。

また、

（いずれは、長浜もわしの手に戻るさ）

と、秀吉は平気だった。

清洲の会議が終わると、秀吉は、さっさと京都へひきあげ、こんどは、亡き主人、信長のお葬式の準備にとりかかった。こういうところにも、秀吉の抜け目のない人柄がうかがわれる。

この年の十月十一日から、京都の大徳寺において、織田信長の葬式がおこなわれた。

十七日間にわたる大がかりな葬式である。その、盛大な有様は、天下の人々の目を驚かせた。

この費用は、ほとんど羽柴秀吉がだした。

さらに秀吉は、大徳寺の中に、総見院という寺を建て、ここに、信長、信忠の墓を設けた。

「ぜひとも、上様のお葬式に出ていただきたい」

と、秀吉は勝家にいい送ったが、柴田勝家は、現われなかった。

勝家ばかりではない。
秀吉の勢いが盛んになるにつれ、
「勝手なことばかりして、けしからん」
「秀吉は、天下を取るつもりだろうが、そうはさせぬ」
と、怒りはじめる大名もでてきた。
こうして……。
羽柴秀吉と柴田勝家の仲は、だんだんに悪くなっていったのである。
この二人の争いが、どのようなかたちになってあらわれるか……。その結果が、天下の動きを左右するであろう。
ところで、徳川家康はどうしたろうか。
家康は、こうした争いの中へは入らず、先に信長とともに征服した甲斐の国や信州の国にいる大名や大将たちのほとんどを、自分の手もとへ誘い入れることに力をそそいだ。
関東の北条家とも、手を結んだ。
秀吉は秀吉で、家康は家康で、自分の思うように、その力を蓄えつつあったのである。
家康は、こう思っていた。
(信長公が亡くなったからには、わしはもう、誰の家来でもない。わしは、わしひとりの力をもって、秀吉に立ち向かってゆこう)

あわただしい一年が、暮れていった。
この一五八二年（天正十年）という年は、日本の歴史の流れが大きくかわった年である。
それもこれも、織田信長という大英雄が、突然に死んでしまったからだ。

長浜城攻め

伊勢、長島の城主で、滝川一益（たきがわかずます）という大名がいた。
一益は、織田信長の家来で、本能寺の変がおこったとき、遠い上州（群馬県）厩橋の城におり、北条氏直と戦っていた。
だから、主人のかたきを討つため中央へかけつけてくることができなかったのは、柴田勝家とおなじである。
一益も、羽柴秀吉のことを、
「成り上がりものめ」
と、あまりこころよく思ってはいなかった。
だから、柴田勝家とむすびつき、
「このままでは、秀吉が何をするかしれたものではござらぬ。織田家のことを考えるなら、少しでも早く、秀吉を滅ぼしてしまわねばなりますまい」

と、いった。

滝川一益のほかに、越中、富山城主の佐々成政なども同じ心で、

「来年の雪溶けを待ち、ぜひとも秀吉にいくさをしかけ、首を取ってしまおう」

そのつもりでいる。

柴田勝家も、次第に秀吉と戦うつもりになってきた。

しかし滝川一益は、勝家や成政、それに味方へひきこもうとしている前田利家などが、いずれも雪深い北国の城にいることを考え、

（雪が溶けぬうちは兵を動かすことができぬから、なんとかして、来年の春までは秀吉と勝家が争わぬようにしておきたい）

と思いついた。

そして、秀吉へ、

「近ごろは、あなたと勝家どのとの仲が悪いという噂もきこえるが、織田家のためにも、どうか仲よくしていただきたい」

と、手紙をやった。

すると、羽柴秀吉は、

「自分はなんとも思っていない。けれども、清洲の話しあいできめた三法師君を安土の城へ帰していただく約束を、勝家どのも信孝どのも守ってくれぬのはどうしたわけであろうか？　焼

け落ちた安土の城もなんとか三法師君がお住まいになれるよう、修理したのに、なぜ、こちらへ送ってはくださらぬのか」

と、返事をした。

織田信孝や柴田勝家は、跡継ぎにきまった三法師を秀吉の手にわたしてしまっては、

「何をするかわからぬ」

と、決めこんでいた。

それに、岐阜城にいる信孝は、勝家のあとおしで、秀吉を滅ぼし、いまに自分が織田のあるじとなるつもりだから、三法師を秀吉へ渡すわけがない。

それでいて、柴田勝家は、

（なんとか、来年の春がくるまでは、秀吉に油断をさせておかなくては……）

と、

「一切の恨みをすてて、仲よく三法師君をたすけようではないか。このため、おたがいに誓いの証文を書こうではないか」

などと、羽柴秀吉のもとへ使いを出したりした。

だが、秀吉の目には、信孝や勝家や滝川一益の腹の底が見とおしであったといってよい。

「はい、はい。承知をいたしました」

おもてむきは調子を合わせながらも、いざというときに自分の味方をしてくれる大名たち

を、しっかりとこちらの羽の下へ入れてしまったのである。

そうしておいて、

（準備は整った）

自信ができると、急に、

「岐阜の信孝さまや、柴田勝家どのが、密かにいくさのしたくをして三法師君を返さぬのは、せっかくみんなでとりきめた織田の跡継ぎのことを、うちこわすつもりであります」

織田信雄へ訴えた。

亡き信長の次男である信雄は、三男の信孝と、日頃から仲が悪い。この二人は、父が同じでも、母は違っていたのだ。

だから信雄は、

「信孝は、けしからぬやつじゃ」

と、秀吉の味方をした。すると秀吉は、

「いま、北国は雪にうもれていて、柴田軍はこちらへ出てまいれません。いまのうちにこちらから押し出して、いくさの備えをしておきたいと思います」

「よろしい。やりなさい」

信雄が承知をした。

そこで秀吉は、例によって素晴らしい早さで軍を率い、近江の国へ入ると、もと自分の城だ

った長浜を「あっ」という間に取り囲んでしまった。
長浜の城を柴田勝家の養子勝豊にゆずったことは、まえに述べておいた。
「わしのいうとおりにしなさい。わるいようにはせぬから……」
と、秀吉は使いのものをやって、巧みに勝豊を説き伏せにかかった。
勝豊は、もと柴田の家来だったのをみこまれて、勝家の養子になった人だ。
そののち、勝家は、自分のおいにあたる佐久間勝敏を養子にしたし、そのため勝敏の兄、盛政の勢いが盛んになり、
（どうも、おもしろくない）
と、勝豊は思っていたのである。
そうした柴田勝豊の不満を、秀吉はよく知っていた。だから、長浜の城を勝豊へゆずっておいたのである。
「わしに味方してくれるなら、長浜は、このままあなたにさしあげよう。どうかな」
やさしく秀吉にいわれると、勝豊は、
（ここで城を守ったところで、養父の勝家が雪の中をたすけにきてくれるわけでもないし、それかといって、あのような養父のために、戦死するのも、ばからしい）
とうとう、秀吉に降参してしまった。
秀吉は、やくそくどおり、長浜の城を勝豊に守らせた。

これが、信長の葬式がすんで二か月のちの、十二月十五日ごろであった。

信長が死んでから、わずかに六か月。天下のうごきは、めまぐるしいばかりである。

「なに、勝豊が秀吉に降参したと……？」

知らせをきいて驚いたのは、柴田勝家であった。

まさか、このように早く秀吉が出てこようとは思わなかった。秀吉をだましたつもりが、見事に裏をかかれてしまったわけである。

「おのれ、秀吉め！」

勝家は、北ノ庄（福井市）の城でじりじりしながら、雪の溶けるのを待つよりしかたがなかった。

賤ケ岳の戦い

羽柴秀吉と柴田勝家が、近江の賤ケ岳一帯の山地で決戦をしたのは、翌年の四月である。

「早く……、早く雪が溶けぬものか」

と、勝家は、

「なんとか、街道の雪をかきのぞき、兵を進めよ」

二月も末ごろになると、たまりかねて、こう命じた。

そのころの二月は、現代の三月にあたる。

勝家がいる北ノ庄の城から秀吉に奪われた長浜までは、およそ百キロメートル（二十五里）ほどの道のりである。

いまなら急行列車で一時間四十分。あたたかい列車のシートにすわって、サンドイッチなどを食べているうちに着いてしまうが、このあたりの雪の深さは、有名なものだ。

人夫をくりだし、勝家がけんめいに雪かきをさせているうちに……。

「いまのうちに、こちらの備えを固めておかねばならぬ」

と、秀吉もいそがしかった。

秀吉は、織田信孝を降参させ、ついに三法師を安土へ移すことができた。

「よし。こんどは滝川一益を降参させてしまおう」

正月休みに、いったん姫路の城へ帰っていた秀吉は、やがて京都から安土へ戻ってきて、

「伊勢を攻めよ」

七万あまりの大軍を率いて、伊勢へむかった。

伊勢の国には、滝川一益がいる。秀吉は、たちまちに、桑名、亀山などの城を攻めおとしてしまった。

しかし、滝川一益は、

「もうすぐに、柴田どのが大軍を率いて、たすけにきてくれる。みなのもの、がんばれ！」

必死に戦う。

そのうちに、雪をかきかき、柴田軍が南へ下ってきた。

柴田軍の先鋒部隊八千五百は、長浜の北方二十八キロメートル（七里）ほどの柳ケ瀬のあたりへせまっていた。

「これはいかん」

秀吉はそれと知って、織田信雄と蒲生氏郷に、

「伊勢のほうは、あなたがたにおたのみいたす」

といい、自分は軍を率い、急ぎ長浜へやってきた。

三月にはいると、柴田勝家の本軍も、北ノ庄を出発し、続々と南へ下ってきはじめた。

秀吉軍も、長浜を出て北へすすむ。

こうして両軍は、琵琶湖の北岸にそった賤ケ岳を中心に、睨み合うかたちとなった。

賤ケ岳は、標高四百二十三メートル。このあたりの山続きの峰の中では、もっとも高いといわれる。

柴田軍は、越中（富山県）七尾の城主、前田利家の部隊を含めて、一万ほどであった。

羽柴軍も、おなじほどの兵力だが、秀吉はこのほかに、自分が自由に動かせる軍隊を一万以上も用意していたらしい。

両軍の、睨（にら）み合いが十日、二十日と続いた。

「これでは、いくさのしようもないな」
羽柴秀吉は、苦笑いを浮かべ、
「よし。このひまに、ちょいと岐阜の城を攻めおとしてこようか」
と、いった。
岐阜城には、あの織田信孝がいる。
信孝は、いったん秀吉に降参したが、
「柴田勝家が出陣してくれたからには、もう秀吉なぞに、頭を下げておられぬ」
というので、まだ勇ましく戦い続けている滝川一益と力をあわせ、伊勢や美濃に残っている秀吉軍に立ちむかってきはじめた。
「この際、信孝どのを片付けてしまわぬと、うるさくて仕方がない」
そう思った秀吉は、柴田軍とのにらみあいの中をぬけだし、二万にちかい兵力を従え、四月十七日に長浜を出て、岐阜に近い大垣城へはいり、
「いっきょに岐阜城を攻めおとせ」
と、総攻撃の準備にとりかかった。
いっぽう柴田軍では……。
「なに、秀吉めが岐阜へ向かったとな」
柴田勝家のおいにあたる佐久間盛政は、このことをきくと、

「よし！　いまのうちに、敵の陣地を一つでも二つでも奪いとってくれよう」
腰をあげた。
これが十九日である。
おなじ十九日に、大垣城の羽柴秀吉は、
「きょうこそ、岐阜城を攻めおとしてくれる」
準備にかかったが、大雨となって川があふれ、兵を動かすことができなくなったので、
「やれやれ、しかたがない。兵士たちをゆるりと休ませてやれ」
などといっていたのである。
夜が更けて、やがて、二十日の午前一時すぎとなった。
大垣の秀吉は、すやすやとねむっていた。
賤ケ岳では、
「それ、打ち出よ！」
佐久間盛政は、八千人の攻撃隊をひきい、山を越え、谷を抜け、余呉湖に沿って進んだ。
秀吉軍の陣地、大岩山を守っていたのは、中川清秀である。
清秀は摂津、茨木の城主で、山崎の戦いのときも羽柴秀吉に従い、手柄をたてている。
「それ！　中川清秀の首を討て」
と、夜明けとともに、柴田軍が、一斉に攻めのぼってきた。

このとき、賤ケ岳を守っていたのは桑山重晴という大将であったが、
「中川どの。大岩山では敵の大軍をささえきれますまい。兵をまとめ、わしの陣地へおいでなされ。いっしょに戦いましょう」
すぐに、使いのものをやって退却をすすめたが、
「いや。それがしは死ぬ覚悟で、大岩山を守ります」
と、中川清秀はきかなかった。
清秀は、千人ほどの兵を指揮し、
「ひくな、ひくな！」
みずから、槍をふるって戦った。
下から攻めのぼる柴田軍を、清秀は何度も押しかえしたが、
「中川清秀どの、見参！」
佐久間盛政の家来で近藤無一というものが、木立ちの中からとびだし、鋭く槍をついた。
そして、清秀は、ついに首を討たれたのである。
中川軍は、ほとんど戦死したといわれる。
この有様を見た岩崎山の高山長房も、
「これはかなわぬ」
と、陣地をひきあげ、田上山にいた羽柴秀長（秀吉の弟）の陣地へ逃げこんだ。

「それ、岩崎山も奪いとれ」
柴田軍は、戦うこともなしに岩崎山を占領する。
この日の昼ごろまでに、秀吉軍は二つの陣地を敵に奪われてしまったのだ。
こうなってしまったので、
「なんとしても、賤ケ岳だけは、敵にわたしてはならぬ」
と、秀吉軍の羽柴秀長や藤堂高虎なども、賤ケ岳を守る桑山重晴をたすけに、兵を率いてのりこんできた。
この知らせは、もちろん、大垣にいる秀吉のもとへ知らされた。

秀吉、出陣

大垣城の羽柴秀吉のもとへ、
「大岩山の陣地が、敵にとられました」
「岩崎山も、奪いとられました」
つぎつぎに、馬をとばして使者が駆けつけてくる。
すると、秀吉は少しも驚かず、
「よし、よし。いくさは勝ったぞ」

にやりと笑って、
「足のはやい兵士を、五十人ほど集めよ」
と、その五十名を呼びよせ、
「おまえたちのうち二十人は、長浜へついたらすぐに、近くの町や村から松明をたくさんあつめ、これに火をつけ、村人たちに持たせて、この大垣から長浜までの道筋に配っておけ」
そしてまた、
「残りの三十人は、これも長浜の村々にいいつけ、握り飯をたくさんつくり、道筋において、すぐに食べられるようにしておけ。よいか」
と、命令を下した。
長浜の領内にある村々では、前に秀吉が殿さまだったころ、よくめんどうをみてやっているので、
「秀吉さまのためなら、なんでもしよう」
と、いうにきまっている。
五十人の兵は、すぐに大垣城を駆けだしていった。
「わしが留守の間は、おぬしに大垣をまかせる」
と、秀吉は堀尾吉晴にあとのことをまかせ、
「わしは、ひと足さきに出かけるぞ」

たったひとりで馬へまたがり、城門を出ると、風のように走りだした。

「それ、続け」

あわててあとを追ったのは、一柳直末（ひとつやなぎなおすえ）ほか十人ほどの家来だけである。

兵士たちの仕度も間にあわぬほどの早さだった。

こういうところは、むかし織田信長が清洲の城をひとりで飛び出し、今川義元と戦うため、桶狭間へかけむかった様子とそっくりではないか。

「それ、殿さまにおくれるな」

と、秀吉の軍が大急ぎで仕度を整え、大垣城から次々に出ていった。

大垣から長浜までは、およそ四十キロメートル（十里）ほどだ。

秀吉は、関ケ原を駆け抜けて近江の国へはいり、

「それ、いそげや」

馬にむちをくれ、休む間もなく、いっきに長浜へ着き、さらに琵琶湖の岸べを駆けに駆け抜き、木之本へついたのは、夜の九時ごろだったという。

そのころ、秀吉のあとを追って大垣をでた一万五千の兵たちは、

「やあ、どうじゃ。道ばたに村人が松明をもって出ているぞ」

「あかるくて走りよいな」

「見ろ、見ろ。握り飯をくばっているぞ」

「これはうれしい」
走りながら、握り飯をほうばる。
「うちの殿さまは、いつもこのように、おれたちのことを考えていてくださる」
「これではいやでもいくさに勝たなくてはならんぞ」
兵たちは勇気百倍して走り続ける。
秀吉の兵の使い方、動かし方は、いつもこのように巧みであった。
木之本へついた羽柴秀吉は、弟の秀長が陣を構えている田上山へ登り、
「弟よ。今ついた」
「これはこれは……」
と、秀長はびっくりした。
この羽柴秀長は、秀吉の母が二度めに結婚をした筑阿弥との間にうまれた子で、秀吉とは父違いの弟である。
「こんなに早くおつきになるとは、ゆめにも思いませんでした」
「ぐあいは、どうじゃ？」
「賤ケ岳の兵力をふやしましたが、敵は、きっと夜があけると同時に攻めよせてきましょう。いや、よかった、よかった。あなたさまがこのように早くお戻りになってくれて……」
「よし。近くの村びとたちに銭をあたえて、できるだけたくさん集めてくれ」

「大垣の兵は、どうなさいました？」
「すぐに、わしのあとからやってくるさ」
たくさんの村人たちをあつめると、
「みんな、大きな声をはりあげて、ときの声をあげろ。ほうびは、たくさんやるぞ」
秀吉がいった。
村人たちは、おもしろがって、
「わあっ……うおっ……！」
ときの声あげる。
暗闇の中で聞こえるこの声は、まるで何万もの秀吉軍が大垣から駆けつけてきたように思えた。
柴田軍は、
「これはどうじゃ」
「ま、まさか秀吉軍が、こんなに早く戻ってくるとは……」
あわてふためいたし、いっぽう、賤ケ岳そのほかの山の陣地にいた秀吉軍は、
「大垣にいた軍隊が、駆けつけてきてくれたぞ」
「もう、だいじょうぶだ」
「さあ、くるならこい」

たちまち、元気がわいてくる。
秀吉の命令が、伝えられた。
「いま大軍が、みなをたすけにきた。夜明けとともに、敵に攻めかかれ！」
柴田軍は、夜あけとともに賤ケ岳を攻めとるつもりだったが、
「松明のひかりが、道という道につらなっている。秀吉の大軍が戻ってきたのだ。これではとても勝ちめはない。ひきあげよ」
と、大将の佐久間盛政は、兵をまとめて退却しはじめた。
これで、もう勝負はついたようなものだ。
夜があけると……。
握り飯をたっぷり腹へつめこんだ一万五千の兵がつき、秀吉軍は逃げる敵を追って、
「それ、かかれ！」
「どこまでも、追いかけろ」
すさまじい追撃戦に移った。
加藤清正や福島正則など、秀吉の若い家来たちが、武勇の働きを示し、
「賤ケ岳の七本やり」
なぞと呼ばれたのも、このときである。
柴田勝家は、狐塚というところに本陣を構えていたが、

「敵が押しよせてまいります」
「とても、ふせぎきれません」
兵たちは、ばらばらに乱れたち、どこかへ逃げてしまうものも多い。
さいごには、柴田勝家も五十人ほどの家来に守られただけで、北ノ庄へ逃げてゆかねばならないことになった。
勝家は、ふるくからの織田の重臣で、勇気もある立派な大将であったが、羽柴秀吉と争ったために、このようなひどいめに遇うことになった。
北ノ庄の城へかえると、勝家は二百の兵とともに、城の天守閣へのぼった。
秀吉は、たちまち、追いついてきて、城を囲んだ。
四月二十四日……。
柴田勝家は、城に火をつけ、妻のお市の方とともに自害をした。
秀吉も、亡き主人の妹であるお市の命だけは、ぜひ、たすけたかったのだが、どうにもならなかった。
しかし、お市が浅井長政との間にもうけた三人の娘は、勝家が、
「死なすにはしのびぬ。のがせ」
密かに一乗ケ谷というところへ逃がした。
秀吉は、この娘たちをさがしだし、よくめんどうを見てやったが、この娘たちのひとりが、

のちに淀の方となって、秀吉の子、鶴松と秀頼を生むことになる。

こうして、柴田勝家は、滅びてしまった。

このたたかいは、織田信長の跡継ぎをめぐっての、秀吉と勝家の勝負である。

それだけに、勝った羽柴秀吉の勢いは、

「もはや、天下をとったのも同じことだ」

と、噂されるようになった。

秀吉は、勝家の国だった越前を、手におさめた。

織田信孝は、まもなく、兄の信雄によって、

「腹を切れ」

と、せめたてられ、ついに自害をした。

越後の上杉家も、中国の毛利家も、そして、あの徳川家康も、

「このたびのいくさにお勝ちになって、おめでたいことでござる」

と、祝いの言葉を送ってきた。

大阪の城

人間と人間とが争いをおこし、戦いあうのは、たがいに相手の本当の心が、はっきりとわか

らないからである。

賤ケ岳の戦争がおわると、

（羽柴秀吉は、こんどは、このわしを邪魔にするのではないだろうか？　このままでいると、わしも、弟の信孝のように、秀吉の手にかかって滅ぼされてしまうのではないか……？）

織田信雄が、そう思いはじめた。

信雄は、信長の次男に生まれたので、伊勢の北畠家をついでおり、北畠信雄とも呼ばれている。

このまえの戦争では、弟の信孝が憎かったので、秀吉の味方をしたわけだが、世間の妙な噂をきくと、いてもたってもいられなくなった。

それは、

「羽柴秀吉は、自分が天下を取るためには、信雄どのが邪魔になるので、殺そうとしている」

というもので、もっとひどいのは、

「いやもう、信雄どのは殺されてしまったらしい」

との、噂がとんでいるというのだ。

この噂は、わざと秀吉がまきちらしたのだともいわれている。

秀吉は、

「信長さまの子でも、亡くなった信忠さまとは大違いじゃ。その時々で心が変わり、いつもふら

ふらと他人の力ばかりを頼っている信雄どのには、天下のことなど任せられるものではない」

と、思っていたことはたしかだ。

だから、秀吉は、まず信雄の家老たちを味方にひきいれることにした。

「どうも、あなた方の御主人の信雄どのは、頼りない。三法師君を守ってゆくためには、信雄どのの家来であるあなた方に、誓いの言葉をもらいたいのじゃ。むろん、この秀吉に味方をしてくれれば、必ず悪いようにはしない」

これは、うそではない。

これまでに秀吉は、自分の味方になったものを裏切ったことはない。

信雄の老臣たちは、だんだんに秀吉のほうへかたむいていった。家来たちから見ても、信雄は頼りなかったのであろう。

年があけて、一五八三年（天正十一年）になると、

「もう、こうしてはおられぬ」

と、織田信雄は、回りの大名たちを味方につけることを考え、そして徳川家康へも、

「どうも、羽柴秀吉の動きが怪しくなってまいった。なにとぞ、わたくしの力になっていただきたい」

と、申し込んだ。

そして、自分に背き、ひそかに秀吉と結びついた家老三人を、殺してしまった。

徳川家康も、いまや五か国百三十八万石を自分の国としており、大名としての力は、非常に膨れあがっている。

（わしは秀吉を憎むわけではないが、このさい、信雄どのの味方をしてやることにしよう。たしかに、このまま放っておくと、秀吉はのぼせあがり、わしがいることを忘れかねまい）

と、家康は決心をした。

だが、秀吉は、家康の力を畏れていた。

いろいろな贈りものをしたり、天皇にお願いして、家康を「正四位下・左近衛権中将」という位につけたりしているし、その後も位をあげてやって、しきりに仲よくすることにつとめてきた。

春になると、秀吉は家康に次のような言葉を伝えた。

「自分は信長さまに恩をうけたものであるから、そのお子の信雄どのにたいして、憎む心などあるわけがないのに、信雄どのは自分を邪魔者扱いにするようになった。これは、つまらぬやつどものことばを信じこんでしまうからで、信雄どのはこのように、とてもとても国を治めることのできぬ人である。もしも、あなたが自分の味方をしてくださるのなら、美濃（岐阜県）と尾張（愛知県）の二国をさしあげよう。いかがでござろう？」

これをきいた徳川家康は、

「この家康は、そのあたりにころがっている大名たちとはちがう、と、秀吉どのに伝えよ」

秀吉の使者を追いかえしてしまった。

これで、秀吉と家康との間にたもたれていた友情が、断ち切られたのである。

羽柴秀吉は、このころ、姫路から大阪へ移り、安土城よりも雄大で立派な城を築きつつあった。

秀吉の力の下にある国々は、二十あまりにおよび、兵力は十六万から十八万の大軍を、いつでも出せるほどであった。

「よし、家康がその気なら、ひとつこらしめてやろう」

秀吉も、立ちあがった。

秀吉の軍と、家康、信雄の軍が戦いはじめ、両軍が尾張の小牧山のあたりで陣を構えたのは、三月の末である。

「わしは、亡き信長どののお子をたすけて戦うのだ」

と、徳川家康は胸をはっている。

いくさをするための名目としては、家康のほうが立派であった。

小牧山は、むかし織田信長の城があったところである。

ここへ本陣を構えた家康に対して、秀吉は、十二キロ（三里）ほど北へ離れた犬山の城へ、本陣をおいた。

両軍の睨み合いは、春から秋にかけて、続きに続いた。両方とも相手の力のすぐれているこ

とを知っているから、うかつに手を出さぬ。

しかし、この間に、秀吉の軍の一部が密かに三河へはいり、

「家康の本国を荒らしまわってやろう。そうすれば、家康もあわててひきあげてゆくだろう」

こう考えて、小牧山のうしろへまわり、そっと三河の国へはいった。

それを知った家康は、あとを追いかけ、長久手のあたりで、さんざんに秀吉軍を打ち破ったのである。

もちろん、それは秀吉軍の何分の一かにすぎなかったが、

「家康は、強いのう」

秀吉は、苦笑いを浮かべるより、仕方がなかった。

これより先に、小牧でも一度、秀吉軍は負けている。

長久手の戦いでは、秀吉軍の池田恒興や森長可（もりながよし）など、人に知られた大将が討ち死にをしたし、秀吉軍の戦死者は徳川軍の四倍から五倍の数にのぼった。

（家康め、なんとかおびきだして……）

と、秀吉はくやしがったが、それからも家康はさそいにのってこない。

それでいて、睨み合っていても、

「秀吉なぞ、少しもこわくないぞ」

という様子が、徳川軍にみちあふれている。

長久手で勝った徳川軍は、
「秀吉軍など、強くないわい」
すっかり自信をつけてしまった。
そのほかにも、小さい戦いはいろいろとあったが、
「もう、こんなことをしていても始まらぬわい」
秀吉は、巧みに織田信雄へ、
「仲なおりをしましょう」
と、もちかけた。
秀吉が礼儀を尽くしてきたので、信雄は悪い気もせず、いくさをやめることにした。
信雄に頼まれた徳川家康だが、肝心の信雄が敵と仲直りをしてしまったのでは、仕方がない。ついに、家康も仲なおりをし、軍をひいて岡崎へかえった。
このとき、仲なおりのしるしとして、秀吉は家康の次男、於義丸を、
「わしの養子にもらいうけたい」
と、いった。
於義丸は、このとき十一歳。のちに結城秀康という偉い大名になった人だ。
そして秀吉からは、
「わしの妹を、妻に迎えてくだされ」

こういって、父違いの妹の朝日姫を、家康にさしむけた。

姫といっても、もう中年の女性である。しかし、家康は前の妻の築山どのが死んでから一人ぐらしだったので、秀吉の言葉のままに、朝日姫を妻に迎えた。

このように、肉親を相手におくり、縁を結ぶことによって仲直りのしるしとするのは、戦国のころのならわしであったのだ。

それでもなお、徳川家康は秀吉に頭を下げない。

「一度、大阪へおいでなされ」

いくら秀吉がすすめても、やってこない。

こちらから大阪へ挨拶にゆくことは、頭を下げることになるからだ。

これには、つくづく秀吉も困って、

「家康のたすけがなくては、とうてい、わしは天下を取ることができぬ。なんとしても家康の心を和らげねばならん」

ついに、思い切って、

「わしの母を、そちらへ人質におくるから、ぜひぜひ大阪へきてもらいたい」

と、いいだした。

秀吉が、母へ孝行をつくしていることは有名だ。その母思いの秀吉が、母を人質に出すというのである。これには世間も驚いたし、さすがの徳川家康も、びっくりした。秀吉は思いきっ

たやりかたで、自分のまごころを家康に示したのだ。

徳川の家来たちは、主人の家康が、うっかり大阪へなどいったら、秀吉がだまし討ちにするにちがいない、と思っていたものもいる。

家康は、

「あの秀吉どのが、母ごを人質にだすというからには、もはや、疑いをもつべきではあるまい。これ以上、わしが頭を下げないと、また戦争になる。そうなれば、わしの大切な家来たちの命も戦場で消えることになる。よし、ここのところは、わしが大阪へ挨拶にゆこう」

心を決めた。

約束どおりに、秀吉は母の大政所を岡崎の城へ送ってよこした。

そして家康は、本多忠勝、酒井忠次などを従え、大阪へ赴き、秀吉と会見したのである。

「おう、これはこれは、ようこそ参られた。さ、こちらへ、こちらへ……。どうか、ゆるりとおくつろぎあれ」

と、秀吉は下へもおかぬもてなしぶりで、にこにこと家康に笑いかけ、

「これからは、あなたとわたしは兄弟も同じだ、と思ってくだされ」

手を握りしめた。

こういう、人なつっこい秀吉のしかたは、どんな相手もひきこまずにはいない。

秀吉は、また天皇に願って家康の位をあげ、近江、守山三万石の領地を、

「受けとってくだされ」

と、家康に贈り物した。

そればかりでなく、家康の供をしてきた家来たちにまで、さまざまな贈り物をした。

(どうも、秀吉公にはかなわぬ)

徳川家康も、かぶとをぬいだ。

こうして、家康と手を結んだ秀吉の勢いは、大きくなるばかりだ。

大阪の城は、およそ七年がかりで完成されたものだが、その規模の素晴らしさがどんなものか……今に残る大阪城のあとを見てもわかるような気がする。

大阪は、瀬戸内海に通じ、いくつもの川によって海から陸への交通が、昔から発達している土地だ。

貿易港の堺の町も、目と鼻のところにある。

しかも、天皇のおわす京都へも、四十キロ(十里)の近さだ。

この大阪が石山とよばれ、ここに本願寺の本山があって兵を蓄え、織田信長に手むかい、信長をひどく困らせたことは、すでに述べておいた。

本願寺が紀州へ去ったのち、この城は信長のものとなり、信長死してのちは、長久手で戦死した池田恒興の城になっていた。

それをもらいうけて秀吉が、

「天下第一の城を造ってみせる」
と、城の造りなおしにかかったのだ。
いくさのしかたばかりでなく、城を造るときも、秀吉は、昔の主人、織田信長のやりかたをよくおぼえている。
鉄の門の素晴らしさ。
御殿の、座敷という座敷を飾る絵やびょうぶの見事さ。
御殿の中には、天井も壁も、ふすまも、みな黄金づくりの茶室である。
天守閣は、七階九重であった。
この天守の中には、鉄砲や火薬のほかに、秀吉が集めた宝物、金銀などがびっしりとしまいこまれてある。
本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる大阪城の周囲（まわり）は、十二キロ（三里）以上もあった。
城をかこむ堀の幅が、広いところで七、八十メートルもあったという。
この大きな城の、大きな御殿の中の、秀吉が眠る部屋には、黄金造りのベッドがおかれていたそうだ。
大阪城を造ることによって、
「わしは、天下を取ったのだぞ」
と、秀吉は叫んでいるかのようであった。

羽柴秀吉は、五十歳になった一五八六年（天正十四年）に、関白太政大臣という位につくことを、天皇から許された。

これは、天皇の家来のなかで、もっとも高い位であるし、天皇をたすけて天下の政治をとりおこなうことを許されたわけであった。

秀吉は、羽柴の姓をすてて、豊臣とあらため、豊臣秀吉と名乗ることにした。

聚楽第

長い、長い戦乱の世も、いまや終りを告げようとしていた。

織田信長が、その土台を固めたあとをうけ、豊臣秀吉は「天下を一つにまとめる」という大事業を、いまなしとげようとしている。

日本の国の中に、戦争がなくなってしまい、諸国の大名のほとんどが、秀吉のいうことをきくようになっている。

あとは、九州の島津家とか、関東（小田原）の北条家とか、東北地方の伊達家など、少し残っている大名たちが、頭を下げないでいるだけで、これらの大名も、すすんで秀吉と戦うつもりはない。

「戦ったところで、とてもかなわぬ」

と、知っているからだ。
戦争がなくなれば、戦争のために使っていた力は、ほかのところへ回されることになる。
大名たちも兵士も、国民も、みな戦争にはあきあきしていたから、
「なるべくいくさをしないように……」
と、こころがけはじめる。
いくさがほうぼうでおこなわれていたときは、国民も、おちおち商売をすることもできぬし、旅をすることも危ないので、じっとちぢこまっていた。
ところが、世の中が平和になると、京都の商人も、
「ひとつ関東へ行って、商いをしてこよう」
と、出ていくし、関東の人々は、
「ひとつ、京の都を見物にゆこう」
などと、思いたつわけなのである。
旅行が盛んになれば、道もひらける。宿屋もできるし、茶店もできる。
世の中が便利になってくるし、食べものも豊かになってくる。
そして、信長とおなじように、秀吉も、新しいことが好きであった。
大工、鋳物師、左官、茶わんつくりなど、さまざまな職人を保護してやり、その仕事の発展をたすけた。

画家や彫刻家のような芸術家も、同じことである。

織田信長は、伊阿弥という畳さしを、

「おまえがつくるタタミは、天下一である」

と、ほめてやり、土地も位もあたえたほどである。

商人たちが、どこの町でも商いができやすいようにしたのも、秀吉は信長を見習ったのである。このため、諸国の町も繁盛し、大名たちも秀吉のすることをまねて、自分の国の発展に力を入れるようになった。

こういうわけだから、国民も、

「もう戦争はないぞ」

「安心して、仕事にはげめる」

明るく、生き生きと働きだす。

こうした元気いっぱいの空気が、国じゅうに溢れだしたのは、かつてないことである。

昔は、貴族や将軍が、国民たちのあたまをおさえつけているばかりだったし、なにしろ戦争の絶え間がなかったのだ。

信長と秀吉が生みだした、このように活気がみなぎった時代を、今では「安土桃山の時代」と呼んでいる。安土には信長がいたし、伏見の桃山には、のちに秀吉が大きな城を築いて住んだからである。

けれども……。

秀吉は「刀がり」といって、寺や、町や村から、武器をとりあげてしまう命令も出したし、重い税も取りたてた。

これは、そうした場所に金銀や武器があっては、再び戦争がおこるもとになると考えたからだ。

秀吉だって、

「せっかく苦心して天下を取ったのだから、いつまでも天下さまでいたいものだ」

と、願ったことであろう。

また、諸国の土地についても、

「よく、様子を調べ、どこの国からどれだけの米や作物がとれるかをきちんと調べあげよ」

と、命じた。

これを、秀吉の「検地」という。

これも、秀吉の天下を安全にするための政治であった。

そのころ、日本の山からは、金や銀が豊かに掘り出されたし、それが信長や秀吉の「派手好み」を、いっそう華やかにいろどったのである。

大阪城の中には、金銀が、使っても使っても、使いきれぬほど、ためこまれていたという。

町を広げ、道筋を広げ、皇居を修理し、のちには、京の町を囲むこと二十キロ（五里）にわ

たる堤を築いた。

この堤を、御土居と呼ぶ。

京の都は、天皇のすむところである。

それだけに、昔から、この都がいくさの中に巻きこまれ、焼けおちたことは、数えきれなかった。

皇都を戦火から守るために、御土居を築いて外から侵入する敵を防ぐ。その目的もあったが、秀吉は、

「わしには、これだけの大工事をおこし、天皇と都を守る力があるのだ」

それを天下に示したかったのである。

この御土居のあとが、今も京都市に、わずかながら残っていて、その工事の大がかりなことをまざまざと知らせてくれる。

御土居ばかりではない。

豊臣秀吉は、京都に大邸宅を造った。

「わしが、京都へいったときにくらす屋敷じゃ。思い切り、立派なものを造ろう」

と、秀吉は夢中になって、この屋敷造りにうちこんだ。

この屋敷を、聚楽第とよぶ。

「材木のよいのを集めよ。石垣の石を運べ」

と、秀吉は大名たちに命じた。

屋敷の広さは、東西六百メートル、南北七百メートルにおよぶ広大なもので、まわりに堀をうがち、石垣を築き、まるでひとつの城のようなものであったらしい。

その場所は、いま京都に残っている二条城の北側で、大きさは二条城よりもひとまわりほど大きかったというから、個人の屋敷としては、これほど立派なものはなかったろう。

鉄の門に囲まれ、金銀をちりばめた夢の御殿である。

中には、山もあり谷もあり、湖のような池には舟が浮かび、秀吉は、その舟に乗って、庭のあちこちに建てられている建物へ出入りをした。

いま、京都市の西本願寺の中に、この聚楽第の一部だったとつたえられる「飛雲閣」という建物がのこされている。池から舟がつく座敷や茶室、書院など、二階づくりのこの建物からしのぶ聚楽第の素晴らしさは、まるでおとぎ話にあらわれるような美しさだ。

これも、戦争の世をおさめた天下さまだからできたことで、

「いまのわしは、思うままに、どんなことでもできる。昔の、きたない百姓家で牛や馬といっしょに眠ったことを思えば、まったく夢のようじゃ」

と、秀吉は思ったことだろう。

現代では、どこの国の、どんな人でも、個人の力でこのような贅沢なまねをすることができないし、許されもしない。

しかし何百年もまえの、こうした英雄や皇帝の贅沢によって、日本でも外国でも、土木、建築の工事や、芸術の発展が見られたことは、たしかなことであった。

とにかく、秀吉は得意の絶頂にあった。

北野天満宮の森で、身分の上下を問わず、人々を集めて、茶の湯の会を催したのも、このころだ。

天皇を聚楽第へお迎えして、おもてなしをしたのも、このころである。

「天皇さまが、家来の屋敷へおいでになった」

このことだけでも、世の中の人はびっくりした。

それは、とりもなおさず、豊臣秀吉の勢いの大きさを示すものであった。

こんなことをしながらも、秀吉は九州へ攻め入り、薩摩の大名、島津義久を降参させたりしている。

妻のねねとの間には、子がうまれなかった秀吉だが、側室の淀の方との間に、鶴松という男の子が生まれた。

「こんなうれしいことはない。この子のためにも、日本国のすべてを、わしのものにしなくてはならぬ」

秀吉は、勇みたった。

「あとは関東の北条家を降参させ、東北の大名たちに頭を下げさせるだけじゃ」

一五九〇年（天正十八年）になると、豊臣秀吉は、いよいよ腰をあげた。
北条氏政がいる相模（神奈川県）の小田原城を攻めるためであった。
このとき、秀吉は五十四歳になっている。

いざ関東へ

北条家は、先祖の北条早雲（伊勢新九郎）が小田原の城主となってから、およそ百年もの間、関東の国々を従え、
「北条家は、関東のあるじなり」
という誇りを、もちつづけていた。
それだけに……。
武田も上杉も、織田も徳川も、北条家に対しては、いろいろ手段を使い、なるべくは戦争をさけてきたといってよい。
そのころの北条家のあるじは、北条氏政であった。
「豊臣秀吉がなんじゃ。素性もしれぬ山ざるが天下をとったつもりでいても、この北条家だけは、頭を下げぬぞ」
氏政は、なんども秀吉から、

「ぜひ一度、大阪へきてもらいたい」
と、呼び出しをうけても、がんとして応じなかった。
そこで、秀吉の小田原攻めとなったわけだが……。北条氏政について、こんな話がある。
氏政が、父の氏康のあとをつぎ、小田原城主になってからのことだが、ある夜、家来たちもいる宴会の席で、
「ああ……」
突然、いまは隠居の身になった北条氏康が、箸をおいて、太いため息をもらし、
「北条の家も、わしの代で終ってしまうのか」
と、つぶやいた。
父のすぐそばで食事をしていた氏政が、びっくりして、
「父上。それは、どういうことでございますか?」
「おまえのことじゃ」
「えっ?」
「いま、おまえがめしを食べているのを見ると、おまえは、一膳の飯に汁を二度もかけているではないか」
「はあ……?」
「はあではない。人は毎日、飯を食べる。ばかものでないかぎり、食事については何千回、何

万回もの稽古をしているわけではないか。それなのに、おまえは、一膳の飯にかける汁の分量もまだわからぬのか。一度かけて足らない。だからまた、汁をかける。まことに、愚かなまねをするものじゃ」

「いけませぬか」

「まだわからぬのか、わしの申すことが……。よいか、よくきけ。朝夕におこなうことを計り知ることができぬようでは、一皮へだてた他人の腹の中に潜んでいる考えを知ることなど、とてもできぬ、人の心がわからなくては、よい家来も従ってはくれぬし、まして敵と戦っても勝てるはずがない。なればこそ、北条の家も、わしの代で終ると申したのじゃ」

きびしく、わが子を戒めた。

この戒めがきいたか、どうか……。

父の氏康が死んでから、十五年ほどの間に、どうも北条家の勢いは衰えてゆくばかりである。

「この小田原城は、天下の名城である。どんな敵でも、この、わしの城を攻め落とすことはできまい」

などと、氏政はいばっている。

そのくせ、安土城や大阪城のような素晴らしい城ができたことを、耳で聞いたとしても、見たことはないのだ。

これでは新しい時代のながれに乗りおくれてしまうことは当然であった。

一五九〇年（天正十八年）二月一日に、豊臣秀吉は、

「小田原攻めに加わるよう」

と、諸大名へ命令をくだし、三月になると、大軍を率いて京都を出発し、早くも四月三日には、箱根の山々にある北条がたの砦や城をうちやぶり、小田原城を取り囲んでしまった。

京都を出発するときの秀吉の行列は、まるでお祭りさわぎであったようだ。

聚楽第から現れた豊臣秀吉は、つくりひげを鼻の下へつけ、唐冠の兜をかぶり、赤の鎧を着こみ、こがねづくりの太刀をよこたえ、これも赤塗りの弓を手にもち、金銀を散りばめた飾りをつけた馬にまたがっている。

お供の家来たちも、みな美しく飾りたて、何千本の旗や吹き流しをつらねて進む。

「ひゃあ、なんと美しい」

「さすが天下さまだのう」

町の人びとは、ひしめき合って、出陣の行列を見物する。

御所の前へさしかかると、天皇もあらわれ、高台にのぼられて、見送られた。

「では、いってまいります」

馬からおり、天皇にあいさつをする秀吉は、まさに得意満面というところであったろう。

大名が戦争にいくのを、天皇が見送られる、などということは、あとにも先にもなかったこ

とである。

京の加茂川にかかる三条大橋を、秀吉が、

「大軍が通るのじゃから、石造りにせよ」

と命令をしたのも、このときだ。

（他人のやったことがないことをしてみせる）

というのは、昔の主人だった織田信長ゆずりで、それは結構なのだが、このように秀吉がいばりはじめると、

「あまりにも、人としての心をわきまえぬやりかたじゃ」

「やはり、成りあがりものだな」

かげでは、ひそひそ話をするものもでてきたようだ。

こんな具合いだから、小田原城をかこんでも、

「いそぐな、いそぐな。無駄な血を流すことはない。むこうが降参するのを、待てばよいのじゃ」

小田原城にたてこもる北条軍は五万ほどで、これを囲む豊臣軍は、およそ十五万近くに膨れあがった。

小田原の海にも軍船をうかべ、陣地という陣地には、

「食べものをたくさん配れ、酒も渡せ」

と、秀吉が命じたので、兵士たちも、ゆっくりと腰をおちつけて、
「敵が出てくれば、討ちとってしまえばよいのだ」
もう勝ったものと決めこんでいる。
秀吉は、石垣山に本陣をかまえ、小田原城を見おろしている。
この本陣が、またたいへんなものなのだ。
石垣を築き、立派な屋敷まである一つの城といってよい。
この本陣から、秀吉が京都にいる妻のねねへ宛てた手紙がのこっている。次のようなものだ。

そなたからの陣中見舞いのお手紙をよみ、まるで目の前にそなたがいるような気持ちがして、何度も何度もよみかえした。いま、わしがいる本陣の城には、石の蔵もできたし、台所もでき、広間もつくり、やがて天守閣もたてるつもりじゃ。
どちらにしてもことしのうちには、敵も降参するであろう。こちらは敵の城のほりぎわまで押しよせているので、北条がたもこまりきって、青息吐息のありさまじゃ。
こうなったら、敵が飢え死にするまで、かこみをとかぬという意気ごみを見せたものだから、敵も、たいへんにあわてている。秀吉のいきおいにおどろき、東北の大名たちも、小田原へやってきて、この秀吉のごきげんうかがいをするありさまだ。
北条家に味方をする関東のほうぼうの城も、ほとんど攻めおとしたし、安心してもらいた

い。

母上さまも鶴松も、そなたも、みんな元気でいるとのことで、わしもうれしくてならぬ。早くかえって、そなたとゆっくり語りあいたいものだ。いまからたのしみにしていなさい。

まんどころどの　　てんか（天下）

秀吉は自分のことを「天下さま」と書いている。妻に対しても、このように得意になっているさまは、むしろ、ほほえましい気持ちもするが、とにかく秀吉は、この小田原攻めのころが、もっとも得意で、やることなすことが、たのしくてしかたがなかったのであろう。

「敵は負けるにきまっている」

という戦争なのであった。

それにしても、この手紙には、五十をこえた秀吉の妻にたいする優しい心が、にじみ出ているではないか。

むかしむかし、信長の馬のくつわをとり、やりをかついでかけまわっていたころに夫婦となったねねへの思いやりが、純真にあらわれており、秀吉のこうした性格が、多くの人の心をひきつけずにはおかなかったのであろう。

それがまた、秀吉が天下を取り、天下を治めることができた原因のひとつとなっているにちがいない。

天下統一

夏にはいると、北条方の敗北は決定的なものとなった。

前田利家（加賀、金沢城主）や、上杉景勝（越後、春日山城主）などの豊臣軍の働きによって、北条方の上州（群馬県）の松井田、箕輪、厩橋などのほか、武州（東京、埼玉県）の八王子や鉢形の城も攻め落とされた。

こうなると、外から小田原城をたすけるものはなくなり、

「もういかぬ」

北条氏政も、頭をかかえてしまった。

この氏政より、子の氏直のほうが、まだしっかりしたところがある。

氏直は、秀吉からの、

「もう、降参してはどうか？」

というすすめにしたがい、豊臣軍の黒田孝高の陣地へあらわれ、

「わたくしが腹を切って、秀吉公にお詫びをするから、父や家来たちの命はたすけていただきたい」

と、申し出た。

これをきいた秀吉は、
「父の氏政には似ぬいさぎよい男じゃ。よし、よし」
かえって氏直の命をたすけ、高野山へ謹慎させたが、氏政や家老たちの四人に、
「責任をとれ」
と、切腹を命じたのである。
北条氏直は、徳川家康の娘を妻にしていたし、
（まず、よかった）
と、家康も安心したことであろう。
のちに氏直は罪を許され、一万石を与えられて秀吉につかえた。
「関東も、こちらのものになった。さて、徳川どの。あなたは、滅びた北条家のかわりに、関東を治めてくれぬか、どうじゃな」
秀吉が、家康にこういった。
「承知いたしました」
家康は、こころよくひきうけた。
家康には、秀吉の腹のうちに潜む考えがよくわかっていた。それは、
「家康の領国（尾張、三河など五か国）をとりあげ、そのかわりに関東八州を与えることにしよう。そうすれば、家康は京都や大阪からも遠ざかることだし、新しい国造りをするためには、

大変な金もいる。したがって、家康の力は弱まるであろう」

という考えである。

信長がそうであったように、秀吉もまた徳川家康の強い軍隊と、一致団結をした徳川家の主人と家来の力を恐れていたのだ。

それを知りながら、家康は気持ちよく、関東へ移ることを承知したのであった。

これは、秀吉に負けたのではない。

(いまのところは、おとなしくして、自分の力を蓄えておくことだ)

と、家康は思っていた。

秀吉に背き、もしも戦争をはじめたなら、

(それは、関東へ移るよりもひどい損害を受けることになる。第一に、家来たちがたくさん死んでしまうではないか)

家康は、どこまでも冷静に考えていたのだ。

さて……。

豊臣秀吉は、小田原城が落ちたのち、関東を通って会津(福島県)までゆき、奥羽地方をも手におさめた。

九月一日、秀吉は京都へ凱旋をした。

これで、日本全国が、ついに秀吉のもとに従うことになった。

名実ともに、天下が統一されたのである。
そのころから、秀吉は、
（もう日本は自分のものになった。このうえは、外国も、わしのいうことをきくようにしたいものじゃ）
と、思うようになった。

心のみだれ

豊臣秀吉が天下統一を成し遂げたのは、五十四歳のときである。
織田信長が死んでから、八年の間に、秀吉は、めまぐるしいばかりに活躍を続け、ついに、天皇は別として日本一の位と権力を、握ることができたわけであった。
だが、こうして「天下人」になった瞬間から、秀吉の人生は、悪いことばかり続くようになる。
「日本をわがものとしたら、つぎは、外国にも頭を下げさせてくれよう」
というのが、秀吉の望みである。
このように、外国へ対して心を向けるところも、秀吉は信長に似ている。
それで……。
「日本に一番近い外国、それは朝鮮じゃ。まず、それを降参させなくてはならぬ」

小田原戦争がおわってまもなく、

「秀吉公には、日本国内を統一されたとのこと、まことにおめでたいことです」

と、朝鮮国王からの手紙をたずさえた使者が、朝鮮からやってきた。

秀吉は、この使者を聚楽第へ呼び、上機嫌であった。

「朝鮮の王が、わしにおせじをつかい、ご機嫌伺いにきた。わしの大きな力は、すでに朝鮮まで知れわたっている。朝鮮は、わしに降参したのも同じことじゃな」

そう、思い込んでしまった。

これは、秀吉の慢心である。

あまりにも、とんとん拍子に天下を取ってしまったので、五十をこえた秀吉にも、

「わしの力のまえには、かなわぬものはない」

と、思いこみ、驕り高ぶるこころが出たとみえる。

人間というものは、若いころに、驕り高ぶる心や、悪い性質があって、そのために失敗をしても、

(ああ、自分がまちがっていた)

と、反省し、悪いところを改めてゆくことができる。

しかし、年をとってからだと、もう、心を改めるだけの余裕が、心にも体にもなくなってしまう。つまり、死ぬときが目の前に迫ってきているので、

（おれは、死ぬまでにこうしたい、ああしたい）

という心だけが、先にたってしまうからであろう。

だから、人というものは年をとってゆくにしたがい、若い頃より自分の心の動きに気をつけなくてはならぬ。

秀吉のように偉くなると、

「それはいけません。それは間違いです」

と、注意してくれる人もいなくなるものだ。

秀吉は、朝鮮国王に、こういってやった。

「自分は、日本を治め、唐を降参させ、天竺までもきり従えるつもりだ。朝鮮は、日本に従い、自分のいうことをきいて、東洋諸国を征伐するわが軍の道案内をせよ」

この秀吉の手紙をみた朝鮮国王は、

「とんでもないことだ。そんなばかなことができるものか。こうなっては、こちらもいくさの仕度を整えておかぬと、秀吉が攻めてくるにちがいない」

大いそぎで、戦争の準備にとりかかった。

秀吉は秀吉で、朝鮮が、

「はい、かしこまりました。よろこんで日本に従います」

と、返事をよこすのを待っている。

そのうちに、秀吉の弟、豊臣秀長が死んでしまった。

秀長は、秀吉の父違いの弟であるが、若いころから兄秀吉につかえ、いくさも上手なら、人がらもよくできた人物で、

「わが子の鶴松は、まだ小さいし、もしも万一、わしが死んだときは、おまえが後見となって、豊臣家がいつまでもさかえるようにしてくれ」

と、秀吉も、この弟がいることを力強く思っていたのだ。

その秀長が死んでしまった。

秀吉も、がっかりしているところへ、こんどは、たったりひとりの男の子、鶴松までもが病気にかかって死んでしまったのである。

鶴松は、まだ三歳の幼児であった。

「なぜ死んでしもうたのじゃ。わしを、このような悲しいめにあわせようとは……」

秀吉は嘆き悲しみ、およそ七日ほども、食べものを口に入れなかったという。

妻のねねとの間には子が生まれず、やっと側室の淀の方との間に生まれた鶴松――。それも五十をこえてからもうけた男の子だけに、秀吉の嘆きは非常なものだったといえる。

(もう、わしには子も生まれないだろう)

と、秀吉もあきらめたらしい。

そこで、関白の位は豊臣秀次に譲ることにした。

秀次は、秀吉の親類の子に生まれたが、
「わしの養子になれ」
と、秀吉が自分の子にもらいうけたのである。
鶴松を失った今、豊臣家の跡を継がせるものは、この秀次のほかにはいなかった。
秀吉は、
「そのつもりで、おまえも心をきめ、どうか立派な人物になってくれるように」
秀次へいいきかせ、京都の聚楽第へ住まわせることにし、
「わしは、伏見へ新しい城を築き、そこへ移ろう」
と、いいだした。
一年のうちに、弟とわが子に死なれてしまった秀吉の心は、乱れに乱れた。
新しい城を造ることによって、寂しい心を紛らせようとしたのかもしれない。
茶人の千利休に切腹を命じたのも、このころである。

朝鮮戦争

千利休は、堺の町の商人であったが、武野紹鷗の弟子となって、茶の湯を学び、ついに、茶道の名人と謳われるようになった。

茶の湯は、客を招き、まっ茶をたててもてなしながら、主人と客の間に交される、心と心のふれあいが大切なものとされている。

静かな部屋（茶室とよばれる）には、主人によって、さまざまなおもむきがあり、床の間の花一輪にも、主人の心が通っていなくてはならぬ。

部屋の中に飾られる絵や書。または、茶の湯につかわれる茶碗や茶釜、炉の中の灰や炭にまで、美しい、深い心がこもっていなくてはならぬ。

だから、茶の湯には、絵画や工芸や建築など、人間の生活の中にあるすべての「芸術」がふくまれているといってもよい。

千利休は、茶道によって、広い芸術の世界を指導することができた名人である。

豊臣秀吉が、武士として大名として天下をとった人なら、千利休は、茶の湯をもって芸術の天下をとった人といってもよい。

秀吉は、はじめ千利休を尊敬し、その弟子となった。

そのうちに、利休は秀吉のそばにいて、政治のことにまで重く用いられるようになったのである。

その利休に、

「腹を切れ」

と、秀吉が命じた。

秀吉と利休の物語は、いままでに何度も小説や映画、舞台にのせられたが、なぜ、秀吉が利休を憎むようになったか、はっきりしたことはわからない。

利休も、

「わしは、日本一の茶人じゃ」

という誇りが強く、秀吉のまえでも、茶の湯のことになると一歩もひかない。

そして、金や銀にいろどられた大がかりな、はでやかな秀吉の趣味を、

「いなかもののすることじゃ」

と、心の中では、軽蔑をしていたのかもしれない。

大名や侍たちまで、利休の茶の湯に対しては、頭が上がらなくなり、利休も少し慢心していたこともあったろう。

とにかく、腹を切れといえば、

「これからは心を改めます。命だけは許してください」

利休もあやまってくるだろう、と、秀吉は思っていたらしい。

ところが、千利休はあやまるどころか、いさぎよく自害をしてしまった。

茶人ではあっても利休の心の強さは、立派な武士に劣らぬものであったといえよう。

利休の死をきいたとき、きっと秀吉は、よい気持ちがしなかったろうと思われる。

さて……。

一五九二年（文禄元年）になると、秀吉は傍目（はため）にも異常なほど急ぎ、あわただしく朝鮮へ出陣するしたくにかかった。

肥前（佐賀県）の名護屋に城を築き、ここを朝鮮征伐の基地にすることにした。

玄界灘を隔てて、はるかに朝鮮を望む名護屋の小高い山の上に、いまも秀吉が築いた城のあとが残っている。

これも堂々たる城の構えであったことが、残っている石垣を見てもわかる。

またも、戦争であった。

しかも、こんどは海をわたって外国へいくさをしに出かけるのだ。

「みなも、いくさの支度にかかれ」

と、秀吉は諸国の大名へ命令をくだした。

どの大名たちも、

「また、いくさをなさるのか」

うんざりしてしまった。

徳川家康は、

「太閤殿下は、気がくるったのではないか」

と、いったそうである。

こうしたうちに、また秀吉を悲しませることがおきた。

母の大政所が、亡くなったのである。
この知らせをきいたとき、秀吉は、九州の名護屋城にいたが、
「わしが戻るまでは、生きていてくだされ」
懸命に祈りながら、夜を日についでかけもどってきたが、もう間にあわなかった。
悲しみ、嘆きつつ、秀吉は母の葬式をすますと、
「さ、こんどは伏見の城を築くのじゃ」
いっときも、じっとしていられないように、叫んだ。
伏見は、京都から十二キロ（三里）のところにあり、ここの桃山の上に、金と銀の城を築き、
「いずれ、朝鮮の国王が降参するだろうから、そのときは、朝鮮の使者をこの城へ呼びつけ、わしの力のすばらしさ、日本の国の勢いの大きさを見せてやるのじゃ」
これが、豊臣秀吉の夢であった。
たちまちに、城造りがはじまった。
朝鮮へ進む軍隊は、京都から西南にいる大名たち――つまり中国地方や九州地方の大名によって整えさせた。
だから秀吉は、
「徳川をはじめ、東北、北国にいる大名たちは、伏見の城造りに力を入れよ」
と、命じたものである。

外国との戦争をしながら、とほうもない大きな城造りをするのだから、たいへんな騒ぎであった。

幸いに、朝鮮での日本軍は勝ちに勝ち続け、加藤清正、小西行長、松浦鎮信、鍋島勝茂などのひきいる兵は、平壌まで進み、さらに明国とのさかいに近い会寧を占領した。

秀吉は、大よろこびで、

「わしも朝鮮へ渡るぞ。そして明国をも降参させ、天皇を明国の首都、北京へお迎えし、明国にも天皇の御料地をおつくりしよう。さらに、琉球（沖縄）や高山国（台湾）も征伐してくれる」

そればりか、フィリピンやインドにまで、

「日本に従え」

と、手紙を出したりしている。

「日本は神の国であり、これを治めている自分は、太陽の申し子であるぞ」

などと、秀吉は外国に対していばっている。

徳川家康が、

「殿下は、いよいよ気がくるいだした」

と、顔をしかめた。

顔をしかめたが、

（こんなようすでは、秀吉公の天下も長くはあるまい。もし、そうなったとき、天下は再び乱

れよう。そのときこそ、このわしが……）

ひそかに、家康はこころをかためていたのではなかろうか。

ところで……。

朝鮮を攻めた日本軍が、すぐ近くまでやってきたというので、

「こうしてはいられぬ」

と、明国も軍をととのえ、朝鮮をたすけはじめた。

朝鮮でも、海軍をひきいる李舜臣という大将が、船をそろえてのりだし、このため日本の水軍はひどい負けかたをした。

陸で勝っても、海で負けてはどうしようもない。

なぜなら、食糧も兵隊も武器も、船で海をわたり、朝鮮へ送りこまねばならぬからだ。

日本軍の力は、次第に衰えてきた。

「なんとか、朝鮮とのいくさをやめにしなくてはならぬ」

と、こころある日本の大将たちは、心配しはじめたし、天皇も、

「よいかげんに、いくさをやめなさい」

と、秀吉にいってよこされた。

このさなかに、淀の方が男の子を生みおとしたのである。

「わ、わしの子が……。しかも男の子が、また生まれたか。よし、すぐに顔を見に戻ろう」

秀吉は、喜びのあまり泣きだしたという。
悲しいことが続くかと思うと、また、こんな喜びがうまれる。
戦争をしながら、城を造る。
六十に近い秀吉が九州と京、大阪の間をいったりきたりするのだから、大変なことだ。
列車も航空機もない時代なのである。
馬や輿にのって、老いた体を忙しく、あっちへこっちへ動かしている豊臣秀吉の姿には、ひとりで相撲をとっているような感じさえするではないか。
淀の方が生んだ子を、
「拾丸と名づけよ」
と、秀吉はいった。
この拾丸が、のちの豊臣秀頼となる。

伏見の城

伏見の城は、約四か年の歳月をかけて完成した。
思いもかけなかった男の子が生まれ、朝鮮との間も、いちおう休戦のかたちとなり、豊臣秀吉は、まだできあがっていない伏見の城へ移り、

「さあ、しばらくはお拾（秀頼）をかわいがりながら、この城造りに力を入れよう」

元気が湧いてきた。

伏見の城は、大阪、江戸の二城とならび、日本の三大名城といわれている。

その中でも伏見城が、もっとも雄大で美しい城であった。

伏見城は、秀吉が死んだのち、戦火に焼かれたうえに、徳川幕府によって打ち壊されてしまい、伏見桃山の現地には、その遺跡がほとんどない。

けれども、そのころ伏見城内にあったいくつかの門や建物が、いまも諸方に移されており、それを見ることによってわたしたちは、

「なるほど。このように素晴らしい城だったのか」

と、納得がゆくのである。

たとえば、京都の西本願寺には、伏見城で、豊臣秀吉が大名たちに対面したという、白書院の対面所が移されている。

ここは二百畳あまりの大広間で、上段は秀吉のすわるところ、下段は大名たちがいならんだところで、その絢爛（けんらん）とした立派さ、大きさ、美しさは、見るものの目をみはらさせずにはおかない。

西本願寺の玄関、浪の間、虎の間なども、伏見城にあったものだという。

とにかく、この対面所を見ることによって、信長や秀吉がつくりあげた、安土桃山の時代や文化というものが、今のわたしたちの目で、とらえることができるのは、まことに楽しいことだ。

わたしたちは何よりも、こうした素晴らしいものを人間の手ひとつでつくりあげた四百年も前の日本人の才能に、驚かぬわけにはゆかないのである。

そのふすまや格天井に描かれた、そのころの有名な絵師たちの作品を見るだけでも、一日が暮れてしまうことであろう。

このほか、伏見の町の御香宮神社の表門は、伏見城の大手門を移したものだし、京都の二条城の唐門も、伏見城にあったものといわれている。

ところで……。

伏見桃山の、丘の上に築かれた城のひろさは、おそよ二千メートル（半里）四方にわたり、本丸、二ノ丸、三ノ丸をはじめ、十二か所の区画からなっている。

現在、コンクリートで造られている伏見城の天守閣は、もとの「御花畑」と呼ばれた場所にたてられたものだが、そこへのぼって眼下にひろがる伏見の町と城あとの木立を見渡すとき、この城のすばらしさがまぶたの底にうかんでくるような思いがする。

城のまわりは、二百数十におよぶ大名たちの屋敷によってかこまれ、宇治川の水を城の下までひきこみ、淀川へかけて大堤防を築くという大工事である。

この城の工事には、二十五万人もの人たちが全国から集まり、働いたという。

この城も金や銀によって飾られ、天守閣の金の瓦が、昔の伏見にあった、巨椋池（おぐらのいけ）という湖のように大きな池の水面へうつり、あまりにぴかぴかするので、池にはさかなが住まなくなっ

たなどという話さえ生まれた。

秀吉は、城を造りながら、吉野山で大がかりな花見を催したり、能の稽古をしたり、二歳になったわが子と遊んだり、満足の様子であった。

しかし、その喜びも一年ほどしか続かなかったのである。

まず、秀吉のおいで関白の位を譲られた豊臣秀次が事件をおこした。

秀次は、秀吉の姉の子で、のちに秀吉の養子となった。長男の鶴松が死んでから、秀吉は、

「わしには、もう子はできまい」

と、秀次に豊臣の家をつがせるつもりであった。

ところが、思いもかけず、秀頼という子が生まれた。

六十歳近くになった秀吉に、またも子ができようとは、秀吉も秀次も考えていなかったろう。

それだけに……。

「ほんとうの子ができたので、わしはじゃまものにされるのではないか？」

と、秀次は思いはじめた。

また、世間の噂も、

「まことの子が生まれたからには、太閤さま（秀吉）は、秀次公のようなできのよくない男に、天下を譲りわたすはずがない」

しだいに、たかまってくる。

たしかに豊臣秀次は、あまり立派な人物だったとはいえなかったようだ。まえまえから、おじの秀吉はなんども、秀次を厳しく戒めている。

秀次は、関白となってから驕りが強くなり、贅沢ばかりして、秀吉を困らせたり、家来たちをつかうのにもやりかたがへたで、政治家としても武将としても、あまり感心できる人ではない。

こういう秀次だから、

「きっと、わしは邪魔にされる。天下をゆずってはもらえないのだ」

ひとりかってに思いこみ、ふてくされてしまった。

そして、やけをおこし、いろいろと乱暴なまねをするようになった。

つみもない百姓を殺したり、道を歩いている町人をつかまえてきて、

「おまえは弓の的になれ」

といい、射殺してしまったりする。

こういう主人をもった家来たちの中には、悪いことをするものがかならずでてくる。

「おまえは、秀次のそばにいて、何かとたすけてやるように」

と、秀吉から命をうけ、秀次の家来になっていた木村常陸介などは、京の町の人々から金銀をかすめとり、たまらなくなった町人たちが逃げだすと、

「けしからぬやつめ」

と、こんどは主人の秀次が、その町人たちの家を売りとばし、逃げた町人たちをつかまえて

殺し、その死体を山や野へ捨てたりした。
こうした乱行がどこまで本当だったものかわからないが、とにかく、秀吉も放ってはおけなくなった。
なによりも、いろいろな噂がとび、天下がさわがしくなるのはこまる。
「いまに秀次公は謀叛をおこし、太閤殿下を殺すつもりだろう」
などというぶっそうな噂が流れはじめる。
ついに、
「秀次を高野山へ追いはらえ」
と、秀吉の命令がくだった。さらに、
「腹を切らせよ」
きびしい命令が追いかけてきた。
こうして、豊臣秀次が二十八歳の夏に、切腹をして死んだのである。
秀吉は、
「天下への見せしめじゃ」
と、おい（秀次）の首を、京都の三条河原へさらしものにした。
秀次の家来たちや、妻や側室たち女だけでも二十人あまりが、これも秀吉の命令によって皆殺しになった。

いままで、つくづくと秀次には手をやいてきただけに、いったんおこりだすと秀吉もずいぶん激しいことをする。年をとってきたし、気も短くなり、信長に仕えていたころのように、いつもにこにこしている秀吉ではなくなってきた。

それにしても、血が続いたおいを殺したのだから、よい気持ちではなかったろう。秀吉は、秀次が暮らしていた京都の聚楽第さえも、打ち壊してしまったのだ。

つづいて、伏見に大地震がおこり、せっかく築いた天守閣や門などが壊れてしまった。

そうするうちに朝鮮との間も、うまくゆかなくなってきた。

秀吉が大いばりで「いうことをきけば許してやろう」と、朝鮮や明国へ出した条件を、

「ばかなことをいうな」

と、朝鮮よりも、明国がおこってしまい、

「秀吉は日本の天皇になっても、それは勝手だが、日本はあくまでも明国の下にいなくてはならん。そうすれば、貿易ぐらいは許してやってもよい」

と、返事をよこした。

これをきいて、秀吉は、

「おのれ明国め。太閤をよくもばかにしたな。よし、こうなれば、思い知らせてくれる」

またも、戦争の仕度に取りかかったものである。

大名たちの軍船は、再び、海をこえて朝鮮を攻めに出かけることになった。

戦いは、またはじまった。
しかし、こんどは明国が腰をすえて朝鮮をたすけ、軍隊をくりだしてきたので、第一回の朝鮮攻めのようにうまくはゆかない。
豊臣秀吉の体は、このころから、急に衰えはじめた。

秀吉の死

すでに、豊臣秀吉は六十をこえていた。
ときどき気持ちが悪くなって、食べたものを吐き出したり、気がつかぬうちに小水をもらしたりした。
夜も、よく眠れない。
こんな具合では、とても朝鮮へわたり、日本軍の指揮をして戦いをすすめるわけにはゆかない。
一五九八年（慶長三年）の春――。
「気ばらしに、醍醐で花見をしよう」
と、秀吉がいいだした。
醍醐は、伏見城から東山連峰の裏側（東側）を北へ四キロ（一里）ほどいったところで、こ

こに醍醐寺という寺がある。

この寺は、西暦八百年から九百年ごろにかけてたてられたものだが、たびたびの戦火に焼け、荒れ果てていたのを、

「まわりの景色もよいし、この寺を立派なものにしてやろう」

と、秀吉が気に入って、十年もの月日をかけて寺をつくりなおした。

寺は、醍醐の山の上と下にわかれ、ことに下醍醐にある三宝院という塔頭（本寺の中にある小さな寺）は、いまも秀吉のつくった建物や庭を、ほとんど、そのままに残している。

この三宝院の庭は、秀吉が、

「花見のときのために、わしがつくってみよう」

こういって、木や石や草、花などに、いちいち目を配り、みずから設計したものだといわれている。

いま見ても、素晴らしい庭だ。

いちだん高いところに、なみなみとたたえられた水は、滝となって庭の池へ流れおち、この庭をながめる寺の、いくつかの建物をつなぐ渡り廊下などにまで、こまかい工夫が凝らされている。

「さあ、花見じゃ、花見じゃ。なにもかも忘れて、遊ぼうではないか」

まえまえから、諸国のサクラを集め、醍醐にうえさせてあった。

そのサクラの花が、いっせいに咲きそろったとき、秀吉は、いつものように大がかりなやりかたで、花見の宴を催した。

いくつもの茶屋が、それぞれに趣向をこらしてたてられ、大名たちも物売りや商人の姿になり、やきもちを売ったり、酒を売ったりしている。

「愉快じゃのう、お拾よ」

六十二歳の秀吉は、わが子の秀頼をだき、サクラの花の中に埋もれて、こころゆくまで遊んだ。

この花見がおわると、いよいよ秀吉の病気が悪くなってきた。

（わしも、もうながくは生きておられまい）

と、さすがの秀吉も覚悟をしたようだ。

まだ六歳になったばかりの秀頼が大きくなるまで、とても生きてはいられぬと悟った。

それで……。

徳川家康をはじめ五人の大老を定め、石田三成ほか五人の奉行をつくり、これらの人たちの力によって、秀頼と豊臣家が、いつまでも栄えるように考えたのである。

だから、この五大老、五奉行は、年老いて死を目の前にした豊臣秀吉が、もっとも頼みに思っている大名たちだといってよい。

その名を記しておこう。

（五大老）　　（五奉行）
徳川家康　　浅野長政
前田利家　　前田玄以（げんい）
宇喜多秀家　　石田三成
毛利輝元　　長束正家（なつかまさいえ）
上杉景勝　　増田長盛（ましたながもり）

この中でも、秀吉は、もっとも徳川家康の力を頼みにしていた。
というよりも、おそれていた。
なにしろ家康は、関東六か国の領主で二百五十万石の大きな大名となっており、しかも朝鮮戦争には出ていないので、その力は、はかり知れないものがある。
年をとった秀吉は、もう、なんとかして家康の機嫌をとり、わが子の将来を頼むよりしかたがなかった。
この年の秋がくるころ……。
（いよいよ、わしの命もきわまった）
秀吉もあきらめた。
そして、徳川家康を伏見城へ招き、

「あなたの孫娘の千姫と、わしの子の秀頼とは夫婦になる約束をした。そういうことであるから、あなたも、秀頼をほんとうの孫と思い、よろしくたのみます」

なみだをながし、家康の手を握りしめてたのんだ。

「こころえました。ご安心ください」

家康がこたえると、

「たのむ、たのむ。秀頼のことのほかに、わしはもう、なにごとも思い残すことはないのじゃ」

天下の英雄といわれた豊臣秀吉が、恥しいとも思わず、徳川家康の手をおしいただくようにして、訴えたのである。

それというのも……。

こうした約束ごとが、かならずしも、守られるものでないことを、秀吉は、よく知っていたからであろう。

天下をとり、敵に勝つためには、約束も人の情けも踏みにじって戦ってきた「武士の世界」を、秀吉はいやになるほど見てきたではないか……。

秀吉だって、主人の織田信長の子供たちに対して、心から世話をしてきたわけではないのだ。

いや、むしろ自分が天下をとるために、利用したほどだ。

それだけに……。

（わしが死んだあと、小さい秀頼は、どうなることか……）

おちおち、寝てもいられない。
心配で心配で、夜も眠れず、涙を流しながら病気が重くなってゆくのを、たまらない気持ちで感じているのであった。
死ぬときが近づくと、秀吉は、さらに五大家老に宛てて遺言状を書いた。
この遺言状は有名なものだから、わかりやすく、次に記しておこう。

くれぐれも、秀頼のことをたのみます。
五人の人たちよ。たのみます。たのみます。自分は間もなく死にます。名ごりおしいことでござる。
秀頼が、大きくなり、りっぱに豊臣家のあるじとなるよう、たのみます。
このほかには、思いのこすことはありません。
八月五日

秀　吉

いへやす（徳川家康）
ちくぜん（前田利家）
てるもと（毛利輝元）
かげかつ（上杉景勝）

ひでいへ（宇喜多秀家）
まいる

こうして「天下さま」の豊臣秀吉は、いざ死ぬときになると、どこにでもいるひとりの老人、わが子の幸せのみをねがう、涙もろい老人になってしまったのである。

この世のわかれに詠んだ秀吉の和歌は、

「つゆとおち、つゆときえにしわが身かな
　難波のことも、ゆめの又ゆめ」

と、いうものだ。

この年（慶長三年）の八月十八日。

豊臣秀吉は、六十三歳で死んだ。

秀吉の死によって、いよいよ徳川家康が天下に乗り出してくる。

「もはや、自分をおいて、天下を治めるものはいない」

と、家康は、はっきりと自信をもつようになった。

家康はまず、

「朝鮮でのいくさをやめさせ、兵士たちを呼びかえすように」

と、このことから手をつけはじめた。

徳川家康

天下のみだれ

豊臣秀吉が死ぬと、

「さあ、つぎに天下を取るのはだれだろう」

「それは、徳川に決まっている」

「いやいや、五人の大老たちが力を合わせて、小さい秀頼さまをお守りし、天下を治めてゆくのだそうだ」

「けれども、そんなことがうまくゆくかな」

早くも、世の噂が高まりはじめた。

朝鮮にいた日本軍も、この年いっぱいには引きあげてきた。

翌年の二月二十九日。

秀吉の葬式が京都の方広寺で、おごそかにとりおこなわれた。

この後、天下の政治は、秀吉が死ぬまえに、

「なにごとも、家康と利家の意見によって決定するように……そして、家康は伏見にいて政治のことをつかさどり、利家は、秀頼をまもって大阪へ移り、おもり役をしてもらいたい」

と、言い残していたので、七歳になった豊臣秀頼は大阪の城へ移り住むことになった。

五大老といっても、徳川家康と前田利家の二人が、大名たちを抑えきることができる力をもっていたとみてよい。

前田利家は、若いときの名を犬千代といい、秀吉が木下藤吉郎と名乗っていたころ、ふたりはともに織田信長の家来として、仲よく働き続けてきたものだ。

秀吉が、

「お犬どのよ」

といえば、利家は、

「さるどのよ」

と、こたえ、家族ぐるみの親しい友だちであった。

この友だちに対して、秀吉はよく面倒をみたし、利家もまた、秀吉が天下を取るようになってからは、心を込めて仕えてきたのである。

秀吉が死んだとき、前田利家は六十一歳で、あまり健康もすぐれていなかった。

利家は、越中（富山県）、加賀（石川県）を合わせ、八十三万五千石の領主で、城は金沢にあった。

国の力は、家康の三分の一ほどだが、前田利家の人柄の立派さを、大名たちは尊敬している。

それだけに、徳川家康も、

（早く自分の勢力をのばしておかねばならぬ）

と、思ったのであろう。

家康は、わが子の忠輝（六男）に伊達政宗の娘を、

「嫁にもらいたい」

と、約束し、さらに自分の養女を、福島正則の子の忠勝へ、

「嫁にしてほしい」

と、申し込んだ。

そしてまた、別の養女を、蜂須賀家へ嫁にやることも、約束してしまった。

伊達家は、奥州（東北地方）で六十一万石の大名だし、福島家は尾張で二十四万石。蜂須賀家は阿波（徳島県）で十八万石と、それぞれに力のある大名たちだ。

こういう大名たちと結婚によって縁をむすび、これを味方につけることを、秀吉は死ぬまえ

に、

「豊臣家の許しをうけぬうちは、決して、してはいけない」

といい、家康はじめ五大老から、

「勝手には、いたしません」

という約束の証文をとっている。

それなのに、徳川家康は、まるで、

（構うものか）

と、亡き秀吉との約束を忘れはてたように平気で、どしどし縁を結んでしまった。

これには大名たちもあきれたし、前田利家も、

「徳川どのを、厳しく問いつめよ」

すぐに使者をつかわしたが、家康は、

「そんなことがあったか。わしも年をとってものわすれをすることがたびたびじゃ。こりゃ、いかぬ。忘れていたわい」

忘れるはずがない。秀吉と約束してから、まだ一年もたっていないのだ。

家康は、こう思っている。

（大名たちの間がいろいろに乱れて、天下のことがあわただしく動きはじめるほうがよい。そうなれば、わしの力をもって天下をとりしずめる。とりしずめれば、わしが天下をとったのも

同じことじゃ。なれど、無理はすまい。亡き信長公も秀吉公も、あまりにも無理をしすぎた。そのために、せっかく手につかんだ天下も、自分が死ねば乱れてくる。わしは、そうしたくない。わしが天下をとったなら、わしの子も、わしの孫も、末長く天下を治められるようにしなくてはならぬ）

家康も五十八歳になっていたが、けっしてあせったりはしない。

じっと大名たちの動きを見守っている。

そのうちに、いよいよ前田利家の病気が重くなった。

利家は、死が近づいたのを知ると、妻の松子に筆をもたせ、跡継ぎの子の利長へ、言い残すことを書きとらせた。

このとき、利家の呼吸が急に迫ってきたので、妻が白い経帷子（きょうかたびら）を着せようとすると、利家は笑って、

「まだ死なぬうちに、そんなものを着せられてはかなわぬ。しかも、妻のおまえにそうされては、心寂しい」

「申しわけございませぬ」

「松どのよ」

「はい」

「せめて、あと五年。わしが生きておれば、わしの手で大名たちのこころをまとめ、秀頼公を

奉じ、みなが力を合わせ、平和な世の中をつくってみせてやるのじゃが……」

悔しそうにそういったが、

「なれど、こうなれば……おれはおれ、せがれたちはせがれたちじゃ。せめて、おまえが生きているうちは世の中が平和であってほしい。いま死のうとするわしが思うことは、ただ一つ、松どの、おまえのことだけじゃ」

しっかりと妻の手をにぎりしめ、

「大仏も焼けた。狂え、遊べ。浮世のことは定まらぬよ……」

と、謡いだした。

このうたは、まえにいくさが絶えなかったころ、世の中に流行したものである。

前田利家は、

（わしが死ねば、ふたたび天下は乱れるにちがいない）

と、思っていたのであろう。

こうして、前田利家は六十二歳で死んだ。

これは、秀吉なきのちの豊臣家を支えていた大きな柱が、地ひびきをたてて倒れたようなものであった。

こうなれば、

「天下は、いずれ徳川どののものだ」

と、家康の力の大きさ、深さが、あらためて、だれの目にもうつってきた。
（そうなれば、豊臣家はどうなるかわかったものではない。徳川の力を、これ以上ひろげさせてはならぬ）
本気になって、そう思ったのは、五奉行の一人、石田三成である。
三成は、少年のころから秀吉に仕えて出世をした大名だ。
昔の織田家における秀吉のように、豊臣家と三成のつながりは深いものがあったわけだ。

石田三成

石田三成は、近江の国、坂田郡石田村に生まれた。現在の長浜市石田町である。
三成の父、正継については、いまのところ、たしかなことがわかっていないが、人柄も立派で、学問にもたいそう通じていたようだ。
三成は、小さいころの名を左吉といった。
「わしの手もとをはなれ、いろいろと勉強をしたほうがよい」
と、父は考え、左吉を観音寺というお寺へあずけることにした。
この寺は、石田村の三成の家からも近い。
三成が観音寺へ来たころは、ちょうど、織田信長が小谷城の浅井長政を攻めていた。

観音寺のうしろの山には横山城という浅井方の城があり、浅井長政が滅びると、この横山城には、羽柴（豊臣）秀吉がはいった。

横山城から山道を散歩しながらおりていくと、いつのまにか観音寺の境内へはいってしまう。

こういうわけで、秀吉は気軽に、たびたび観音寺へきて、寺の和尚と世間話などをしたものであろう。

そして、秀吉は少年の石田左吉に目をつけた。

「利口そうな子供じゃ。わしがひきとって、立派な武士に育てあげてみたいな」

と、秀吉は思った。

『武将感状記』という昔の本にこんな話がのっている。

あるとき、秀吉が狩りにでて、喉が渇いたので、観音寺へはいってゆき、

「だれかおらぬか、茶がほしい」

と、声をかけた。

すると、少年の石田左吉が、大きな茶わんにぬるい茶をたてて持ってきた。喉が渇いている秀吉は、一息に、この茶を飲みほし、

「ああ、うまいな。もう一服ほしい」

と、いった。

左吉は、前のときよりも、いくらか熱めに茶をたてて、秀吉にさしだした。

「うまい。もう一服たのむ」

三度めに、左吉がたててきた茶は、小さな茶わんに、もっとも熱くたてられていた。

秀吉がきいた。

「だんだんに茶を熱くしたのは、どういうわけじゃ」

すると左吉は、

「喉が渇いているときは、一息に茶をのむものでございますから、あまり熱くしてはならぬと思いました」

と、こたえた。秀吉は、

「子供ながら、まことによく気がつく。これは見こみのある者だ」

と思い、和尚にたのんで自分の家来にした。

とにかく、十四、五歳の石田左吉が秀吉に認められたことはたしかであろう。

そして、左吉は、もちまえの利発さに努力をくわえ、まだ二十歳にもならぬうちに、従五位、治部少輔という位につき、石田三成と名乗るようになった。

豊臣秀吉は、三成のことを、

「わしとおなじように、心のはたらきが見事なのは、三成だけじゃ」

と、ほめた。

それほどに、三成は秀吉の気持ちを、いわれぬうちにくみとり、秀吉が気にいるように働いたのである。

これは、信長の家来だったときの秀吉と同じようなものだ。秀吉は、

「信長公にお仕えしていたときの、若いころのわしにそっくりじゃ」

と、三成を見ていたことであろう。

そして……。

秀吉が死んだとき、石田三成は近江の国、佐和山の城主で、二十万三千石あまりの国々を治めていた。

秀吉の遺言により、三成は、五人の奉行とともに、五大老をたすけて、政治をおこなっていた。

石田三成については、いろいろの見方がなされてきた。

秀吉が生きているうちから、たくらみごとにじょうずで、歴史のうえにはあらわれていない秘密も多いといわれている。

それだけに、加藤清正や福島正則、黒田長政などの、これも秀吉にかわいがられていた武将たちからもにくまれていた。

朝鮮戦争のときに、こんなことがあった。

石田三成は、仲のよい小西行長といっしょに、内地と朝鮮の間を何度も海をわたり、いったりきたりしながら、戦地の有様を秀吉に伝えていた。

そして、また秀吉の命令を戦地に伝えた。

つまり、連絡のための役目についていたのだ。

だが、戦地にいる加藤清正などは、

「石田三成めは、太閤殿下（秀吉）に、われわれのことを悪くいいふらしている」

激しく怒ったことがある。

これは三成が、

「清正が、かってに豊臣の姓を名のったり、小西行長の悪口をいいふらしたり、家来たちが明国人の金をぬすんだりしている」

と、秀吉へ知らせたりしたからだ。このため、加藤清正は秀吉から、ひどくしかりつけられた。

朝鮮からひきあげてきたとき、清正たち七人の武将は、すでに秀吉も死んでいたので、

「では内府（家康）に、三成のことを訴えよう」

しめしあわせて、徳川家康など五大老へ、

「三成のいいかげんなやりかたを、こらしめていただきたい」

訴えでた。

しまいには、
「めんどうじゃ。三成を殺してしまおう」
と、兵をくりだし、三成の命を狙ったりしたものだから、家康は、
「大阪や伏見にいては危ないから、しばらくの間、佐和山へ帰っていてはどうか」
と、三成にすすめ、三成も承知をした。
小さいときから本を読むこともなく、戦場で敵の首をとることを誇りに思って生きてきた加藤清正のような武将と、
「いくら落ちぶれても、学問を怠るな」
との父、正継の教えを守り、かたときも書物を離さなかった三成とでは、どちらにせよ気持ちも通じあわなかったといえよう。
石田三成は、徳川家康のいうままに、佐和山の城へ帰った。
家康のいうことをおとなしくきいてはいても、
（いまに、きっと家康は秀頼公を滅ぼして、天下を取るつもりだ）
と、三成は信じていた。
三成は、
（なんとか、秀頼公が大きくなって、立派に政治がとれるようになるまで、われわれが力をあわせ、豊臣の天下を守り続けたい）

と、心を決めていたのだ。

佐和山（いまの彦根市）へ帰った三成は、自分の国の政治を整えながらも、自分の味方になってくれる大名たちと、密かに連絡をとりながら、

（機会がきたら、こちらもできるかぎりの兵力を整え、家康と戦わねばなるまい）

と準備を怠らなかった。

三成は、領民をかわいがり、よい政治をおこなっていたし、立派な武士を見つけると費用をおしまずに出して、自分の家来にした。だから、三成のために死のうという者も、たくさんいたのである。

また、三成を憎むものがあるなら、家康を憎むものもいる。

家康とおなじ五大老のひとりで、会津百二十万石の大名、上杉景勝も、

「家康の、このごろのいばりかたはどうじゃ。まるで自分が天下を取ったつもりになっているではないか」

おもしろくない。

だから、上杉が石田三成と手を結び合ったのも、「なるほど」と、わかる。

徳川家康も、

（ははあ、石田と上杉は、わしのことを滅ぼそうとしているな）

すでに気がついている。

だから、会津（福島県）の国もとへ帰っている上杉景勝へ、
「そちらでは、ほうぼうへ新しい城を築いたり、浪人を召し抱えたり、何やらいくさの準備にかかっているそうだが、けしからぬことではないか。一度、こちらへきて、わけを話してもらいたい」
と、何度も家康はいってやった。
むろん、景勝はいうことをきかない。
家康がさしむけた使いのものも、追いかえされる始末である。
「よし。こうなっては上杉景勝を討つよりしかたがない」
ついに、徳川家康は、遠い遠い会津の国まで、上杉景勝を攻めに出かけることになった。
石田三成は、このときを待っていた。
「家康が上杉攻めに出かけた留守に、こちらでも兵をあげよう。そして、上杉とこちらとで家康を挟み討ちにしてしまおう」
これが、三成と景勝との作戦であった。
ところが……。
徳川家康は、
「それくらいのことは、わかっている。わしは、それを待っているのだ。むこうからいくさをしかけてくるのなら、こちらも負けてはいない。この機会に、わしに逆らうやつどもを、みん

な討ちほろぼしてくれよう」

なにもかも知ってのうえで、伏見を出発した。

伏見の城へは、重臣の鳥居元忠に千八百人の兵を与えて、

「わしが去ったあとで、きっと、この城へ石田方の軍が攻めよせてくるであろう。ごくろうじゃな」

涙を浮かべながら、しみじみといった。

鳥居元忠は、

「なんの、平気でござる。会津攻めには一兵でも多くひきつれておいでなされ」

と、こたえた。

元忠は、伏見城で死ぬ覚悟をきめていたのである。

この年の六月十八日に、徳川家康は伏見城をでて、七月二日に江戸城へ帰り、いよいよ上杉攻めの準備にとりかかった。

徳川家康

徳川家康は、一五四二年（天文十一年）の十二月二十六日に、三河の岡崎城で生まれた。

家康の父、松平広忠は、このとき十七歳であったというから、ずいぶん若い父親である。

このころの松平家は、三河の小さな大名であった。

となりの国々には、今川義元や織田信秀（信長の父）などの強い大名たちがいて、家康も、その父も、さんざんに苦しめられた。

松平氏の先祖も、これもいろいろに説があるけれども、本当のところは、よくわかっていない。

とにかく、家康より九代もまえの松平親氏のころ、三河（愛知県）の山あいにある松平という土地の大将となっていたらしい。

それから、だんだんに勢いをのばし、力を蓄え、家康の祖父、清康のころに、岡崎へ出て城を築き、ここを松平家の本城としたのである。

この清康は、すぐれた大名であったが、二十五歳のときに自分の家来に、ふとしたことで殺されてしまった。

このため、松平家の一族の中で争いがおこり、本家をついだ広忠の命も危なくなる、というさわぎになった。

広忠は、このとき十歳で、岡崎にいては危ないというので、伊勢の国へ逃げていったこともある。

だから、松平家は今川義元の力をかりて、細々と生きてゆかねばならなかったのだ。

「かわいそうじゃが、この子に今川家へ人質にいってもらおう」

と、松平広忠は、わが子の家康を今川義元へ預けることにした。
このとき、家康はわずかに六歳であった。
父の広忠としては、
「けっして、あなたに背きません」
と、今川義元へちかいをたてた、その証拠に、わが子を預けたのである。
それで、もしも広忠が今川家に背くことがあれば、たちまちに、わが子の首を切られてしまうことになる。
人質というものは、こうしたものなのである。
家康は、まだ、物心もつかぬうちから親の手もとをはなれて、他人のところへ預けられてしまった。
家康の苦労は、このときからはじまっていた。
まだ、家康の不幸はつづく。
家康が八歳になったとき、父の広忠が、またも家来に殺されてしまった。
親類でも家来でも、油断のならぬ戦国時代なのだ。
少年のころの家康は、岡崎にいる家来たちに会うときも、
「よろしゅうございますか?」
いちいち、今川義元のゆるしを待たなくてはならない。

「おかわいそうに」
「よし、いまにきっと若殿をお迎えして、松平家に昔のような、盛んな勢いをとりもどそう」
「よし、やろう」
家来たちも、小さな主人と一緒に苦労をしてきた。
ひどいめに遇っている主人についている家来たちだから、数は少なくても、みんなこころのしっかりしたものばかりが残っている。
こうして、徳川家の強い団結の力が生まれたのだ。
織田信長が、桶狭間で今川義元の首をとったとき、家康は、いうまでもなく今川軍について戦っていたのである。義元が死んでから、はじめて岡崎城のあるじとして、家来たちのところへ帰った。
そして、家康は織田信長に従うことになる。
家康が、松平の姓をすてて、徳川家康とあらためたのは、一五六六年（永禄九年）、二十五歳のときであった。
このの家康については、すでにいろいろと述べてきたつもりだ。
読者は、もう一度、織田信長の疑いをとくため、家康が、わが子の信康に腹を切らせたときの話を思い出していただきたい。
自分の国と家来を守るためには、

「どんなつらいことでも、じっとがまんしなくてはならぬ」
という考えが、家康の心にしみついている。
六つのときから、国と家のために人質にだされた人間でなくては、とてもできぬことだ。
信長が急死したときも、秀吉に天下をとられてしまった。
しかし、このときも家康は、
「けっして負けてはいないのだぞ」
という自分の力を、秀吉に見せたうえで、秀吉に従うことにした。
力にまかせて、大切な家来を戦争で死なすことは、
「なによりもつらい、いやなことじゃ」
と、家康は思っている。
いったん、従うときめたら、家康はけっして背かない。だから信長も秀吉も、家康の底力をおそろしいと思いながら、
「徳川どのは、まじめな人じゃ」
と、ほめないわけにはゆかなかった。
だが、豊臣秀吉も死んでしまった。
そうなると、五十六歳になった徳川家康の力と勢いは、どの大名よりも強く大きい。
「いまこそ、わしが天下を治めるときがきた。わしが出てゆかぬと、いつまでも日本に戦争が

なくならないだろう」

と、そこまで家康は、自信をもつようになっていた。

だからこそ、伏見城の留守をまかせた家来の鳥居元忠が、戦死することを見抜いたうえで、上杉攻めに出ていったのである。

さて……。

徳川家康が去ったのち、石田三成は、五奉行の長束正家、大谷吉継らと相談をし、五大老の毛利輝元、宇喜多秀家も味方にすることができた。

こうして、いよいよ三成は軍隊を整え、大阪城を占領した。

この三成の軍を西軍と呼び、家康の軍を東軍と呼ぶ。

石田三成は、

「家康は、亡き太閤殿下の前でとりきめた誓いを十七も破った。これは、けしからぬ罪をおかしたことである」

と書類をつくり、これを大名たちへ送り、家康へも送りつけた。

そして、伏見城を攻めた。

かねて、覚悟をしていた鳥居元忠は必死で戦い、十日あまりも城を守ったが、ついにやぶれ、元忠以下、徳川の侍は、全滅した。

徳川家康は、江戸城を出て、野州（栃木県）の小山まできたところで、西軍がいくさをしか

けてきたことをきいた。

家康も、すでに覚悟をしている。

さっそくに、上杉攻めにしたがっている大名たちを集め、

「おのおのが、どちらへ味方をしても、それは自由である」

思いきって、いった。

すると、豊臣家には恩をうけている福島正則などが、

「われらが先鋒として、西軍に向かいましょう」

と、誓いの証文を書いた。

これが、きっかけとなり、大名たちは、ほとんど家康とともに西軍と戦う誓いをたてた。

なかには、信州上田の城主、真田昌幸、幸村の父子のような大名もいて、

「わしらは、西軍の味方じゃ」

さっさと兵をまとめ、真田父子は上田の城へ帰ってしまった。

こののち、真田父子は、家康の子の徳川秀忠がひきいる三万の大軍を上田城にむかえて戦い、ついに秀忠軍は関ケ原の決戦場へ間にあわぬことになったのである。

徳川家康は、いったん江戸城へかえり、八月の末まで動かなかった。

そのころ、石田三成は西軍を率い、美濃（岐阜県）の大垣城へはいった。

東軍の先鋒部隊も、すかさず尾張の清洲城へはいり、さらに、岐阜城を攻めおとして、ここ

へはいった。

このとき、西軍に加わり、岐阜城を守っていたのは、織田信長の孫秀信であった。

秀信は、あの三法師丸だ。祖父信長が死んだとき、豊臣秀吉の腕にだかれて、織田家の跡継ぎとなった三歳の三法師が、今は二十一歳の岐阜城主になっていたのである。

秀信は、家康に降参したのち、高野山へはいって、五年後に病死した。

こうして、東西両軍は、岐阜と大垣の城へそれぞれにはいったが、さらに東軍は、大垣城の西六キロ（一里半）ほどの赤坂まで進み、ここで両軍は、睨み合いのかたちになった。

「これで、天下分け目の決戦場も、きまったようなものじゃ」

と、徳川家康は、三万あまりの本軍を率いて、江戸城を出発した。

会津の上杉景勝には、

「たのむぞよ」

と、伊達政宗など、東北地方の大名たちに見張りをたのんでおいてある。

そして、家康の本軍は、九月十四日に赤坂へ着いた。

決戦の日がいよいよ近づいてきた。

関ケ原の決戦

うごきだす両軍

東軍の総大将である徳川家康が、戦場にあらわれたことによって、

「いよいよ、戦いのときがきた」

と、両軍とも気持ちがたかぶり、この日の午後に、赤坂と大垣の間をながれる杭瀬川で、両軍の小さないくさがおこなわれた。

このときは東軍が、ひどい負けかたをした。

赤坂の町のはずれにある岡山という丘の上の本陣で、このようすを見ていた家康は、

「大切な決戦の前に、あのような小さないくさをして、兵力を失うとは、けしからぬことだ」

きげんがわるくなり、

「こちらの兵をひきあげさせよ」
と、命じた。
このとき家康は、五十九歳の老いた顔に、血をのぼらせ、
「ここで足踏みをしていてもはじまらぬ」
大声になり、
「かまわぬ。まっしぐらに大阪へ進もうぞ」
と、いいはなった。
目の前の大垣城にいる石田三成の西軍などには構わず、大阪城を攻めおとそうというのだ。
大阪城には、豊臣秀頼をまもって、毛利輝元がいる。秀頼がいるこの城は、いうまでもなく豊臣家の本城である。
「大阪へむかうみちみち、石田の城がある佐和山をはじめ、ほうぼうにあつまっている西軍は、みな打ち破り、一挙に大阪へ進むのじゃ」
いままでは、穏やかだった徳川家康も、久しぶりのいくさにのぞみ、思いきったことをはじめようとしている。
いま、家康の率いる東軍が大阪へ進むとなれば、西軍の大垣城を左手に見ながら中山道とよぶ街道を西へすすみ、山と山の間を抜けて関ケ原の平地を通り、佐和山から、琵琶湖にそって京都へ……さらに、大阪へということになる。

「それ、出発の準備をせよ」
と、家康は隠すこともなく命令をくだした。
なにしろ、大垣の敵は一里半（六キロ）の近くにいることだし、互いに偵察の兵をだしたり、スパイをだして、様子をさぐらせているので、
「東軍は、一挙に大阪へ進むらしい」
と、大垣城へも知らせがはいった。
家康は、わざと、隠しもせずに、こちらの作戦を敵に知らせるようにしたのだ。
（どちらにせよ、こうしておけば敵も大垣城を出て、こちらへ決戦をしかけてくるであろう）
家康は、そう思っている。
大垣城では、石田三成を中心に作戦がねられた。
「今夜、赤坂の家康本陣へ攻めかかろうではないか」
「ぐずぐずしていることはない。今夜を決戦のときにしよう」
「いかにも。家康の誘いにのるよりも早く、こちらから攻めよせたほうがいい」
勇敢な作戦をもちだす人もある。
だが、石田三成のこころは、迷っていた。
（家康は、きっと、こちらが夜に攻めていくことを、計算に入れているだろう。そこへ攻めていっては、かえって危ない）

と、思ったり、

（暗い夜の闇の中でのいくさは、めちゃめちゃになって、敵も味方も見分けがつかなくなる。そんなことをして、大切な決戦にまちがいでもおこしたら、とりかえしがつかなくなるだろう）

迷い続けていた。

三成は、頭の働きが、あまりにも細かく鋭いので、かえって作戦を考えすぎてしまい、迷いがおこるのだ。

あまりに、三成が迷いつづけて、煮えきらないので、仲のよい小西行長でさえ、

「三成どのは、夜のいくさが危ないといわれるが、子供のあそびではあるまいし、いちいち、することを危なげっていては勝てるものか」

と、おこりだしてしまった。

島津義弘、宇喜多秀家も、同じように三成の決心がつかぬことに、

「これでは、とてもいくさにならぬ」

不機嫌になった。

小西、島津、宇喜多の三将は、かねてから三成が、

「いちばん、頼みにできるのは、この三人の勇士たちである」

といっていたほどだ。

その三人が、三成にあいそをつかしてしまったのである。

もちろん、三人の夜襲作戦に反対するものもいたし、ついに三成も、
「敵が動くより先に、わが軍は大垣城を出て西へすすみ、関ケ原に陣を構え、あとから進んでくる東軍をむかえて決戦することにしよう」
と、こころをきめた。
「そのようなことをしたら、みすみす家康のはかりごとにのせられてしまう」
小西行長は反対したが、結局、石田三成の命令によって西軍は関ケ原へ進むことになった。
そのころ、雨がひどく降りだしていた。

戦場の霧

西軍が大垣城を出たのは、夜の七時ころであった。
大雨の中に、火もつけず、ひそかにひそかに、西軍はずぶぬれになって、南宮山の麓を南に回り、関ケ原へすすんだ。
この南宮山には、長束、安国寺、長宗我部などの西軍の将が兵を率い、陣を構えていた。
石田三成は、
「戦いがはじまったら、関ケ原の本陣でのろしをうちあげる。それを合い図にして、あなた方は山を下り、敵に攻めかかるように」

と、南宮山の西軍に命令を伝え、なおも雨の中を進み、十五日の午前三時ごろには、関ケ原の北のはずれにある笹尾山へ本陣を構えた。

そのころ……。

徳川家康も、七万あまりの東軍をしたがえ、赤坂を出て、垂井の町へはいっていた。

垂井の町は、南宮山の北側にある。

つまり、西軍は山の南側を回って関ケ原へすすみ、東軍は北の麓の道をまっすぐに決戦場へむかったことになる。

そして家康は、関ケ原の東のはずれにある桃配山へ本陣をかまえた。

雨は降りつづいている。

両軍とも、戦いの準備にいそがしい。

まもなく、朝になろうとしていた。

夜は明けたが、雨が霧にかわった。

山も野も林も、乳色の濃い霧につつまれ、どこに敵がいるのか味方がいるのか、まるでわからないほどであった。

ときに、一六〇〇年（慶長五年）九月十五日で、現代では十月二十一日にあたる。

石田三成は、笹尾山の本陣にいて、まだ心配そうな顔つきであった。

（もしも、わしを裏切るものが出たら……）

そのことが気にかかる。
それというのも……。
松尾山に陣をかまえている、西軍の小早川秀秋の様子がおかしいのだ。
ひそかに、徳川家康が、
「いざというときに、こちらがわについてもらいたい」
と、使いの者を送り、小早川秀秋を誘いこんでいるらしい。
「小早川どのは、あてにならぬ」
と、三成の親友、大谷吉継もいっていた。
その大谷吉継は、病気の体に鎧をつけ、小早川部隊のいる松尾山のふもとに、陣を構えているはずだ。
「小早川を、よく見張ってくれ」
三成は、大谷によくたのんである。
白くたちこめる霧の中に、両軍から斥候の兵が出て、互いに陣形をさぐり合った。
午前八時ごろ……。
ようやく霧がうすれかかった。
戦いは、まず東軍の井伊、松平の隊と、西軍の宇喜多隊によって、火ぶたが切られた。
鉄砲隊が、どっとくりだす。

ごうぜんたる銃声が、山野にとどろくや、
「わあ……！」
「うおお、うおお……！」
槍の穂先をつらね、両軍がぶつかりあった。
両軍は、のろしをあげて、味方にいくさがはじまったことを知らせた。

戦う東西両軍

関ケ原は、東西二キロ、南北二キロの平原で、北西に一・五キロほど平地がのびている。四方を山に囲まれた平原を抜け、山と山の間をぬって通じる道は、中山、北国、伊勢の三街道である。
西軍は、これらの道が京都、大阪へのびているところ……つまり、関ケ原の北、西、南、にかけて陣をかまえた。
東軍は、関ケ原の東から、まっすぐに進んで戦場へ臨んだわけである。
東軍は、黒田長政の隊が山の麓にまわって、
「それ、かかれ！」
いきなり、石田本陣の左側から、一斉に鉄砲を撃ちかけてきた。

このとき、本陣の前にいた石田三成の家来、島左近は、
「押し戻せ。一歩もひくな、ひくな！」
隊を二つにわけて、黒田隊へつっこんだ。
すると、これを見た細川、加藤の東軍が、
「黒田をたすけよ」
猛然として、島左近の隊へ襲いかかる。
軍馬のいななき、銃声、突撃の叫びが、石田本陣のまわりに揺れ動き、
「島左近をたすけよ」
と、本陣の石田三成も命令をくだす。
すさまじい戦いがはじまった。
この戦いで、島左近は重傷をうけて、動けなくなり、石田本陣も危なかったが、
「ひくな、ひくな！」
三成もけんめいである。
ついに、三成の本隊が東軍を追い払った。
いっぽうでは……。
西軍の宇喜多隊を、福島正則の隊へゆずった井伊、松平の東軍は、
「島津は強いぞ。強いものを早く討ってしまえ！」

ときの声をあげて、笹尾山の南にいる西軍の島津義弘の隊へ、突撃していった。
島津隊は、陣地の前に竹と木でつくった柵を設け、この柵の間から鉄砲を撃つ。鉄砲隊は三つにわかれていて、かわるがわる撃つものだから、東軍もなかなか近よれない。
しかし、鉄砲を撃つだけで、島津隊は戦場へ出てこようとはしない。
寺沢、古田などの東軍も、小西行長の隊とぶつかり合い、猛烈に戦った。
霧が雨にかわった。
そして「あっ」という間に、時が流れていった。
徳川家康は、
「本陣を進めよ！」
と、桃配山からおりて、戦場へあらわれ、
「松尾山の小早川はどうした？」
しきりに、家来たちへ問いかけた。
この戦場で、西軍の小早川秀秋が自分の味方になるように、かねてからさそってあった。
しかし、松尾山の小早川隊一万三千は、まだ山の上にいて動かず、戦いのありさまを見おろしているではないか……。
石田三成も、
「早く山をおりて、敵に攻めかかってくれ」

何度も使いをだしているのだが、小早川隊は、こちらのいうこともきかない。
つまり、小早川秀秋は、
（もう少し、様子を見て、どっちか勝ちそうなほうへ味方しよう）
と思っているのだ。
なんというひきょうな大将であろうか。
すでに、昼近くなった。
引いてはすすみ、睨み合っているかと思うと、またも突き合って戦う。
どちらかといえば、西軍のほうが東軍をおしつめ、圧迫してきた。
一里（四キロ）四方の平原に、数万の兵がひしめき、槍と刀をふるってもみ合い、押し合っている。
徳川家康は気が気でなく、
「本陣を、もっと進めよ」
と、戦場のまん中まででてきて、
「小早川め、なにをぐずぐずしておるのじゃ」
足を踏みならし、手の爪をかみながら、じりじりしていた。
「よし」
家康はついに、

「こうなれば、小早川へ鉄砲を撃ちかけよ！」
激しい声で命じた。
すぐに、東軍の鉄砲隊が松尾山のふもとまで進み、一斉に射撃をおこなった。
だ、だだあん……！
ものすごい鉄砲の音だ。
松尾山にいた小早川秀秋も、
「徳川どのがおこっているぞ。こうなればもうしかたがない。東軍へ味方をしよう」
こころをきめた。
「うわあ……！」
松尾山の小早川隊が、一斉に山を下りはじめると、山すそにいた、これも西軍の脇坂、朽木隊なども味方を裏切り、小早川隊といっしょになって、西軍へ突撃してきた。
「やはり、小早川たちはあてにならなかったわい」
これを見た西軍の大谷吉継は、四千の兵をひきい、
「これが最後じゃ」
病気なので、兵たちにかつがせたこしの上へのり、戦いの指揮にあたるため、陣地へくだっていった。
大谷吉継は、友だちの石田三成から、こんどのいくさのことをきいたとき、

「徳川どのといくさをするのは、よろしくない」
しきりにとめた。
だが、どうしても三成がいうことをきかず、
「たのむ、味方になってくれ」
そういわれて、
（わしと石田との友情は、深くて厚いものだ。友を裏切ることはできない）
死ぬ覚悟で、西軍に加わったものである。
四千の大谷隊が、奮闘したのちに敗れ、大谷吉継も戦死をすると、にわかに戦場のようすがかわってきた。
小早川隊などの裏切りをきいた西軍は、急に乱れはじめ、小西、宇喜多の隊が戦場から逃げはじめた。
このときになっても、まだ南宮山の西軍は戦場に現われなかった。
石田三成は、必死にいくさの指揮をとっていたが、敵が、どしどし本陣めがけておしよせてくるので、
（もはやいかぬ）
わずかな家来とともに、三成は笹尾山の本陣をすてて、山道づたいに伊吹山の森の中へ逃げこんでいった。

これで、西軍の負けが決まったようなものだ。

このときまで、じっと戦場のようすを見ていた西軍の島津隊が、とつぜんに陣地を出て、むらがる東軍の中を駆け抜け、退却にかかった。

うしろへ逃げるのではない。前にいる敵を打ちやぶって、逃げようというのである。

島津義弘が戦場に出なかったのは、石田三成のすることに不満であったからだろう。

義弘が、しきりにいいはった夜戦のことも、三成はしりぞけている。

「いくさのこともわからぬ三成の下では、働けるものではない」

と、島津隊は怒っていたらしい。

だからといって、小早川などのように、味方を裏切るような卑怯さはなかった。

そして……。

勝ち負けがきまったあとで、退却戦をはじめたわけだ。これには、東軍も驚いた。

すさまじい戦いのうず巻の中を、島津義弘が切り抜けて、ようやくに戦場を離れたとき、一千の兵が五十人ほどにへってしまったという。

戦場に秋の雨音がきこえ、人馬の響きも絶えたのは、午後の三時ごろであったろう。

家康の勝利

関ケ原の決戦に勝った徳川家康は、つづいて、石田三成の佐和山城を攻めおとした。

このとき、三成の父、石田正継や兄の正澄も、城の中で自殺してしまった。

佐和山から大津へ進んだ家康は、大阪城にいる毛利輝元へ、

「あなたのことは、なんとも思っていないから、素直に大阪城をあけわたしてください」

と、使いをやった。

輝元は、よろこんで家康を迎えいれた。

南宮山にいた毛利秀之は、輝元の養子で、ついに戦場へは出なかった。つまり、西軍にも東軍にも味方しなかったのである。

いろいろ考えてみると、西軍は、それぞれの大将たちは強くても、それをまとめていく石田三成に、戦争をする大きな力が備わっていなかったから、負けてしまったことがわかる。

三成も、偉い大名であるが、このように大きな戦争をするとなれば、やはり徳川家康にはかなわない。戦死した大谷吉継がいったように、なってしまったのである。

ところで……。

逃げた石田三成は、

（なんとか生きのびて、もう一度、家康と戦うのだ）

そのつもりで、しまいには腹をこわして病気になったうえ、ひとりきりとなって、山の中や村々を逃げまわったが、近江の国の古橋にある、三珠院という寺へかくれているところを、さがしにきた東軍の田中吉政にとらえられた。

これが、九月二十一日である。

三成は、やがて家康の前へひき出されたが、すこしもわるびれることなく、堂々として家康に会った。

このとき、三成の前を通りかかった福島正則が、

「きさまは、つまらぬいくさをおこしたうえに、いまのざまはなにごとか」

罵（ののし）ると、三成は、

「わしは、武運つたなく、きさまを生捕りにして、今のわしのようにできなかったことが、残念である」

と、いい返した。

次に通りかかった黒田長政は、馬からおりて、

「三成どの。不幸にも、このような姿になられ、さぞ、残念でござろう」

いたわりの言葉をかけ、雨と泥に汚れている三成の着物の上から、自分の羽織を脱いで着せかけてやった。

すると、こんどは三成を裏切った小早川秀秋が通りかかった。これを見た石田三成は、

「まて、秀秋。わしがおぬしの裏切りを知らなかったのは愚かであったが、亡き秀吉公からうけた恩を忘れ、わしとの約束を破ったおぬしは、侍として恥ずかしくないのか」

と、どなりつけた。

小早川秀秋は、まっさおになり、声もなく、こそこそと、どこかへいってしまったという。

三成は、とらえられても恥とは思わなかった。

戦場から逃げたのも、

(家康を滅ぼさなくては、豊臣家のためにならぬ)

と、思いつめていたからである。

小西行長や、安国寺恵瓊(あんこくじえけい)なども、とらえられた。

十月一日になると、三成、行長、恵瓊の三人は一台ずつの車にのせられ、京都の町中をひきまわされたのち、六条河原の刑場で首を切られた。

三成の首は、ほかのふたりの首とともに、三条の橋のほとりにかけられ、さらしものにされた。

勝った大将は、負けた大将の首を、世の中の人びとに見せて、勝ったことを知らせるならわしなのだ。

石田三成の首のない体は、昔から三成と仲がよかった、京都の大徳寺の円鑑という偉い坊さ

まがひきとって、大徳寺の中の三玄院という寺へ葬った。
いまも、三玄院には三成の墓がある。

江戸幕府

関ケ原の決戦に勝った徳川家康は、もう天下さまと同じようなものであった。
家康の実力を、うたがうものはない。
一六〇三年（慶長八年）家康が六十二歳になると、天皇は、家康に、
「征夷大将軍に任命する」
と、お命じになった。
足利将軍義昭が、織田信長に京都から追い払われてから、三十年ぶりに将軍がでたことになる。
日本の軍隊をしたがえ、天皇にかわって政治の責任を担う将軍がいて、命令を下すところを、幕府と呼ぶ。
足利将軍のときは、京都の室町がその場所であったから、これを室町幕府とよんだ。
こんどの徳川将軍の本城は、江戸にある。したがって徳川の幕府を、江戸幕府とよぶのだ。
家康は、江戸の町づくりを、熱心に始めた。

江戸城も、
「幕府のあるところだから、もっと、立派な大きい城にしたい」
と、家康は諸国の大名に命じて、城の工事にとりかからせた。
昔は、家康も、信長や秀吉の城造りをたすけて、働いたものである。
大名たちは、もう家康に、頭が上がらない。
石田三成と一緒になって、いくさをしかけた上杉景勝も、いまは降参して、江戸城の工事の代表者のひとりとなってしまった。
国民も、武士も、大名も、
「もう戦争は、たくさんだ」
という心になっている。
戦争のためにつかう費用や時間が、全国的に、人の暮らしのためにふりむけられてゆく。
その中でも、新しい将軍の城がある江戸の町は、生き生きとした建設工事が、休むことなくおこなわれ、何年も続いた。
そして、家康は将軍になってから二年ほどすると、
「わしは隠居をして、将軍はせがれの秀忠に譲る」
と、天下に発表した。
このことは、

「徳川将軍は、わし一代限りで終わるのではない。何代も何代も続いてゆくのだ」

という家康の決心を、ひろく天下に示したことになるのだ。

信長や秀吉とは違い、家康にはしっかりした男の子たちが多い。それも、ほとんど成長している。そのうえ、家来たちも力を合わせて働くことが、徳川家の昔からの伝統になっている。

徳川家康は、将軍の位を秀忠に譲ると、自分は駿府（いまの静岡市）の城へ移り、隠居の身となった。

健康な家康は、隠居になっても、実際は幕府のために、いちいち命令をくだしたり、仕事をしたりした。そして、秀忠に、

「わしが死んだのちは、必ず、立派な将軍になるように」

さまざまに教え、うるさく小言もいった。

信長、秀吉と移りかわる世の有様を、四十年も五十年も、家康は見つづけてきた。

しかも、自分は、かわいい子に腹を切らせるほどのつらい思いを、何度もくりかえしながら、ようやくに天下を切りしたがえることができた。

それだけに家康は、六十をこえてからも、忙しく働きつづけ、

「わしが死んだのちも、徳川の天下が潰されぬようにしておかなくては――」

まことに、細かいこころくばりをして、政治の土台を固めていったのである。

たくさんの大名たちが、徳川将軍に背くことがないように、人質もとったし、厳しい態度で

のぞんだ。

家康は、

「百姓たちを、わがままにしてはならぬ」

といい、

「幕府も、なるべく無駄な金をつかわずに、金や銀を、たくさん貯めておかねばならぬ。大名や家来たちにも、めったに、ほうびの土地などを与えぬように」

と、自分でも、質素な暮らしをつづけた。

冬なども、城の御殿にいて足袋もはかず、あかぎれだらけの素足のまま、廊下をあるいていたそうだ。

だから、家康も江戸幕府も、秀吉にまけぬほどの金や銀をたくわえていた。

このように、家康の力が、日本全国をしたがえるようになったのだから、

（大阪にいる豊臣秀頼も、わしに頭を下げるのがほんとうじゃ）

と、家康は思っている。

自分も、信長や秀吉の力の大きさを認めたときは、いさぎよく、頭を下げてきている。それでなくては、いつまた戦争がおこり、天下が乱れるかしれたものではない。

豊臣秀吉の子の秀頼も、二十歳をこえた青年になっており、母の淀君とともに大阪城で暮らしている。

家康の孫の千姫（秀忠の子）も、亡き秀吉との約束どおり、秀頼の妻になっているのだ。
家康は、これまでに、自分が京都へゆくたびに、秀頼へ、
「京都まで、あいさつに出ておいでなされ」
といってやったが、秀頼よりも母の淀君のほうが、
「どうしても秀頼を京都へゆかせるくらいなら、親子いっしょに死んでしまいます」
などと、なかなか、いうことをきかない。
淀君は、織田信長の妹（お市の方）の娘だし、豊臣秀吉の子を生んだ人である。
（むかしは、家康のほうが、頭を下げてあいさつにきたのではないか。秀吉の子が、いまさら徳川へ頭が下げられようか）
という、強い気持ちもあるし、
（家康は、豊臣家があるかぎり、安心できないのだから、秀頼を京都へやったら、殺してしまうかもしれない）
女だけに、そんな心配もある。
けれども、家康が七十歳のとき、京都へでていき、
「京へまいられよ」
と、秀頼にいってやったとき、加藤清正などのすすめもあって、淀君も、やっと承知をし、秀頼を京都へやって、家康にあいさつをさせた。それも、いやいやながらである。

これで、家康の機嫌もいくらかは、なおった。

「秀頼どのは大きくなられて、めでたい」

といい、これからも自分にしたがうつもりなら、りっぱな大名としてめんどうを見てやるつもりだったかもしれない。

ところが……。

このちも、淀君をはじめ大阪城にいる豊臣方は、

「豊臣家は、徳川へ頭を下げるいわれはない」

という態度を崩そうとはしない。そればかりか、新しく浪人者を召し抱えたり、鉄砲や火薬などの武器も買いこんだりしているらしい。

（これは、考えぬといけない）

と、家康は思いはじめた。

まだ豊臣秀吉に恩を受けた大名たちも多いし、いざとなれば、家康に背いて、大阪城へあつまるおそれがないとはいえぬ。

（わしの目の黒いうちに、なんとか、豊臣家の始末をつけてしまわなくてはなるまい）

徳川家康の心が、次第に固まっていった。

豊臣家ほろぶ

家康の決心

一六一四年（慶長十九年）の夏も、終わろうとするころであった。

徳川家康は、

（これが、さいごじゃ）

と、豊臣秀頼と淀君の親子の心を、たしかめてみることにした。

ちょうど、秀頼親子は、京都の方広寺をたてなおしたところで、その寺の鐘楼へかける大きな釣鐘も、できあがった。

この鐘に、彫りつけた文字に、

「国家安康、君臣豊楽」

というのがあった。

「これは、まことにけしからぬことじゃ」

徳川家康は、

「その鐘に彫りつけた文字は、わしの名の家康という字の間に安という字をいれ、わしの名を二つに切ってしまっているではないか。これは、まことに失礼なことである。しかも、その下には豊臣家を天下にいただいて世の中が楽しくなる、という意味の文字がある。これは、徳川将軍家をばかにしているのと、同じことじゃ」

と、豊臣秀頼へ文句をつけたのである。

もちろん、それは家康の勝手な、むりやりの文句であった。

こうして文句をつけて、秀頼母子が自分へ頭を下げてくれれば、よいと思ったのだ。

家康も、七十をこえている。

死ぬ日が、もう目の前にきていた。

(わしが死ぬまえに、はっきりと豊臣家を降参させておかないと、徳川将軍のためによろしくない)

だから、家康は急いでいたのだ。

家康の怒りが、あまりに激しいので、豊臣家からも、

「あの鐘の文字は、けっして、そのような意味を込めたものではありません」

いいわけの使者が、家康のもとへかけつけたが、家康は承知をしない。
家康は、こういった。
「こうなれば、仕方がない。秀頼どのが徳川将軍に従うつもりなら、大阪城から出て、別の国へいってもらう。それでなければ、母ごの淀の方を人質として、江戸へ送ってもらいたい。この二つのうちの一つを選びなさい」
家康の、この言葉をきいた淀君は、火がついたようにおこりだした。気の強いひとだけに、このような家康の言葉に従うことは、どうしてもできなかった。
家康にしてみれば、
（もしも、秀頼が二つのうちの一つを承知したら、許してやってもよい）
と、考えていたのであろう。しかし、
「こうなれば、徳川を相手に戦うよりしかたがない。大阪方が立ちあがれば、なき太閤殿下に恩をうけた大名たちが、きっと味方になってくれるにちがいない」
秀頼も淀君も、豊臣の家来もそう思った。
そして、ついに豊臣秀頼は徳川将軍と手をきる決心をしたのである。
「よし、それならば……」
家康も、七十三歳とは思えぬほどの元気を溢れさせ、
「大阪方を討ち滅ぼすぞ！」

と、いくさがはじまることを大名たちにも知らせ、天下にも発表した。

すでに秋となっていた。

「それ、いくさがはじまるぞ」

「徳川将軍が攻めよせてくる」

「こうしてはいられぬ」

まえから、大阪と江戸との間の雲ゆきがあやしくなっていることを知っていた大阪の町に住む人たちは、大急ぎで荷物をつくり、戦場になる大阪から逃げだす仕度をはじめた。

大阪冬の陣

十月十一日になると、徳川家康は五百人ほどの家来をしたがえて駿府の城を出発し、二十三日に、京都の二条城へはいった。

続いて二代将軍徳川秀忠が、六万の軍を率いて京都へはいる。ほかの大名たちも、ぞくぞくと集まってきた。

こうして、徳川の東軍は、二十万ほどになったのである。

いっぽう、大阪の豊臣方は、どうか……。

「きっと、ほかの大名たちが、味方をしてくれるだろう」

と、思っていたことは、あてにならなかった。

豊臣家に恩を受けた大名たちも、

「いまここで、徳川将軍といくさをするなどとは、まことにばかなことをしたものだ」

はっきりと、いいだすものもいた。

そこで、大阪城にいて秀頼につかえている大野治長兄弟や木村重成、薄田兼相、明石全澄などの豊臣の家臣と、あとは、寄せ集めた浪人たちで、いくさをはじめることになってしまった。

浪人といっても、真田幸村、長宗我部盛親、毛利勝永、後藤又兵衛など、世に知られた武士たちも多い。

したがって、武将としてもすぐれたこの人たちが、兵を指揮して活躍することになったのである。

ことに真田幸村は、関ケ原決戦のとき、父の昌幸とともに、上田城へ立て籠り、徳川秀忠軍をひきうけて、一歩もひかなかった。

西軍が負けたため、幸村は父とともに紀州（和歌山県）の九度山というところへおしこめられていたが、

「ぜひぜひ、味方をしてくれるように」

との、豊臣秀頼のたのみで、十五年ぶりに九度山を抜けだし、大阪城へはいった。

父、昌幸は、すでに九度山で病死してしまったが、幸村の兄の真田信幸は、関ケ原のときから徳川家に従っている。

信幸は、家康の養女を妻に迎えていた。

大阪城へはいった真田幸村は、ほかの武将たちとの作戦会議の席上で、こういった。

「この城へ立て籠ったままで、徳川の大軍を迎えて戦うのはいけません。ほかにも味方の城があるのなら別ですが、われわれには、この城一つしかありません。一つだけの城で籠城のいくさをして勝ったためしは、一度もなかったように思います。こうなったからには、ご一同が力をあわせ、勇気をふるいおこして城の外へでて、大阪へやってくる家康へ攻めかかるべきです」

しかし、この幸村の思いきった作戦も、

「それはあぶない。大阪城は日本一の名城なのであるから、いくら徳川が大軍をもって攻めかかっても、簡単には落とせまい」

秀頼をめぐる豊臣家の人たちは、みな反対をしたので、幸村も黙ってしまった。

こんども、関ケ原の戦いのときと、同じことになった。

ひとりひとりは、強くてりっぱな武将がいても、考えかたが、みんな違う。

そこへ、淀君だの大野兄弟だのという、豊臣家の重臣たちが、いちいち口をさしはさむ。

それらをぴたりとおさえてしまうだけの、偉い総大将がいないのも、同じであった。

それでも関ケ原のときは、石田三成がいて、味方の考えをまとめただけ、まだよかったのかもしれない。

大阪城の西軍は、十万ほどであった。

真田幸村は、後藤又兵衛とともに、

「なんとしても家康の本軍が、京都より、奈良からまわって大阪へはいるまえに、たたきふせてしまいたい。二万の兵をあたえてもらいたい」

強くいいはったが、きかれなかった。

それで幸村は、城の三ノ丸のほりの外へ「真田丸」と名づけた砦を築き、

（ここで、わたしは、自分の兵だけをもって、戦えるだけは戦いぬこう）

と、心を決めた。

徳川家康、秀忠は、やがて、大阪城の南方四キロ（一里）ほどのところにある茶臼山へ本陣をかまえた。

大阪城のまわりのあちこちで、戦いがはじまった。

勝ったり負けたり、城の外では東軍がおしこんでいくが、西軍が城へはいってしまうと、どうにも手がでない。

さすがは、天下の大阪城であった。

ことに「真田丸」では、大将の真田幸村が出ては引き、引いては出る。

いるかと思うと、もういない。いないかと思うと、とつぜんに鉄砲を撃ちかけたり火薬を爆発させたりして、さんざんに東軍を悩まし、東軍の前田、松平の部隊などは、たくさんの戦死者を出してしまった。

家康は、

（このまま戦っていても、とうてい大阪城を攻めおとすのはむずかしい。むりやりに攻めかかっても戦死するものがふえるばかりだ。よし、なんとかしよう）

大阪城を築いたとき、いまは亡き豊臣秀吉は、

「この城を攻めおとす方法は、二つだけじゃ。一つは、二年も三年も大軍をもって城を囲み、城の中の食べものがなくなるまで待つこと。もう一つは、うまくもちかけて、いったん戦いをやめ、そのすきに城の堀をうめ、壊してしまう。そうしておいて、またいくさをはじめて攻めよせれば、もうだめじゃ」

そういったという。

家康は、この二つのうちの一つを選んだ。

そしてまず、さかんに大砲で大阪城をねらいうちにしておいてから、

「どうじゃ。いくさをやめようではないか」

と、西軍へもちかけた。

真田幸村は、

「とんでもない。いまここでいくさをやめるのなら、はじめからしないほうがよろしいのだ」

と、いったが、毎日のように大砲のたまが、城の中へ落ちてきて、ものすごく破裂するので、淀君がおそろしがってしまい、

「ここのところは、いったんいくさをやめたほうがよくはないか」

しきりに、秀頼へ頼む。

豊臣秀頼も、この母の言葉には反対であったが、結局、東軍と講和することになってしまった。

講和の約束は、およそ、次のようなものであった。

一、大阪城の本丸を残し、二ノ丸と三ノ丸にある戦争のための陣地などを壊してしまうこと。

一、大野治長などが、人質をだすこと。

一、そして徳川家康は、城の中の西軍に対して、なんの害もあたえぬこと。

こうして、十二月十九日になると、両軍はいくさをやめることになった。

いくさがおわると、

「それ、すばやくかかれ」

東軍は、大阪城の堀という堀をどしどし埋めてしまい、二ノ丸や三ノ丸の門や櫓なども、たちまちに打ち壊してしまった。「真田丸」も、もちろん壊された。

「これでは、約束がちがう。二ノ丸、三ノ丸だけでなく、城の堀をみんな埋めてしまっては困るではないか」

あわてて、大阪城から使いの者が東軍へかけあいに出かけたが、東軍では、のらりくらりといいのがれる。

また使いの者をだす。

こんども東軍は、なんだかんだといって、ごまかしてしまう。

そんなことをしているうちに、打ち壊しの工事が終わってしまい、ついに大阪城は、本丸だけの丸裸になってしまった。

本丸というのは城の中心のところで、天守閣もここにある。

だが、いくら天守閣が空にそびえていても、回りの堀が埋めたてられ、いくさのための施設がなくなってしまっては、城が城の役目を果たすことができないのは、当り前のことであった。

大阪夏の陣

年があけて、一六一五年（元和元年）となった。
徳川家康は、二月になって、駿府の城へ帰ってきたが、
「城の中にいる浪人たちを、みんな追い払ってしまいなさい」
と、大阪へいってきた。
怒ったのは豊臣家の人よりも、寄せ集めの武将や浪人たちである。
「約束を破って、城を丸裸にしておきながら、よくもよくも、そのようなことがいえたものだ」
「家康は、あきらかに、またもいくさをしかけ、この城を攻めつぶそうとしているぞ」
「しまったことをした。講和などするのではなかった」
「いまさら、そんなことをいってもおそい。こうなったら、こっちも早く、いくさのしたくをととのえておかぬと、なおさらにこまったことになるぞ」
まったく、することなすことに、大阪方は間が抜けている。
いつも秀頼のそばにつかえている重臣の大野治長などは、
「ここのところはがまんをして、家康も、もう年よりなのだから、家康が死ぬのを待つほうがよい」
と、思っていたらしい。
総大将の豊臣秀頼は、二十三歳になっていたけれども、小さいときから母の淀君にあまやか

されているうえに、

（自分はこうしたい）

と、思っても、それを実行する力にかけている。つまり気が弱いのであった。

またも、新しく浪人たちが集められた。関ケ原いらい、主人を失った武士が、どこにでも溢れている。

「大阪のいくさに加わって手柄をたてれば、うまくゆくと、一国のあるじになれるかもしれぬぞ」

と、浪人たちは野心に燃えて集まってきている。

また、仕度の金をもらって城へはいっても、

「金さえもらえば、用はない。どうせ大阪方は負けるのだ」

さっさと、逃げだしてしまうものもいた。

春も過ぎようとするころ、徳川家康は、

「大阪では、またもいくさの準備をしているそうな。まことにけしからぬではないか。よし、それほどにわしと戦いたいのなら、こちらもだまってはいないぞ」

などと文句をつけた。すべては、家康の思うように運んだのである。

「それ、大阪城を攻め落とせ！」

家康は、ふたたび大軍をひきいて、大阪へ出発した。こんどの東軍は、十五万五千ほどの兵

力であった。

　また東軍をむかえうつ大阪城の西軍は、五万とも七万ともいわれている。おそらく戦場に出たのは、五万ほどであったろう。

　この最中に、

（なんとかいくさをしないで、すませないものか）

と、思っている大野治長が、くせ者におそわれ、重傷をうけるというさわぎがあった。

けれども治長の弟の治房は、

「戦うべし！」

と、叫んでいる。

　大阪城の中は、このように足なみがそろわず、しかも徳川家康にこころをよせて、城中の様子をひそかに東軍へ知らせているものもある。

　東軍では、七十四歳にもなる家康が、

「戦いは気力である。わしは、いざとなったら二十三歳の豊臣秀頼と一騎打ちの勝負をして、くみうちをやっても負けぬつもりじゃ」

　らんらんと目を光らせ、みずから、戦場へでて全軍を指揮しようというのだから、大阪方とは、まるでちがっていた。

　戦いがはじまると……。

こんどは西軍も、大阪城へ入っているわけにはいかない。丸裸の城へはいっていても、負けるだけだ。

それで、こちらからも攻めかけようというので、大和と河内の二つに別れて進んでくる東軍へ、いくさをしかけた。

大阪方の塙直之が、和泉、樫井の戦いで戦死をした。

つづいて、五月六日になると、道明寺、八尾、若江堤などの戦いで、後藤又兵衛、薄田兼相、木村重成など、大阪方でも「これは」と思うほどの立派な武将たちが、あっけなく戦死をしてしまったのである。

どうも、大阪方の作戦は、いちいち家康の耳へ、漏れていたらしい。

なにしろ、浪人者などをたくさん集めている西軍であるから、東軍のスパイが、浪人者になって城中へ入りこむことなどはたやすいことなのだ。

このときも真田幸村は、戦場にでていたが、作戦のうちあわせが、どうもうまくいかない。

「こうなれば、あしたの決戦におもうさま戦いぬいて、死ぬまでじゃ」

幸村は、兵をまとめて引きあげた。

五月七日の朝になった。

現代の暦では、六月三日にあたる。

真田幸村は、この前の冬の戦いのときに、家康の本陣があった茶臼山まで出て、ここへ陣を

かまえた。これが西軍の最前戦となった。
家康の本陣は、平野にある。
茶臼山と平野との距離は、一里あまり（五キロほど）であろう。
幸村は、この日の朝、わが子の大助に、
「おまえは城へ戻り、秀頼公のおそばにつかえていなさい」
といい、
「父上といっしょに戦死をしたいのです」
なかなかに、承知をしない大助を、やっといいきかせて、大阪城へかえした。
幸村が率いる真田部隊は三千五百で、いずれも赤の旗をたて、赤の鎧に身をかため、
「あれが真田だ」
東軍にも、ひと目でわかった。
やがて、猛烈な鉄砲の音がおこりはじめた。
真田隊がいる天王寺口を中心に、両軍が一斉に動きだし、戦いはじめた。
真田幸村は、
「きょうは、最後の決戦ですから、秀頼公も西軍の総大将として戦場へでていただきたい。大将があらわれぬいくさでは、味方の勇気もおとろえてしまいます」
くれぐれも大野治長へ頼んであったが、ついに豊臣秀頼は、城の中から出てこなかった。

それに、うちあわせた作戦も、幸村の思うようにはこばない。なにもかも、寄せ集めの軍隊で、あるから、十分に連絡もとれない。

「もう、これまでじゃ」

幸村は、槍をつかみ、

「つづけ！」

まっさきに馬をあおって、戦いのうず巻きの中へ突きこんでいった。

幸村に続く真田隊だけは、

「幸村公とともに死のう」

みんな気がそろっているから、これも、すさまじいときの声をあげて東軍の中へ突撃する。

毛利勝永の部隊もこれをたすけ、三倍もの敵の中へ、キリをもみこむように進んで戦う。

「大御所（家康）の本陣へ、まっしぐらにすすめ」

と、幸村は、

（こうなれば、家康の首を狙って、さいごの戦いをするばかりだ）

思いきわめているから、まるで魔神のようなおそろしい戦いぶりで、五十歳の幸村がふるう槍先に、東軍の兵たちは、血しぶきをあげてたおれる。

「わあっ……！」

赤ぞろえの真田隊は、自由自在に敵中を突破し、

「あっ、御本陣があぶない！」

東軍の叫びをよそに、猛然として家康の本陣へ襲いかかった。

「真田の兵は、日本一である」

と、このとき東軍にいた、薩摩の島津家では書き残しているほどだ。

あまりにも幸村の突進がおそろしいので、家康をまもっていなくてはならぬ旗本の武士たちが、あわてて逃げだした。

ひどいのになると、大将の家康をすてて、十二キロ（三里）も逃げてしまったという。

いかに、真田隊の働きがおそろしいものであったかが知れよう。

徳川家康も、一時は、

「もういかぬ。わしは、ここで腹を切るから、だれか、わしの首をうって敵にわたさぬようにしろ」

と、覚悟をきめたといわれるほどだ。

しかし、危ないところで、家康は数人の家来にまもられ、逃げることができたのである。

どんなに真田幸村が強くても、人間の力には限りがある。家来たちも、ほとんど戦死をしてしまい、朝から戦いつづけている幸村も、いくつもの傷を受けてつかれきってしまった。

そして、幸村は、ついに敵に首をうたれてしまった。

幸村は別としても、西軍はこの日の戦場ではよく働いた。

両軍で、二万数千の戦死者がでたほどの激戦であって、この日のいくさに限り、関ケ原とはくらべものにならぬ西軍の働きだったといえよう。

家康ばかりではなく、将軍秀忠も逃げだしたほどであった。

東軍では、なんといっても松平忠直（越前、福井の城主）の部隊が勇敢に戦い、真田、毛利の西軍の力をそいだ。

松平隊の奮戦がなかったら、家康はもっと危ないことになっていたろう。

真田幸村の戦死をさいごに、西軍は、どっと乱れはじめた。

こんどは東軍がおしかえし、ついに大阪城のまわりをひしひしと取り囲んでしまった。

大阪方では、家康の孫で、秀頼の妻になっている千姫を東軍へ送りかえし、

「なんとか秀頼公親子の命だけは、たすけていただきたい」

と、申しこんだが、

「ならぬ」

家康よりも、秀忠が承知をしなかった。

翌日の五月八日。

大阪城は火に包まれ、秀頼も淀君も、城中の蔵の中で、自殺をしてしまった。

大野治長などの家来、三十人あまりも、主人親子とともに死んだ。真田大助がこの中にいたことはいうまでもない。

こうして、豊臣家はほろびた。そしてこの戦争は、長い長い戦国時代が終わったことを、はっきりと示すものであった。

家康の死

豊臣家ほろびてのち、大阪城へは、徳川家康の孫にあたる松平忠明が城主としてはいった。

家康は、

「諸国の大名は、本城一つだけをもっていればよい。あとの城は取り壊すように」

と、命令をくだし、さらに、全国の武士（大名をふくめて）に対するおきてをつくった。これを「武家諸法度」とよぶ。

さらに……。

皇室と公家にも、同じようなおきてをつくり、天下に発表した。

すべては、徳川将軍の力を強く固めるためのものである。

こうして、江戸幕府が日本の政治をとりおこなうことについて、家康は死ぬまぎわまで、働いた。

（わしは、もう、つかれはててしまった……）

大阪の戦争がすむと、さすがに家康も、体力の衰えを感じないわけにはゆかなかった。

それでもなお、家康は、秀忠のつぎの、徳川三代目の将軍についてまで、心を砕いた。

そして、秀忠の子、竹千代をもって、

「三代将軍とする」

ことにきめた。竹千代は、のちに三代将軍家光となる。

このため、家康は駿府の城をでて、わざわざ江戸城へ出かけている。しかも、大阪戦争がおわった年にである。

年がくれ、年があけた。

一六一六年（元和二年）の正月を駿府の城で迎えた徳川家康は、七十五歳になった。

家康は、信長や秀吉のように、贅沢で華やかな趣味や遊びには、あまりこころをひかれなかったけれども、若いころから狩りは大好きであった。

「狩りに出れば、体のためにもよいし、ついでに村や土地のようすを見ることができて、政治をおこなうのに、いろいろとためになる」

と、よくいっていた。

ところで、正月の二十一日。

狩りにでかけた家康は、その夜も更けてから、急に食べたものを吐き、苦しみはじめた。

むかしの本によると、京都から、家康と親しい茶屋四郎次郎という商人が駿府の城へやってきて、家康に、

「このごろは、京のみやこで、めずらしい料理が流行しておりまする」
と、いう。
「ほう。それは、どんな料理じゃ」
「タイの切身を、ごまの油であげて食べまする。まことに、おいしいものでして……」
つまり、タイの天ぷらというわけだ。
家康は、さっそくタイをとりよせ、天ぷらにして食べてみると、
「これはうまい。このようにうまいものがあるとは、知らなんだわい」
あまりにおいしいので、食べすぎて、腹をこわしてしまった。疲れがまだ治りきらぬ七十五歳の老いた体だけに、
「どうも、いかぬ」
なかなか、病気はよくならなかった。
二月、三月とたつうちに……。
（わしのいのちも、もうこれまでらしい）
と、家康は覚悟をしたらしい。
大名たちに、こういいのこした。
「わしは、まもなく死ぬであろう。なれど、将軍（秀忠）が天下を治めているから、わしは心配をしていない。しかし、もしも、将軍のすることに間違いがあるようなときは、みんなが将

軍にかわって天下のことを治めるがよろしい」

きっぱりと、いった。

わが子の秀忠が、将軍としての力がなかったら、構うことはないから、これをしりぞけて、大名たちが天下を治めよ、といったのである。

そして、

「天下は（日本の国）ひとりの天下ではない。天下の天下であるから、わしはけっして恨みには思わぬ」

ともいっている。

そして、こんどは秀忠を呼び、

「天下の政治については、すこしも道をはずれたことをしてはいけない。わしは、大名たちにいっておいたぞ。秀忠の政治が悪ければ、みんなで、かわって政治をとれとな」

「はい、よく、わかりました」

「わかっておればよい。しかし、大名たちが、こののち、将軍の命令に背いて、とりきめた月日に江戸へでてこぬようなことがあれば、たとえ、徳川の親類であっても許してはいけない。ただちに軍隊をさしむけて、討ち滅ぼしてしまえ」

きびしく、いいのこした。

伏見城で、豊臣秀吉が死ぬとき、

「秀頼をたのむ、たのむ」

と、家康はじめ五大老に手を合わせて頼んだことと、死を前にした徳川家康のようすとをくらべて見て、読者は、どのように思われるであろうか……。

もちろん、家康の死にぎわのほうが「立派」だと思われることだろう。

けれども、秀吉の子の秀頼は、あのとき、まだ六歳の幼い子どもにすぎなかった。

家康の子で、すでに将軍になっている秀忠は、このとき三十八歳にもなっていたのだ。しかも、秀忠の跡を継ぐべき将軍もきまっている。

家康にとっては、死をまえにしてのこころも、おのずから秀吉とは違っていたことを、よく考えて見なくてはなるまい。

秀吉は、天下をとってからも、つぎつぎにこころいそがしく、城を建てたり戦争をしたり、一時も、じっとしていられないところがあった。そして、やっともうけた子が、まだ六つにしかならないのに死んでいったのである。この世に心が残ることも多かったことであろう。

二人には、そうした違いがある。

徳川家康は、若いころから刀や槍をつかんで戦場で戦いぬき、血みどろの苦労を重ねながら、信長や秀吉のすることをじっと見守ってきた。

二人のよいところも、悪いところも、じゅうぶんに見きわめ、自分の力を大きくすることに役だてていけたのである。

体も丈夫で長生きをし、信長と秀吉がまとめた天下を引き継ぐという幸運もあった。その幸運も、家康の力がつかみとったものではあるが……。

四月十七日の午前十時ごろに、徳川家康は、駿府の城で息をひきとった。

その遺体は、久能山へ移され、さらに翌年の春になると、下野（栃木県）日光山へ移された。

日光の東照宮は、家康を神さまにしてまつった神社である。

こののち、徳川将軍は十五代もの長きにわたって続き、日本を治めた。

日本は外国との交際をやめ、国をとざした。そのため二百五十年の間も、ほとんど国内に戦争騒ぎがおこらなかった。

この意味では、この時代の世界の国々の中でも、日本は、ただ一つの平和な国であったのである。

そうして、よいにつけ、悪いにつけ、この長い長い平和は、日本だけがもつ、独特の文化と国民性をつくりあげることになった。

解説

縄田一男

去る者は日々に疎しというが、本書『信長と秀吉と家康』の作者池波正太郎にとってこれほど無縁の言葉もないだろう。

今年は、平成二年五月三日、急性白血病で逝った作者の三回忌になるわけだが、中村吉右衛門主演の「鬼平犯科帳」（フジテレビ）は既に第三シリーズの放送を終え、第四シリーズの収録がはじまり、『池波正太郎短篇コレクション』（立風書房）や『剣客商売全集』（新潮社）の刊行と、その早過ぎた死を惜しむ企画は後を絶たない。人生五十年といわれた昔ならともかく、存命ならば作家としてますます成熟の度合いが深まったに違いないからだ。

それにしても、池波正太郎は、常に斯界の斬新なアイデア・マンだったといえるだろう。これは何も、奇抜な味を狙っていたということではない。捕物帳なら捕物帳、剣豪小説なら剣豪小説の系譜を踏まえた上で、そこに他の作家がマネの出来ない様な新味を盛り込む——例えば、『鬼平犯科帳』の「犯科帳」ということばは、本来、長崎奉行所の刑事判決を指すものだ

った。ところが、作者がひとたびこれを新たな連作の題名に用いるや、それが、従来の親分・子分といった類型の上にあぐらをかき、千篇一律の如き謎とき小説に終始していた捕物帳に、リアルな人間関係を持ち込むといった内容の一新にもつながっていたのである。

また、『剣客商売』というタイトルにも、本当ならば、武士の魂とすべき剣の道を、所詮は、たつきの道と割り切る姿勢が打ち出されているし、そこにまた、剣を表看板として生きていくことのきびしさも、凝縮されていたはずである。

更に、作者が愛好していたフランスのギャング映画の感覚で、時代ものの世界に暗黒街を想定、はじめて金で殺しを請け負う殺し屋を登場させた『仕掛人・藤枝梅安』と、常にセンスの良さが、そのまま内容の充実を約束していた様に思われてならない。

と、こう書くと、池波正太郎は、いつも新しいものの創造ばかりを目指している様に思われる向きもいるかもしれないが、それは少し違う。片方の眼で、時代ものにモダンなセンスや趣向を盛り込みつつも、もう一方の眼で過去の時代を見据え、その両者の振幅の中に人間不変の姿を見つめたからこそ、池波正太郎作品は、これほどまでに多くの読者に受け入れられたのではあるまいか。

このことを手っ取りばやく、ある池波正太郎作品の登場人物の言葉を借りて示せば、

「男というものは、それぞれの身分と暮らしに応じ、物を食べ、眠り、かぐわしくもやわらか

な女体を抱き……こうしたことが、とどこおりなく享受できれば、それでよい。いかにあがいてみても人は……つまるところ男の一生とは、それ以上のものではない。――以下略――」

ということになる。

この一節の中の〝男〟を〝女〟に変え〝かぐわしくもやわらかな女体を抱き〟を、〝たくましき男に抱かれ〟とでもすればここにいわれていることは、男女を問わぬ人間不変の姿、すなわち、あらゆる歴史の中で、人間生活の基本となっている〝衣・食・住〟に他ならない。

つまり、池波作品というものは、人間を、最もその卑近なレベルにまでおとすことからはじまっていたのではないのか。誤解のない様にいっておくが、ここでいう〝おとす〟ということは、貶(おとし)めることとは違う。寝て、食って、子供をつくって――煎じつめれば、それだけでしかない人間というものが、人生の究極にある死に向かって、どれだけ己れ自身の生を充実させることが出来るのか。作品の行間から立ちのぼってくるのは、正しくそんな素朴な語りかけなのである。

また、この様に、作品を人間の〝衣・食・住〟を軸として据える発想は、様々な諸作で、この作家特有の庶民的な生理感覚を生み出していくことになる。

誰しも池波正太郎作品に登場してくる食事の場面に、思わず舌鼓を打った経験があるだろう。また、読者がそう感じた時が、作中人物同様、これまた作者の言を借りれば「一椀の味噌

汁にも生の充実や幸福がある」と感じている時ということが出来るのである。そして、こうした観点から捉えられてしまえば、歴史上のヒーローも、私たちも、同じ一個の人間という他はない。

食に関する描写以外で例を挙げれば、長篇『おれの足音――大石内蔵助』のラストで、吉良邸に討ち入った赤穂浪士が、遂に憎っくき吉良を見つけた時、内蔵助の脳裏に浮かぶのは、亡き主君の面影でもなければ、敵討に心を砕いた歳月でもない。己れの生を充実させてくれた妻りくの豊満な肉体なのである。何と人間臭い描写だろうか。そして、これほど歴史のヒーローを私たちの身近に感じさせてくれる描写は他にはあるまい。

そしてこうした、有名無名の差はあっても、生理面から見れば、等しく同じ存在である人間ひとりひとりがつくり出す生活のリズム、すなわち、日常でのふるまいの一つ一つが、更に大きな生理＝世の中の約束ごとをかたちづくっていく。『鬼平犯科帳』の中に生まれるサスペンスは、しばしばそうした生理に背を向けたために生じるのであり、仕掛人たちは、その約束ごとの帳尻を合わせるために、〝許せぬ悪〟を闇に葬るのである。その意味では、長谷川平蔵と藤枝梅安は、立場こそ違え、表裏の存在であり、このことは、何より、作者が彼らにいわせている〝悪を知らぬ者が悪を裁けるか〟とか〝人間はいい事をしながら悪い事をしている〟という言葉が端的に証明しているといえるだろう。池波作品の主人公に清濁併せのむタイプが多いのは道理である。

そして、今述べたことは、本書『信長と秀吉と家康』にも、充分、当てはまるのだ。本書は、昭和五十八年二月、東京文藝社より刊行された単行本を底本としているが、もともとは、年少の読者向きに書かれたもので、信長→秀吉→家康と続いた天下取り三代の構図をリレー式に活写。本書の刊行によって池波正太郎の全長篇が入手可能となったはずである。

が、年少の読者向けといっても、作者がまったく手を抜くことなく、天下統一の歴史を語りつつ、独自の視点でこの三人の武将を捉えていたことは、本書の内容が、エッセイ集『男の系譜』の中で、それぞれ、信長、秀吉、家康を語った、

戦わなければ生きてゆけないから戦った、そして近隣の敵を倒して自分が実力者になったとき天下を治めようという理想がでてきたわけですけれども、信長は、それで日本の国民たちを全部幸せにしてやろうなんて、いまの政治家みたいに馬鹿みたいなカッコイイことは決していいませんでしたよ。

とか、

そうこうしているうち（朝鮮出兵や豊臣家の内紛等）に、秀吉は死ぬわけだが、そこで秀吉の人間的魅力が出てくるわけですね。臆面もなく、何ひとつ糊塗することなしに、全部さら

け出して、最後には弱々しく子どもの秀頼のことを心配しながら、泣きながら……そういうことは、いくら飛んでも跳ねても家康にはできないんですよ。

とか、或いは、

しかし、どんなに苛酷な税金を取り立てても、まだしもいいですよ、戦争に比べれば。戦争があると、税金よりたまらないからね、農民としては。その戦争を失くしたということは功績だと思いますよ。信長、秀吉、家康は。近代社会が政治的にそれを解決して農民、万民の幸福を願うというのとは本質的に違うとしても。

等という箇所に自然にスライドしていくことからも了解されよう。

そして、池波作品が私たちに伝えてくれるのは、この三人の武将すらも、畢竟、「一椀の味噌汁に生の充実や幸福がある」と感じた一個の人間に他ならず、それこそ、「それぞれの身分と暮らしに応じ」、天下取りの野望に燃えて己れの生の充実をはかり、その過程で「いい事をしながら悪い事もし」ながら覇をきそい続けたということなのだ。その結果、この三人が、衣・食・住よりも、世の中の約束ごとよりも、もっともっと大きい生理である歴史というものを、つき動かして来たのだといえはしまいか。

その意味で、本書もまた、紛れもない池波正太郎作品なのであり、特に豊臣秀吉の人間臭さにはそのことを痛感された読者も多いのではないだろうか。

私たちと等身大の覇者たちの姿を通して、人間と、その人間の営みがつくり出して来た歴史の意味を、見事に語ってくれた一冊――年少の読者向きに書かれたとはいえ、池波正太郎作品の、これも収穫の一つなのである。

（文芸評論家）

この作品は、一九八三年二月に東京文藝社より刊行された。
なお、文庫化に際し、一部平仮名を漢字に改めた。

著者紹介

池波正太郎（いけなみ　しょうたろう）

大正12（1923）年、東京に生れる。昭和30年東京都職員を退職し、作家生活に入る。新国劇の舞台で多くの戯曲を発表し、35年第43回直木賞を「錯乱」によって受賞。52年第11回吉川英治文学賞を「鬼平犯科帳」その他により受賞する。63年第36回菊池寛賞受賞。作品に「剣客商売」「その男」「真田太平記」〝必殺仕掛人〟シリーズなど多数。平成２年５月３日急逝。

PHP文庫　信長と秀吉と家康

1992年８月17日　第１版第１刷
1997年１月28日　第１版第36刷

著　者　池波正太郎
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　〒102 千代田区三番町３-10
第一出版部　☎03-3239-6221
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431
組　版　朝日メディア㈱
印刷所
製本所　図書印刷株式会社

© Shotaro Ikenami 1992 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-56488-7

実力派のパートナー　PHP文庫好評既刊

戦国 名将の条件・参謀の条件

百瀬明治

名将にみる出処進退の時機とは？　乱世にあるべき二世像とは？　命運を分ける戦略とは？　等々の視点から、戦国の歴史ドラマを緻密な文体で描き出す。文庫オリジナル版！

定価480円
（本体466円）

足利尊氏
乱世の行動学

百瀬明治

室町幕府の初代将軍、足利尊氏。とかく誤解されがちな彼の生涯に新しい光を当てたのが本書。己れの一生の目標のために、あらゆる手を尽くしその知力と行動力に学ぶ。

定価540円
（本体524円）

豊臣秀長（上巻）
ある補佐役の生涯

堺屋太一

世に名将・名参謀といわれる人物は多いが、名補佐役はきわめて少ない。戦国乱世に兄・秀吉を天下人たらしめた人物・豊臣秀長の全生涯にスポットをあてた歴史巨編。

定価520円
（本体505円）

豊臣秀長（下巻）
ある補佐役の生涯

堺屋太一

日本史上最も有能な補佐役ながら、これまで知られることのなかった人物・豊臣秀長。兄を天下人たらしめ、豊臣政権を支え続けた男の一生を克明に描いた待望の完結編。

定価600円
（本体583円）

定価は将来、改定されることがあります。

9784569564883

ISBN4-569-56488-7

C0193 P560E

定価560円(本体544円)

1910193005609

信長と秀吉と家康

池波正太郎

「人間五十年。下天のうちをくらぶれば、夢まぼろしのごとくなり」と、乱世を疾駆した織田信長。その夢と理想を受け継ぎ天下を統一した豊臣秀吉。そして盤石の幕府組織の確立に取り組み、手にした天下を末永く子孫に伝えた徳川家康。

「時代小説の仕掛人」がリレー式に、天下統一をなしとげた三代の英傑の戦いと統治の構図を克明に描き、等身大の視点で生き生きと彼らの人間像に迫る。池波正太郎作品唯一の絶版長編、待望の文庫化。

PHP文庫